



62
382

東京專門學校
學科部講義錄
西洋倫理學史
綱島榮一郎

3 1 0 4 1 2 0 0 0 0

6 2 3 8 2

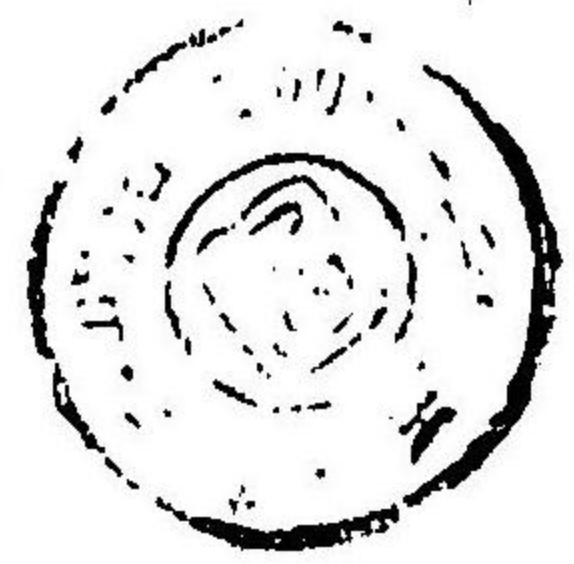
西洋倫理學史

綱島 榮 一郎 講述

網島榮一郎講述



西洋倫理學史



東京專門學校出版部藏版

目次

第一章

緒論

第二章 希臘及希臘—羅馬の倫理學

第一節 ソークラテース以前の倫理學

第二節 ソークラテース、プラトーン、アリストテレスの倫理學

メガラ學派

ピタゴラス學派

ストア學派

新プラトーン派の倫理說

第三章 基督教及中世倫理學

基督教道徳の大綱

西洋倫理學史 目次

教會の思想の變遷……………一七九
暗黒時代に於ける教會道徳……………一八八
スコラ學派の倫理觀……………一九一
中世紀の神秘派……………二〇六

第四章 近世倫理學

第一節 實驗的倫理學說

フランシス・ベーコン……………二一九
グロージウス……………二二五
トマス・ホッパス……………二二七
カドナルス……………二三九
ヘンリ、モーア……………二四三
リチャード、カムパ・ランド……………二四六
ジョン、ロウツ……………二五一
サミュエル、クラーク……………二六一
シャフツベリー……………二七〇
マンド井ル……………二八三
バトラー……………二八四
チャラストン……………二九七
ハッチソン……………三〇一
ヒラム……………三〇九
アダム、スミス……………三三二
ハートレー……………三三〇

第二節 純理哲學派倫理說……………三三九
デカルト……………三三九
アルノール、ゲエラン……………三四四
マルブアラン……………三四六
スピノーザ……………三四九
ライブニッツ……………三五九
チルフ及獨逸一新時代の倫理觀……………三七一

第三節 獨逸理想派倫理說

カント……………三七五
ファイヒテ……………四〇四
ヘーゲル……………四一一
シューイェルマイヘル……………四二〇
ショースマン、ワヘル……………四二六
ハルトマン……………四三〇

第四節 獨逸實在派倫理說

ヘルバルト……………四三五
ルードウヰッヒ、フォイエルマン……………四四四

第五節 佛國倫理說

ヘルゼンヌス……………四四九
ルソー……………四五三
コント……………四五四
クザン……………四六三

第六節 第三期英國倫理說

其一 直覺派倫理說……………四七三
フライス……………四七三
リード……………四七九

其二 功利派倫理說……………四八六
タッカー……………四八七
マレー……………四九〇
ベンザム……………四九二
ミル……………五〇一

其三 進化論的倫理説……………	五二一
ダルウヰン……………	五二一
スペンサー……………	五二三
スティーヴン……………	五二一
五二四	
其四 超越的倫理説……………	五三二
ケリーマン……………	五三二

四

西洋倫理學史

網島榮一郎 講述

第一章

西洋倫理學史を講ずるにあたり順序として先づ倫理學の何たるかを講ずべきなれど茲には之れを略すべし。其は倫理學は如何なる事を考究すべき學なるか其の考究の主題對象となるもの又なるべきものは何ぞといふ事は西土に於ける二千餘年間の倫理思想を披陳する事によりて自から明瞭なるべしと思へば也。唯だこゝには緒論として西土古來の倫理問題の如何なる方面に至れるかを摘要し因りて以て倫理學の性質目的範圍の一斑を陳ぶる所あらんと欲す。

本稿はヘンリー・シヤヰックの『倫理學史』を骨とし、ウヰントの『倫理學』(就中其の第二卷)ノオールの『道徳の原理』(就中其の初代の『英國倫理者』の部)バートソンの『アリスチテレスによるリスハンサーまでの快樂派倫理説』、フエンヤルメンの『哲學史』、コートチーの『コンストラクチヴ、エシックス』(其の獨派倫理説の部)等によりて之れを補へり、尙ほ Reid 及び Hegel 諸家の『倫理學史』にも參して其の不備を補ふとあるべし。

緒論

倫理學即ち英語の *Ethics* (Ethics) は希臘語の *ἠθική* (*ethiké*) より由來せる語にて其の意義は専ら人の品性、智識とは別なるに關する學の意義なりし也(エーティカの語は習慣の義なる *ἔθος* (*ethos*) といふ語より來たれるもの也)されど件の品性の義を解してむねと徳もしくは不徳に關するものとなさば是れ意義を誤れるものといふべし。其はアリストテレスの所謂品性の義は更に之より廣濶なる意義を含みたるにて徳若くは不徳の義は寧ろ其一部分たるに過ぎざりしが故也。即ちアリストテレス及び當時一般の學者の見に従へば倫理學の考究の主題とする所は人に關して絶對に善きもの、絶對に望ましきもの、即ち他の何等かの目的を達する具としてにはあらで其者自身に價値ありと見て道理上人の撰擇すべきもの凡てを意味せるなりき。こゝに特に人に關してといへる形容辭を下だせるは倫理學を以て宇宙の絶對善を考究の主題となす哲學、神學と區別せんが爲めに外ならず。倫理學も善といふとを考究の主題とするものなれど其の所謂善は人間の善にして宇宙の善にはあらざる也。かくの如く倫理學と哲學其の考究の主題

とする所はおのづから明瞭なるに似たれど件の二學の區別は倫理學史上の難問の一とも見るべくプラトインの哲學にては尙ほ倫理學と哲學との相交錯して存せりしを見る之れを明かに區別せしはアリストテレスを以て嚆矢となすべし。此の如く件の二學は其の對境の性質によりて區別せらるべきものなれど嚴密にいへばさしも截然分別せらるべきものにあらず。如何にとなれば宇宙に究竟目的即ち究善ありと見る哲學系は其が必然の論理として人の究竟目的と件の宇宙的目的との關係を繹ね之れを一如の原理に攝して説かざるを得されば也。

此くの如く希臘時代にありては倫理學を以て重に人間の究善に關する學となせしか此の見解は未だ以て倫理學と政治學と區別するには足らず。何となれば政治學も亦同じく國家の一員としての人の善即ち利福を其の考究の對境となせば也。されば近世の學者のうち倫理學即ち *Ethics* の語を廣義に解して之れに政治學の一部を含ませたるものあり。此の派の學者は國家の究竟目的及び政治上の制度の善惡を判ずる考究をも倫理學の一部に外ならずと解する也。されど又普通には倫理學を狹義に解して或學者は特に *Private Ethics* の目を用ひて倫理學を

政治學より區別せり個人の力によりて達し得らるべき人の目的(即ち利福)を攻究するものとやうに見る也。要之政治學と倫理學との關係の密なるは論ずるまでもなく二者の截然區別しがたきは其の何れの一面よりするも二者の域を定めがたきによりても知らるべし。個人とは何ぞや。畢竟するに是れ社會的政治的團體の一員に外ならずや。所謂徳といひ不徳といふも重に社會の一員としての人が他に對する行爲に名づける稱謂にして其の快不快と稱するもの、大部分もまた要するに我れと他との關係より來たるを見る也。随つて個人の最高目的の主要素と見らるべき徳又は快樂其者も社會の利福安寧を外にせる孤立的、寺院的生活によりて獲らるべきものにあらざるは勿論也。之を倫理學に於ける政治的一面とも見るべし。次に之れを政治學の方面より見るも政治學の主なる目的は要するに現未に於ける個人として、市民の利福を推進することに外ならず。随つて個人の利福の攻究は又實に政治學の中樞をなせるの觀ある也。此くの如く二學の關係には離るべからざる點ありといへども尙ほ其の間に明かなる一線を劃し得ざるに非ず。概言すれば政治學は政府といふ政治的機關によりて國民全

體の目的を實現する方法を講ずるを主眼とし倫理學は個人として達し得らるべき倫理上の目的を攻究の主眼となす。國民全體の目的を實現せんには如何なる政治上の制度を善とすべきかを攻究するは政治學にして個人の道徳的行爲の何たるを攻究するは倫理學なり。一は國民全體に着眼し他は個人の行爲を其の起點となす。此くの如くにして吾人は或る點まで倫理學を政治學より區別し得る也。

以上の如く各個人を政治的團體より區別して之れを倫理攻究の對象となすことを得ば次いで起こるべきは倫理學と心理學との關係なり。按ふに人の主なる利福は富貴または權勢などいふ外物に存せざるは健康あり富ありて尙ほ不幸の運命を啣つもの、實際に多きを見ても知らるべし。又吾人は通常外部に現れたる結果より見て行爲の善惡を判断することあれど此かる判断の皮相にして誤り易きは言ふまでもなし。むしろ人の行動の道徳的に善といはれ惡といはるべき主要素はかゝる外面の結果にはあらで件の行動者の心の状態、即ち其の目的動機意志、性癖などの或状態に繋りて存するなり。次に其の外部に現れたる結果より

いふも眞に道徳的に善もしくは悪と判せらるべき行動は常に自他の感情又は品性に或感動を及ぼすべき傾向を有するものなるを見る。此の如く倫理研究の對象は主として其が人の心的方面に關したるものなるを知るべし。而してこれは幾んど凡ての倫理學者の一致する所也。詳言すれば倫理學者の主張する點は(第一)人生の究竟目的は感情としての生活即ち快樂にありとするにあるか然らざれば(第二)に人の幸福は心の活動の性質即ち徳にありとするかの一を出でざるを見る。而して吾人若し此等の見解を一般明瞭に剖析して一個の組織的倫理説に爲あげんとせば更に進んで第一に、快樂の種々の質及び量につきて第二に、種々ある徳の性質及び其が相互の關係につきて心理的攻究をなさざるべからず。且つや吾人は善を以て理性に照らして道理上撰擇すべきものと見て他の一時の衝動もしくは感情の沙汰にて撰擇するものと區別するを常とす。而して件の合理的撰擇といひ衝動といふものも之れを精査し來たれば其の別やいまだ明かなる者にあらず。或は人の行動の究竟動機は智にあらざして情にありといふ。以爲へらく智は比較し思量す。されど毫も行動の動機となるものにはあらず。人を動かすも

のは唯だ感情あるのみと。(此の見はヒウムなどの明かに主張せる所也)。されば此にも明かにすべきは倫理上にいふ理性は如何ほどの意義を有するものなるか合理的行動に於ける智の作用は正當には果たして如何程なるべきかといふ事なりとす。中にも件の合理的と稱せらるゝの作用と理性を離れて(少くとも其の一部は)起こり若しくは之れと衝突する欲求嫌惡の情との關係は心理學上如何に解明すべきかといふ事其の一問題たり。

心理的研究の要は是れに止らず人の眞の善即ち望まじきものは何ぞやとの問題に關して多くの倫理學者は直に之れを人の實際に欲望しつゝある經驗より之れを抜き出ださんとす。快樂は人の實際に欲望しつゝあるものなるが故に快樂は即ち善なりとやうに断ずるは其の一例也。これ眞の善は人の自然に之れを擇びつゝあるものに外ならずといふ假定を據とすれば也。而してこれやがて欲望と善との關係及び人は果して實際に快樂を欲望しつゝありやなどいふ心理問題に外ならざる也。此の如く倫理上の攻究は種々の方面より心理の學と接觸す。切に言へば凡ての主要なる倫理的觀念は同時に又心理的觀念たるを見る也。唯だ

善惡若しは正邪などいふ價值に關する根本觀念につきては心理學は之れに一指をだに染むるの權なし。故如何にとなれば心理學は單に心的事實の跡をのみ追る學にして、未かあらざるべからずといふ理想を掲げ若しくは究むる學にあらざれば也。

次に注意すべきは善と正と惡と邪とは往々にして同意義に解せらる。言ふまでもなく普通にかく解して一行動の動機を善又正といひ若しくは惡または邪といふは必しも異となすに足らず。されど論理上嚴に之れを解すれば善といふ觀念は其の意義を他の目的の方便としてにはあらで究竟に善なるもの、是れ自身に善なるものといふほどの義と解するも尙ほ正もしくは義務といふ觀念よりも内容の饒なるを見る。即ち善は單によしといふ義以外利福の義を含むは慣用の例也。(支那、日本などの所謂善の義と異なる所)義務と信ずる所をなすは當の人に取りの究竟善にして此くなすこと即ち其の實際の利福を推進する所以なりとは通常人の所信なれど此の故を以て義務と利福との觀念は同一なるものとは速断すべからず。義務と利福との間に存する不離の關係は所詮科學的に論證せられ

得べき底のものにあらず。近世の學者(ラストン)が自然の利福即ち幸福と道德の善との調和を宗教上の信仰と見たるは其の一例也。是は屢、二者の不離の關係を以てむしる吾人の信仰上の事となさんとす。以爲へらく幸福と義務との關係の明かならざるは是れ神が吾人をして自利の念を離れて専ら道德上の義務としてのみ行はしめんが爲めに故らに其の連結を絶てるなりと。此に於いてか吾人は倫理的考究の對象たるべき他の一種の新觀念を得たりといふべし。即ち利福などいふ結果より離れて絶対に人に課せらるべき義務もしくは正道若しくは道德法と稱する觀念これなり。此の見に従へば義務は義務なるが故に絶対に吾人の意志に課せらるべきものは是れと個人の幸福との關係の如きは寧ろ第二義の事のみ。一言すれば善の觀念より別なるものにしての義務の念を倫理的考究の對象となす見は倫理史上の重要な一位地を召めざるの觀あり。此の見地に立てば倫理の考究はものづから神學の一部とも聯なり來たる。蓋し神學にては義務の法則を神の立てたる律法即ち神律とやうに見ればなり。また之れを他の側より見れば此意義にての倫理學は法理學の一端とも結び來たる。蓋し法理學の一部は法

の諸規律を攻究の對象となし而して此かる諸規則は自然的にしてかつ普通の價値根據を有するもの随つて理性にて直觀し得らるべく且つ人定法以外獨立の權威を有するものと信ぜらる。而して此かる諸法則はやがて謂ふ所の道德法 Moral Code の重要な一部を成すものにあらすや(報償的觀念の如きは其の著るき一例なり)。

倫理學と法理學との關係の至密なる以て徴すべき也。此くの如く義務の觀念に重きを置くは近世倫理學の主なる趨向にして希臘哲學の一般に善といふ觀念に重きを置きたるとおのづから一種の好照徹をなせりといふべし。而してかく善の觀念を主題となせるより一轉して義務の觀念を主題となすに至れるは主として之れを基督教の影響に歸すべきは論なけれど其の一部はこれを羅馬の法理學に歸すべきを當たれりとする。蓋し神の不動なる不文律といふ觀念の希臘人の倫理思想に混在せりしは否むべからずといへども尙ほ其の根本觀念を成せるものは法といふ思想にはあらずしてむしろ善といふ思想にありしを見る。希臘人の思想を一貫せるものは理性を具へたる人は須らく現實生に於ける最高目的を成

せざる可からざるが故に吾人の守るべき法は唯だ件の最高善に達する一方便若しくは之れが實現の一部と見ざるべからずといふにありき。其のおのづから法といふ觀念よりも善といふ觀念に重きを置けりし所以以て知るべきなり。また基督教徒とても言ふまでもなく下土現實の福果を欲せざりしに非ざりしかど彼等の關心せる所は多くは未來世に於ける漠然たる幸福にありしを見る随つて此にては人の究竟の禍福は想像上よりおぼろに描き出ださるゝに止まりて學理上明確に論證し得べからざるものとなり此くして倫理の主題は個人の利福より一轉しておのづから道德法即ち神の課したる律法の一面に劃せらるゝに至れる也。かくの如き經行によりて善(利福)を題とせる希臘の倫理思想は法(義務)を主題とせる近世の倫理思想を導き來たれり。尙ほ此に注意すべきは神法と自然法との區別なり。初代基督教界にありては道德上の法則は單なる理性によりてよりも寧ろ主として天啓(Revelation)によりて知得せらるゝものとなせしが故に其が自然の結果として神法の解釋及び執行は神學者もしくは僧侶の手中に歸しにき。されどスコラ學者以來倫理學に於ける哲學的考究の一段の盛を致すに及び所謂神法

の中にも明かに二個の要素を含むとの發見せらるゝに至れり。即ち其の一は天啓より成れる基督教の神律にして他の一は吾人の自然の理性にして認め得べき。而して其は天啓にはあらぬとひとしく万人に課せらるべき絶対の自然法これ也。件の自然法の十分なる倫理的根據十二世紀以後羅馬法の研究の復興せられて法理思想の一般に發達するに及びて益其の基礎を牢うせり。

次に近世に至りて道德的能力の起原に關する議論の盛んに提起せらるゝ至れるは主として上の道德を法律的に見るとと聯關せり。蓋し道德の原理にして若し單に吾人の眞の善眞の目的(他に儼存せる)を認知する能力たるに止まらばかゝる能力の起原を探索するの要なきと猶ほ數學者か空間の知覺力の起原を研究するの要なきと同じかるべけれど之れに反して若し件の能力を解して良心即ち人の利福といふとを離れて吾人に對して絶対の權力を有する道德法を認識する能力の義となさんか(吾人の絶対に無條件的に遵守すべき道德法其の者を課する一種の立法者と見んか)然らば吾人が件の能力の正當なる價值根據を叩きて其の意義を明かにせんとし而してまた件の能力を人性の根柢に根ざせる獨立の原理と

見てこゝに其が成立する道德法の正當の根據を認めんとせるは必しも解すべからざるの事にあらざる也。

尙ほ倫理上の法理思想と關聯して自由意志問題の近世の倫理史上に重要な地位を占め來たれるを見る。蓋し人とし破法の行爲によりて罰を得たりとせんか此に自然に起るべき疑問は彼れは眞に件の法を守り得るか否かといふ一事なりとす。蓋し若し之れを守り得る力なく唯だ已むを得ずして法を破りしならんには之れに罰を課するはむしろ罰を課するものゝ不法なるべければ也。かくして自由意志の問題は提起せられ來たる。

以上約するに歴史的に見たる倫理學の主題は第一は個人として人の善即ち福祉は何ぞやといふ問題にしてこは徳を主とするものと快樂を主とするものとの二派となつて研究の方面を別かてり第二は義務即ち道德法にして第三は件の義務を認知する能力の性質起原に關する研究及び延いて一般の道德的行爲に於ける智力及び其が欲望もしくは忌避の情に對する關係の研究なり。而して第四は自由意志の問題これなり。更に斯學と他學との關係を約説すれば第一に神學を以

て其が研究の對境とせる宇宙善(宇宙の目的)の中に人間善(人間の目的)をも含みたりと見若しくは之れとひとしきものと見ば其の倫理學と密接し來たるは論を須たず。更に他の方面よりもし道德を神律其者と解すれば此にも二者の關係は生じ來たる。第二若し個人の福祉は社會の福祉と離すべからざるものとせば倫理學は政治學と相交錯し來たる第三更に道德を以て自然法と同一の者と解すれば倫理學はまた法理學とも联接し來たる也。終りにまた倫理學が其の各方面に於いて心理學と相觸るゝふしあるは前にも述べたる所によりて明かなり。中にも道德的能力の起原若しくは自由意志に關する問題の如きは全然これ心理的研究の埒内にあるものなりとも謂ふべし純理哲學上の自由意志論はちのづから別論なり。

第二章 希臘及び希臘—羅馬の倫理學

予輩はまづ 常の區分法にならうて此の講を三大期に劃すべし。(第一)希臘及び希臘—羅馬の倫理學(第二)基督教及び中世の倫理學(第三)近世即ち英獨佛の倫理學是れなり。第一期を更に小分して(一)ソクラテース前の倫理學(二)ソクラテース、プラトーン、アリストテレスの倫理學及び(三)アリストテレス以後の倫理學となす。

第一節 ソクラテース以前の倫理學

ソクラテース以前の倫理學は西洋紀元前四百三十年ころ即ちソクラテースの新研究の漸く雅典の人心を動かさんとする頃に至るまでを指す。此期に於ける希臘哲學一般の傾向は客觀なる自然界に關する研究其の主位を占めて人事に關する研究は寧ろ第二義の事とせられたりき。倫理道德に關する研究の希臘哲學史上に中心を占むるに至れるはソクラテースの哲學を以て嚆矢となすべし。即ち希臘に於ける倫理的思潮はソクラテースに其の源を發したるを見る也。ソクラテース以前の倫理思想の尙ほ極めて幼稚の域に有りしは論をまたず。

老かも一般歴史に間断あるを容るさるが如く希臘及び歐洲の倫理思想もまたかゝる幼稚なる境に其の源を發して綿々不斷の潮流をなし來たれるなり。而して此等幼稚なる倫理思想は紀元前六七世紀ころの詩人の歌詞中に断金碎玉となつて残存せるを見る。加ふるに所謂希臘の七賢人なるものゝ一種の光彩を添ふるありて希臘文化の發達に資せし所少からざりき。而して此等詩人及び賢者の希臘の倫理思想に甚からざる影響を及ぼしはプラトーン、アリストテレスなどが其の書中に此等詩人の格言箴言などを援引せるに照らしても明かなるべし。さもあれ此くの如き断片的思想の時代より正當に謂ふところの倫理哲學の時代に至るまでに長間隔ありしは争ふべからず。之れを七賢人の一人にして希臘哲學の開祖たるタレイス(紀元前六百四十年より五百六十七年ころに至る)に徴するもの彼れが倫理哲學に關する思想を有せりきとは幾んど吾人の信ずる能はざる所なれば也。而してタレイスよりソクラテイスに至るまでの間の一般の思想界は物理上もしくは純理哲學上の問題に集中せられて道德倫理の問題に對する趣味は未だ幾んど其の影をだに現せざりし也。かくして予輩はソクラテイス以

前に於ける希臘哲學の中にて倫理上多少の注意を値すべきもの三家を得たり。(ソフィストの一派を除く)。ピタゴラス、ヘーラクレイトス、デモクリトスこれ也。此の三家の思想がソクラテイス以後の三家の倫理思想と相呼應せる觀あるは殊に注意すべき一點なりとす。詳言すればピタゴラスはプラトーン派に、ヘーラクレイトスはストア派に、デモクリトスはエピクロス派に、その脈を引けるを見るなり。

先づ注意すべきはピタゴラス(紀元前五八〇より五〇〇に至る)の倫理思想なるべし。彼れの歴史には模糊たる傳説の纏はれるありて容易に其の眞想を見わきたきものあれど若し精細に其の著作につきて研究せば上に擧げたる三家の中にて趣味饒きは蓋しピタゴラスなるべし。されど彼れに關して最も信憑すべき説を傳ふるものは以爲へらくピタゴラスは倫理哲學の一派の祖といはんよりも寧ろ倫理上、宗教上の目的を以て(靈魂輪廻の説に基きて)組織せる盟社の祖なりといふを當たれりとす。げにや彼れが選節、勇敢、友誼及び其の他種々の戒律に對する訓言を見るに一種の卓見と眞情とを以て人の生を神に肖たるものに打成せん

と努めたる痕の歴々たるを見る。而して此等の訓言は哲學的といはんよりも寧ろ總じて獨斷的かつ豫言的なりといふを妥なりとす。ピタゴラスの門徒は教師の訓言の是非の根拠を問ふの遠なくひたすらに崇敬これ事とせる趣き見えたり。さはいへど今日に傳はれる彼れが片言隻句のうち流石に尙ほ純乎たる哲學的分子の現在せるものなきにはあらず。其の公義平等なる分配といふ意義にての徳の精髓を平方數にありとする見の如きは以て彼れがピタゴラス派の根本思想たる數學觀を行爲の境に適用せんとする企圖たるを見るべし。功勞に對する報の平衡を保てる状態(これ即ち通常分配上の意義にての精髓とせらるゝものを彼れが平方“squares”)の觀念にて言ひ表せしは疑ふべからざる事實なりとす。其の他徳及び健康を調諧といひ友誼を調和的均等といひ若しくは統一區劃眞直などの語を用ひて善を表し之れと反對の語を用ひて惡を品彙せるが如きは是れ明かにプラトーンが後に至りて人の行爲の善は自然界及び美術品に於けると同じく繋りて其の結果の過不及なき量の關係に存すとせる哲學見の先驅をなせるものとも見るべし。

若しピタゴラスを以てプラトーン派の先客をなせるものといふを得べくば是れと同じほどの意味にてヘラクレートス(紀元前五三〇より四七〇に至る)をストア派の先驅なりといふを得べし。ヘラクレートスの哲學其者既に「晦澁」を以て稱せらる。此の中より倫理に關する組織的見解を得んとするの難きは言を須たず。されど試みに彼れが倫理道德に關する見解の一二を拾はんか。以爲へらく人はあらゆる人間法の源たる神法に服せざるべからず。諸天尙ほ正義の臣僕たり況して人をやと。以爲へらく多くの人は感覺の迷妄に住し卑しむべき肉慾の奴となりて自ら福なりと惟ふ。されど人は須らく萬人に通ずる理性其者に安立の據を求めざるべからずと。又云はく人の眞智は自然に従うて誤りなく行ふにありと。此等の數語を以てヘラクレートスが天地の客觀に對する敬意の如何ばかりストア派の學說と相照らせるかを見るに足るべし。即ちヘラクレートスはストア派の學者と同じく件の客觀法を理性自然神性の三方面より觀じたりし也。加ふるにヘラクレートスが此の争と闘とにて充ちたる世界も神より見れば凡て善美且つ正也此の世界に不義不善の存すが如く見ゆるは畢竟

有限なる人眼より見ればなりといへる樂天觀は後にストア派が構成せる世界圓滿説の一端を明かに豫想せるものなり。思ふにヘーラクレーイスは此かる世界觀に其の一念を没して其の所謂最高善たる「自足」(completeness)を得たりしは疑ふべからず。而して後のストア派はた之れと同様の語もて其の天命に安んじたる慰安平靜の心狀を表したるを見る也。

ヘーラクレーイトスのストア派に於けると同じくデモクリトス(紀元前四六〇より三七〇に至る)は其の全哲學系より見てエピクロス派と頗る相近似す。按ふに希臘の倫理思想は其の源を多くはソクラテースに發したるが中に惟りデモクリトスの哲學には此の形跡なきを以て通常彼れをソクラテース以前の思索家に伍せしむるなれど年代的に言へばデモクリトスはソクラテース同時の人にして彼よりもむしろ齡弱かりしなり。デモクリトスがエピクロスの先客をなせる點は倫理の思想に於いてよりも物理の思想に於いて多きを見る。エピクロスが物理思想の主部分に幾んど之れをデモクリトスより假り來たれるものともいふべし。而かもデモクリトスの斷簡を閱すれば其が倫理説の劃

然としてエピクロス派の特質を帯べるを見るなり。其の喜もしくは悦を以て究竟の善となせるが如き、而してかゝる喜悅を心の外物に擾亂せられざる平靜の態と同視せるが如き、最大の樂を得る方便として制欲に重きを置きたるが如き、快よりも心の快を揀べるが如き、智見もしくは智慧殊に死及び死後の畏怖心を蟬脱せしむるものとしての智慧を重視せるが如き、此等みなエピクロス派の倫理思想と相通へるものなり。さもあれデモクリトスの倫理思想がソクラテース前の一般哲學の特質たる非組織的といふ闕典を有したるは否むべからず。例へば彼れが他より不公正を受くるよりも己れ之れを爲すは一層の惡なりといひ又惡を爲すとの言に憎むべき所行なるのみならず惡を爲さんと欲ふとも爾なりといへるが如き彼れが所謂究竟善の觀即ち喜もしくは悦を究竟の善となせる彼れの説と如何なる關係を有するか是等要する不明の點也。

蓋し一家の倫理觀の組織せらるゝに至るは通常世に行はるゝ道德説の茫漠として種々の矛盾を藏せるを看取し之れを一段組織的なるものに磨き上げんとするより起るを常とす。此くの如き學者出で、倫理的研究は始めて其の源を發し

來たる。此の故に希臘の倫理的の研究はソクラテースを得て始めて一大新紀元を劃したりといふを得べし。ソクラテースは當時の社會に存せる道徳的觀念の頗る模稜なるを觀て此に研究の新精神を起こし燃ゆるが如き熱情を以て眞智識を收得せんとを努めたり。彼れは從來の哲學者が思を天地高遠の境に馳せて得たる所の極めて少きを見客觀なる宇宙の真相は人智の得て達すべからざる境なるを觀じて専ら眼を道徳的、行爲の方面に轉じたり。以爲へらく宇宙万有に關して先人の説く所何ぞさしも荒唐にして矛盾せるの甚しき彼等の言ふ所は宛かも狂人の罵り噪ぐが如しと。ソフィストの一人なるゴールキアスは更に激甚なる破壊的態度を取りて以爲らく彼等從來の哲學者の研究せし事物の實相などいふが如きものは眞に存在する者にあらずよし存在すとすも其は知り得らるべきものにあらずよし知り得らるべきものとすも其は得て名狀すべきものにあらずと。他の一人なるプロタゴラスもまた人の見る所即萬物の標準なりといふ一言を提して自然界の事は個人の其折々主觀的考察を外にしては一切得て知るべからずとやうに斷じ去りたり。ソクラテースはたソフィストと同じく此

等先人の學說に對しては消極的態度を取りしがさりとて他のソフィストの徒の如くに漫に破壊懷疑を事としたるにはあらずき。則ち彼れは客觀なる事物の智識を以て有り得べからず知り得べからざるものとやうに斷じ去るとをなさずして唯だ諸神みづから之を秘して人に示さざるのみといふやうなるいと朴素なる敬意を懷きて之を觀たりし也。但し之れに反して人間の行爲の智識に關しては諸神之れを秘するとなく吾人の理性の研究に一任したれば吾人は須らく之れを研究して其の新智識に到達するとを得べしとなせるもの實にソクラテースの見地なりし也。ソクラテースは此くの如き見地に立つて天地自然の客觀的研究を抛ちてむねど人事道徳の側に全精力をそそぎたり。

ソクラテースの倫理説を論述するに先きだち當時の社會に於けるソフィストの位地を瞥見するの要あり。ソフィストとは學者又は智識ある人といはんほどの義にして當時希臘の諸市府を遍歴して種々の智識を人に與ふるを以て其の職業となせるもの、總稱なり。彼等は必しも一系の哲學觀を有したるにはあらず唯だ當時希臘の文化の一般に進歩したる結果として社會自然の需用の増すにつ

二四

れ辨舌をもて人を教ふるの職を執れる也。中にもかゝる開明時代の常として政治公共の舞臺に立つて活動するは時人の最も榮譽とする所なるべく随つて理財兵事政治上の知識は最も一般に其の必要を感せしかばソフィストの徒は乃ちこの需用に應じて時人にこれら諸種の知識を與へ處世立身の策を教へたり。且つや當時はかく美術文學知識の燦然として其の華を開きたるにもかゝはらず惟り行爲の術に關する知識、徳教に關する技術の闕如せし時なりしかば此の方面に於ける時人の要求は殊に切なるものありしならん。謂はゞ當時の社會はホメロスの詩集が唯一の聖經となつて其の道徳的指導者たりし也。もとよりホメロスの詩集は聖經の十誡の如き訓言を與へざりしも人間の行爲品性に於ける美醜長短を描示して人の好惡の感に訴へたりし點に於いてたじかに一種の道徳經たりし也。ソフィストの徒は要するに此等の需用を補はんが爲めに出で、徳教の師となり、かくして當時の社會に重要な一地位を占めたりし也。かくの如く辯論徳教其他諸般の師として出でたるソフィストも其の末流に至りては一つには社會の趨勢につれてひたすら破壊狼藉を事とするに至れるを見る。此の破

壞的傾向は特に人則と天則とに關する彼等の見解につれて明かに之れを認むるを得る也。少しく前に溯りて之れを説かんに蓋し

ソフィスト以前の希臘學界には明かに二個の大假定の存したりしを見る。其の一は諸ての法は之れを動かすべからずといふ事なり。人心の尙ほ幼稚なるや彼等は困襲し來たれる古法舊慣に安んじて又其の由來と價値とを問ふとなく之れに無限の權威を附して服従するを常とす其の二はいつれの時代いつれの社會にも存する道徳上の根本信ともいふべきもの即ち法に従ふとは利にして従はざるは不利なりといふ事なり。然れども此の二大信念も希臘の維新開明につれ搖々として其の基礎の動き來たれるを見る。而して之れと共に道徳といふ事は當時の一大問題となり來たれるなり。

件の大搖動の一縁は公共的生活の經驗より來たれり。詳しくいへば社會組織の變更は其が自然の結果として法の根據を叩かざるを得ざるに至る。是れまで神聖犯すべからざるものとせられたる政治上の法律も今は紛然たる論議の渦中に投せられ人は之れに對して自由に一己の斷を加ふる權あるに至れり。嘗に政治

上の法律の大に變化せるのみならず因襲久しきをなせる古來の道徳法なるものも時と處とを異にするにつれて種々の變化の相をなせるに想ひ到らば諸ての法に普通の價値を歸するの理なきを觀するに至るは自然の數なりともいふべし。かくして人の作爲せし諸ての法隨つて政治法の普通の根據は破壊せられ了んぬ。此のいたましき新經驗に面して一個の疑問は提せられたり。即ち凡ての人と時と處とを超越していついづこにても不變の價値を有する隨つて萬人に向つて權威ある法なるもの果たして存在せるかといふ事也。かくして希臘の倫理哲學は其の物理哲學と同様の問題に接して其の端をひらけるを見るなり。件のあらゆる變化の中に不變化の實相を保てる物の本質をば初期の哲學者は名づけて自然(ousia)と呼びにき。而して此に起れる疑問は件の不變化なる自然に根據せる不變化する法ありや若しありとせば其は何ぞやといふ一事なり。之れに對して一時一處に於いてのみ價値ある凡ての規定は之れを人間の立したる制度法律(nómos)と稱して之れを前のノイモストと區別せり。

此くの如く自然法と人爲法(制度法律等)との對峙は希臘の開明時代に於ける思想

界を經濟せる一大要素なりき。若し萬人を通じ萬世を貫きて普通の價値を有するものあらば其は自然法に據を托したるものに外ならず。歴史に現はれたる人爲の法は唯だ歴史的價値を有するのみ即ち一時代に劃られたる價値を有するのみ。自然法に據を托するもののみ正當なる權威を有するものにして人爲の制度法律はかゝる權威を有せずと見たる此れ實に當時の希臘哲學を一貫したる思想なりし也。さて二者の對峙より延いて來たるべき問題の一つは此の如き普遍なる自然法は果して何ぞやといふ事にして他の一つは歴史上の所謂人爲なるものは如何にして起これるかといふ事なりとす。

プロタゴラスはまづ第一問を解説せんことを力めたり。プラトンの書にプロタゴラスの言として傳へたるものあり。其の意に以爲へらく神々は凡ての人に同じ程の公義の念と倫理的敬愛の念とを賦與せり。是れ蓋し人々をして相頼り相結びて其の生を完からしめんが爲めなりと。即ちプロタゴラスは實際的生活の不變法(自然法)を主として人が社會及び國家をなして結合するに至る倫理的感情其者に認めたるなり。されど件の自然法と史に現れたる人爲法との別に

つれての彼れの見は不幸にして傳はらざる也。

かくてソフィストの徒は此等の根本觀念を據として進で當時の百般の現象を批評し社會的及び政治的生活の一大革命を企てんとしたり。人と人との區別は要するに人為の制度より來たれるものにて自然の要求する所は萬人平等にありといふ思想は既に業に當時の社會の根柢に流れつゝありし也。見よ Lyconion は貴族といふ一階級を打破せんとを望み Alcibiades の徒は同じ見地より奴隸を開放せんとを欲し Phalaris は凡ての市民の平等なる財産權と教育權とを要求し Hippodamus は理性によりて建てられたる理想的國家を描き或は政治上に於ける男女の同權をさへ唱ふるものゝ出でたりしを。

成分法即ち人則と自然法即ち天則と此くの如く其根據を異にせるものとせば前者の起原はたゞ之れを爲法者の一己の利益もしくは好尙の念にありと見ざるべからず。トラシマコスはい爲へらく法は強者が自己の利便の爲めに弱者に課したるものなりと。カルリクレスはい爲へらく法は弱者の多數が強者の權力に抗して爲りたるものなりと。更にソコフロンはい爲へらく法は自他相害せざる徒

がものゝ其の生命と財産とを保護せんが爲めに設けたるものなりと。かく法の起原に關して見る所種々なるに拘らず其の法を以て爲法者自家の爲めに爲られたるものなりとする見に至りては三者揆を同じうす。既に法の成立せる根據を利益もしくは好尙の念にありとせば法に従ふ唯一の動機もまた之れを利益好尙の念に歸せざるべからず。ソフィストの徒はい爲へらく吾れ人が法に従うて正道を歩むは唯だかくすることによりてのみ吾人の利益を得ればなりと。さもあれ法を守ると利益を得るととは必ずしも合致するものにあらず。法を守り正を行ふ有道の士にして尙ほ甚しき不幸數奇に陥り破法無頼の徒にして却つて幸福の生を送るものあるは吾人のしばしば目睹する事實なり。ソフィストの徒も流石に此の大矛盾の事實に眼を掩ふ能はざりき。此に於いてか彼等が政治法律に對する懷疑は更に翼を擴げて道徳法に及びたり。かくして其の末流の徒は益破壊的傾向をつよめ來たりて放睢狼藉の舉をなして敢て觀みざるに至りぬ。彼等の多くはい爲へらく弱者は自ら甘んじて法の奴たるべし。されど強者賢者は何んぞ法の爲めに累せらるゝを要せんや。須らく自己の性欲に従うて自由の

行動をなすべきなり。而してこは縦へ人則に反せりとするも人則よりも一段高き天則に従へるものなるが故に其の正たるや論なし。自然は強者に命じて強者を制せしむ。自己以上の權威に服すべきは唯だ奴隸あるのみ。自由を有する人は必しも自己の情欲を抑止するを順ひず否これをして自由の發達を遂げしむること寧ろ天則に合ふべけれど。

かくして彼等は己人の自然の性欲を天則となして之を人の行動の最高法則と颯言するに至れり。アナクサゴラスの弟子にしてソフィストの一人なるアルケオラスは云く「善といひ、惡といひ、義といふも竟畢皆人爲の習慣より出でたる事にして自然より出でたる事にあらず。倫理上の凡ての判別は一個の習慣風俗に歸し去るを得べしと。要之、ソフィストの倫理説は之を二點に約するを得べし。一に曰く凡ての政治道德は人爲的(Conventional)にして普通の客觀的根據を有するものにあらず。二に曰く人の目的即ち善は快樂に外ならずと。

第二節

ソークラテース、プラトーン、アリストテ

レスの倫理學

ソークラテース(紀元前四七〇より三九九に至る)が件のソフィストの大運動に對する態度はこれを二面より見とを得べし。彼れは一面に於いてはソフィストの破壞的傾向を繼紹して更に大膽に之れを其の極處にまで開發せしめ他面に於いては此くソフィストの思想を頂點にまで進ましめて一路極まる所更に新江山を開拓して不動の原理を確立し來たれり。一は消極的にして他は積極的なり。ソークラテースは此の二面を括りて一種偉大なる學相を開展せり。彼れは希臘當時の開明時代を橫流せる思想界の深處に潜没してソフィストの徒よりも更に深く且つ明に(此處に別様の眞理を掘み來たれるを見る)。

ソークラテースは徒らに從來の舊習古格に盲從するの妄を悟りて個人の獨立なる判斷及び研究を重んじたり。此の點に於いてはソフィストの徒と同じく當時の希臘社會の根柢を搖かしつゝありし勃如たる個人の研究心を抑壓するとなさずして寧ろ其の抑ゆべからざる必需に出でたるを著取しソフィストよりも一段深く強く此の精神を開發したり。彼れ以爲へらく人皆正義を言ひ、節欲をいひ、勇氣を言ふされど正義とは何ぞや、勇氣とは何ぞやと問ひ來たらば其の眞意を知れ

るもの幾んど無く多くは唯だ舊套を襲うて漠然之れを口にせるのみ。この故に吾人は須らく自己の無知を悟り新なる精神を以て攻學の途に上らざるべからず。事物の眞智識なくして如何で之れを行ふとを得んや。吾人は勇氣の何たる正義の何たるを知らずして勇を振ひ義を行ふと能はずと。彼れは乃ち得意の對話法を用ひ歩々敵者を論じつめ此くして敵者をして初め自ら知れりと思へる事も眞に自ら知れるにあらざるを悟りて呆然自失するに至らしめにき。其の冷隘にして銳利の論を行るに巧みなりしは驚くべきものありきといふ。

同じく當時の破壊的傾向を繼紹しながらソフィストは其極端に馳せ去りて一切人則を破却し行爲の則とすべきは唯だ一己の情欲に従ふとにありとして之れを天則と同視したりしがソクラテースは此くの如き搖動極まりなき個人的情欲に任ずるとをなさずして更に普通の價値を有する客觀法を求め而して之れを智見もしくは直觀にありとせり。

ソクラテース以爲へらく技能もしくは物に堪能なる事(獨逸語の Tüchtigkeit 希臘語の ἀρετή)は即ち智見に外ならずと。如何にとならば何事にても其れに關する

明かなる智識を有せずば之を爲すと能はざるべければ也。或は感情に従ひ或は漠然たる假定に従ひ或はまた傳來の習慣に従ふて事を行ふものは偶然には其標的に中するとあるべきも多くは過誤に陥るを免れむ。物に關して眞智見を有するものにして始めて能く行ふて誤りなきを得べき也。此の故に明智(σοφία)は人をして技能を有し事に堪能ならしむる根源なりといふべし。此の故に百工皆其の技に關する明智を有して始めて其の業を全うし得るが如くに國家を治むる政治家もまた眞に國家を治むるに足る智識を有して始めてよく其の職を盡くすとを得べし。ソクラテースは云はく「眞の將軍とは他に推選せられたるものなると否らざるを問はず軍馬の術を熟知せる人に外ならず。全く人類の投票も以て愚者をして賢者ならしむる能はずと。見るべしプラトーンが理想的國家の全權を哲學者の手に委せんとしたるも必ずしも彼れが一家の空想より出でたるにはあらで正だしくソクラテースの思想を繼けるに外ならざりしを。則ちプラトーンは唯だ人の眞の目的即ち善の何たるを知らざるものは治者に適せずといふ師ソクラテースの根本思想を襲へるものに外ならざる也。

かくの如くソークラテースが知識の一義を重視せしは一つにはソフィストの徒が充顔みづから徳教の師を以て自任しながら其の行ふ所の恣睢放縱、毫も其の言と慚はざりしを見て此の如きは彼等が真に倫理道徳に關する明かなる概念知を有せざるが故なりとやうに見若し明かなる知識にあらば仁義道徳はあつから實行し得らるべしとやうに思惟したれば也。

アレテー即ち技能といふ希臘語は初めは専ら實際的技能を表する語なりしが一轉して倫理上の技能即ち徳を表する語となり延いて終にソークラテースの根本思想たる徳は善の何なるかを知らんと存すといふ一命題を惹起しぬ。徳とは畢竟知識に外ならず。善の何たるを知りて之れを得るを徳といふ。然らば即ち善とは何ぞや。これ次ぎに來たるべき問題也。

クセノフオーンの記録に徴すればソークラテースは善(ἀγαθόν)と利(καθήκον)を同一視したるが如し。其の意に以爲へらく一行動の我れに及ぼす結果の利と不利とを比較して其の利に就かしむるものは吾人の知慮なり。吾人は一時の情慾に任して放恣邪僻に流るゝとなく常に自己を制して真利福のある處に就かざる可

らざる。

思ふにソークラテースは堅忍克己の徳を重んじ且つ之れを實行せるものは無かるべし。彼れは如意に自己を制したる人なりき。其の意思の堅牢にして品性の端然たりしは實に此に存す。此の點に關するはプラタゴンの説聽くべし。以爲へらく吾人はソークラテースの學說を見んとを目的として其の人物を見んさするものにあらず。されど二者は決して分別し得らるべきものにあらず。彼れが智見の明なりしと共に意志の牢なりしは言を要せざる事實なれど彼れが前者を脱くに厚くして後者を脱くに薄かりしはたましく、以て彼れが圓滿に後者の徳を具したりし証なり。少くも彼れにありては(美且つ善)の信託たる事は必然に之れを行はざりしを得ざりしなり。若し自己の知る所に背きて行ふとあらば彼れは之れを以て未だ真知識を有せざる故なりと見たるなり。言ひ換ふればソークラテースにありては智見を脱くの必要ありしも意志の堅實を脱く要なかりしなり。其は智見のある所即ち實行のある處にして毫も此の二元の破綻を意識せざりしが故なり。クセノフオーンはソークラテースが克己(即ち意志)の徳に關して言をなしたることありしよしを其の記録中に記したり。されどこの事實は以て彼れが他の説と矛盾するものにあらず。其は彼れの所謂克己は一時の情慾に耽るは害多くいて利少しといふ知識否此の知識より必然に結果し來たるべきものに外ならずして通常の意識(即ち智識)より別なるものまた智識を補ふものとして(の)克己は彼れの知らざりし所なれば也。

之れを要するにソークラテースは徳を修むると、幸福なるとは決して離れたるものにあらずと見たり。即ちソークラテースが所謂善の一觀念の中には利と徳との二觀念の相交錯して存せるを見るなり。而してこの利徳不離の觀念はソークラテース自身の創見にはあらずして彼れは唯だソフィストと同じく當時に普通せる思想を探り來りしに外ならず。されど此の利徳二面を含める善福(eudaimonia)といふ觀念が希臘倫理學界に於いて重要な思想となりしは主として之れをソークラテースの影響に歸すべき也。

されど更に一步を進めて所謂利とは何ぞや何物に對しての利なるかと問ひ來たればソークラテースの所謂善の内容のいよ／＼不明なるを知るに足るべし。ソークラテースは常に他に教へて曰はく人の眞幸福は外物に存せず榮華なる生活に存せず唯だ徳は存す徳は衆善の冠なりと。然らば謂ふ所の徳とは何ぞや。ソークラテースは以爲へらく眞に吾人にとりて利なるものを識別してこれに従うて行ふと是れ即徳に外ならずと。此くしてソークラテースの論法は循環的となりしる也。云く徳は利なり而して眞の利は徳なりと。

此くの如くソークラテースの所謂善とは如何なるものかといふ其内容のやゝ不明瞭なるふしあるにもかゝはらず善に關する智識は人をして必然に善を成さしめ而して善を成せば必然に幸福を伴せしむといふ一命題はソークラテースの根本確信を成せるを見る。此の確信は彼れの品性より必然に湧出せるものにして彼れにありては何等の理由何等の論證をも要せざる自明の理なりし也。此の故にもし徳の爲めに甚しき苦楚を経ざるべからざるとありとするも彼れにありては此くの如き生を送るは榮華を極むる生よりも其の喜び飽かに饒しとせらるる也。彼れらが破法の人とならずして從容死に就きしは一死むしろ我れに利ありとの確信より來たれりしは疑ふべからず。彼れは口を極めて友愛の貴ぶべきを奨説しながら其の貴ぶべき理由善なる理由をいふや要するにまた功利の見を出でざるを見る。以爲へらく我がために役だぬ友は貴ぶに足らずと。而して此に役たつといへる意は通常慣用の意義にて用ひたるなり。されど彼れはまた友の用は互に徳を磨し善に進むにありともいへり。要するにソークラテースの所謂善の一觀念の中には徳と利との二元素を含み而して智即徳徳即利といふ二

面常に相錯綜せるを見る。一は心理的にして唯智説 (intellectualism) を標し他は倫理的にして善福説 (eudaimonism) を標す。

三八

ソークラテースが件の二面をつよめて説けるは其の倫理説の最も彩華ある點なりとす。以爲へらく人は皆最もよく自己の目的を達するに便なる事即ち利益ある事を撰びて爲すを常とす。人誰れか自己の目的を成ずるに不利なるものを撰ぶものあらんや。我れに取りてよきもの利あるものに就くは人の自然の性なり。此の故にもし徳を解して我れに利なるもの、何たるを知る知識なりとせば有徳の士は常に此の知識即ち我れに最も利ありと知識せる事を爲しつゝありと言はざるを得ず。自ら惡の惡たるを識りながら有意に之れを爲すものあらず。惡は我れに取りてよからぬもの不利なるものなれば也。明智なくして判断を誤るものは隨うてまた我れに利あるとを爲す能はず。もし智見の明に燭らされながら尙ほ其の好判断に背きて惡をなすものあらんか此くの如きは未だ其の智見の明確ならざるが故なり。然らざれば此くの如きは是れ自ら好んで我れを害ふもの無理これより甚しきはなければなりと。

此くの如く人は徳に關する知識を有すれば此の知識に従うて必然に之れを行はざるを得ずとせば是れ人を以て道徳上の自由を有せざるものと見るものにはあらざるか。されどソークラテースは以爲へらくかゝる知識こそ却つて人に眞の自由を與ふるものなれ。唯だ善なる行爲のみ眞に有意の行爲といふべく惡人は其の無知によりて彼れの眞に欲する所のものと反對のもの即ち彼れに取りて不利なる事と人の眞に欲望するものは自己の最大利福なるが故に之を爲さざるを得ざる也。これ却つて人の自由を褫ふものにあらざや。唯だ知識のみ能く人をして自己の眞に欲望する所のものを得しむるの自由を與へ得る也と。

此くの如く述べ來たればソークラテースとソファストとの根本的異點はあつから明かなりといふべし。後者は意志の活動を根本と見て之れを天則に根ざせるものとなし前者は一物を意志すると之を善もしくは利なりと見るとは同一なりとす。以爲へらく智は如意自在に意を制す。人は自らよしと見たる事を爲す。此の點に關するソークラテースの所見はやゝ一端に失したる觀ありて眞理は寧ろ其の中間にありとも見らるべけれど兎も角もソークラテースの唯智説

の古代の倫理界に大なる影響を及ぼせるは注意すべき點なるべし。

四〇

此の故にソークラテースの見る所に従へば罪とは過に外ならず。人の惡を爲すは其の判断の誤れるが故なり。言ひ換ふれば惡を善と誤想するが故なり。人は昔我れに取りての善きと利あるとを爲しつゝあるものなれば惡を善と誤り認めざる限りは自ら好みて故意に惡しきと不利なるとを爲すものなれば也。かく知識は人の意志に對する唯一の決定者なればこそ人はみな倫理的に教育せらるるを得べきなれ。徳の人に教へ得らるべき唯一の理由こゝにあり。吾人は善の何たるかを人に教へ得るが故に人はかく教へられたる知識に従うて善を行ふを得。徳もし知識にあらざれば之れを人に教ふるを得ざるべき也。

此くの如き見地よりしてソークラテースは普通の道德に學理的根據を興へたり。ソフィストは凡ての制度凡ての道德を一時の好尚もしくは利益の念より成れる人則と見て其の根柢より之れを打破し去らんとせしがソークラテースは之れに反して恒久なる幸福を得る唯一の法は世の法律道德に従ふとにありとせり。思ふに希臘の一新時代の精神は人をして絶對的に古來の制度風習に服従せしむる

とを容るさざるに至りソフィストまづ此の思潮を代表して事々物々に一己の斷を加へ其の極破壊となり了りしがソークラテースまた此の思潮に驅られて出で一面には古來の習慣制度に鋭利なる批評を加ふると共に他面には更に深く其の根柢に觀到して此に不動の根據はなきかと求めたり。右手に破壊の精神を持して左手に建設の理想を持したるはソークラテースの態度なりき。而してかゝる鋭利なる批評を加へたる結果として世の道德法律は人の明知によりて制定せられたる最良の法なること分明し隨つて人は絶對に之れに服従すべきものとせらるに至りたり。世の道德法律はソークラテースの細苛なる批評に堪へ得ず其の不動の根據を明かにせりともいひつべし。向きにソフィストの徒によりて號はれたる道德法の權威はかくしてソークラテースによりて再び還與せられたり。ソークラテースは乃ち世の道德法律を排斥するとをなさずして其が人の理性に基づきて制定せられたるものなると隨つて其は普通の客觀的價値を有するものなることを證せんと力めたり。ソフィストは人則を天則より峻判して極端の見に明せたりしがソークラテースは後者即ち天則を根據として人則の偶然的現象な

らざる所以を明かにしたり。

要之、ソークラテースの倫理説は種々の方面を具へながら其の偉大なる品性によ

りて活如たる生命を帯びたる觀あり。されど之れを一個の學系として見れば論
理上の透徹を欠きたる節あるは論なく中にも其の所謂善に關する觀念の如きは
尙ほ未釋の問題たるを見る。(思ふにソークラテース自身の意識の奥にては此か
る論理上の矛盾は無かりしなるべく而して彼れの倫理説はかゝる意識の源より
流れ出でたるもの即ち彼れが偉大なる品性の唯だ學理の形ちを帯びて現れたる
ものに外ならずとも見るべし)。而して此の未釋の問題を取りての^一一家の
學説を構へたるものは所謂ソークラテース學派と稱せらるものこれなり。是れ
に四派の別あり。メガラ學派(Megarian) キニク學派(Cynic) キレノネ學派(Cyrenaic)
プラトロン學派(Platonic) 是れ也。

四派皆師ソークラテースの説を繼きて其の學説の起點となせるは言ふまでもな
し。即ち人の最も貴ぶべきものは知慧もしくは知識にして而して知識の中最も
貴ぶべきものは善に關する知識なりといふ一點は四派に共通せる根本の觀念に

してこれまさしく師の説より出でたるものなり。此の一點を除きては彼等の説
はみなソークラテースの學説の一面をのみ抽釋したるものなるが故に見るとこ
ろちの^一異なれり。惟りプラトロンは最もよく師説を繼紹して之れを大成し
たりと稱せらる。さてソークラテースの哲學的方面を取つて之れを祖述せるも
のを

メガラ學派

のオイクラテース(Euclides)となす。オイクラテースはソークラテースの所謂善
を以て尙ほ不明の問題となし新たに之れが研究を試みたり。彼れはソークラテ
ースの概念的知識(普遍的知識)を希臘初期の哲學者エレア派などの説ける實有(Being)
と同じものと視て以爲へらく眞知識は宇宙の實在たる件の實有を知るとに
外ならず。而して謂ふところの善は實に此の實有に外ならず。或は神といひ或
は理性といひはた智見といふも要するに皆實有を指せるものなり。實有を知識
する之れを徳といふと。かくの如く此の派の學者は倫理問題をもて純然たる哲
學問題となし了りたり。(此の派の思想がソークラテースとプラトロンとの間に

一種の橋を架せるは注意すべき點なるべし。

他の二派即ちキニツク學派とキレイーネ學派との件の善の問題に對する態度はやや之れと異なる。此の二派は専らソークラテースの實際的生活の方面に着眼し隨て件の問題に對する見解もそのづから簡明なりとす。詳言すれば此の二派の學者は所謂善の問題を以て既に解明せられたるものと見て倫理はたゞ此く解明せられたる善の知識を行爲の境に應用するとに外ならずとやうに解したり。此二派の見る所は幾んど師ソークラテースの説を二端に析きたるの觀なきにあらねど其の因襲し來れる習慣または一時の情欲に従はずして兎も角も自己の組織せる倫理說に従うて行爲せんと力めたる點に於いて、又ソークラテースの惛滯にして不動なる品性に倣はんと努めたるの點に於いて彼等は尙ほ依然としてソークラテース學派たるを失はず。而もキレイーネ學派なるアリストテッポスはソークラテースの教學を論理的に開發しキニツク學派なるアンティステテースは直ちにソークラテースの性行を取りて其の學說を組織したり。二學派の差異はこゝに由來す。

キニツク學派

此の學派の祖なるアンティステテース (Antisthenes) 紀元前四四四より三七〇に至るは以爲へらく徳は至上の善唯一の善也。而して徳とは畢竟するに吾人の知見に従うて行ふの義に外ならず。徳は外物に須つとなくして其れ自身に善なるものを云ふ。人もし正道をだに守らば幸福は心のづから來たるべく富貴權勢はたゞ其が累たらんのみ。人の貴ぶべきは理性なり、知見なり。知見とは快樂を巧みに追求するの謂ひにあらざして寧ろ之れを蔑如するの謂ひなり(キレイーネ派と反する所)。君子人とは一時の欲または情に驅られて快樂の空華を追ふの無意義なるとを觀破し以て克己節欲の徳を全うするものをいふ。吾人は種々の情欲をほしめしにするほどもす、外縁に羈せられて其の奴となる。此の故に徳を全うせんとせば須らく情欲を抑えて質素純朴なる生活に甘んぜざるべからず。吾人はかくしてのみ始めて眞の自由を得べし。徳は全く欲望を離れたる精神の自由、存す。アンティステテースは快樂を惡なりと斷じて曰はく快樂の奴たらんより狂ならんこそよけれと。かくして彼れは更に歩を進めて貧窶、若痛、不名譽等

を以てなかくに吾人をして精神の自由を得しむるもの、徳性を磨くに必要なるものとやうに見たり。

此の派の思想は此くの如くにして漸く極端に進み終ひには世の所謂文化に對し全然たる消極的態度を取るに至りぬ。すべての勤勉努力を以て有害若しくは吾人の眞生活と何等の關係なきものとなし質朴簡素なる自然的生活をもて賢者の唯一の棲遲となしき。此の派は茲に至りてソフィストの人則 (Sophists) と天則 (Natural Law) との對峙を掲げ來たり而して後者に重きを置きて以爲へらく吾人は人爲の制度、法律に累せらるゝとなく須らく普遍なる天則に従うて行動すべし。自由此にあり、満足此にあり。吾人の理想境はたゞ此の自然の狀態に住するにありと。かくて彼等は世の習慣や風俗や毀譽や褒貶や富貴や利達やすべて之れを一嘆に附してひたすらに天然の生活を重んじ人は食色の根本欲以外何等の羈絆をも脱して自由に行動すべきものなりと獎說せり。

件の自然主義は後には有らゆる文化の飾りを削ぎ去つて全く乞丐のやうなる生活を送るをもて善事となすに至れり。

備考 キニシクの名はもこの派の祖アンテイスチオスガキノサルグスの學校にて教授せしより來たれる名なれど此の派の乞食的生活が破廉耻の代名詞たりし *κύνος* (犬)といふ希臘語に似たりしより後世つひに之れを犬儒派と呼び做すに至れり

かくて此の派の學者よりは家を捨て國をすて、一處不住の浪々の士輩出するに至りき。有名なるディオゲネースは自己の何れの國家にも屬せざるとを誇りて所爲へらく人間に須らく野獸の群と同じ生活を營むべし是れ天然の態に愜へるものなりと。彼れは破褌を被、粗食に甘んじて地上に横臥し又は天幕を家としたりと傳へらる。その他ディオゲネースの弟子なるクラテスもまた終生乞丐の生を送りて其の妻ヒパルキア(良家の女なりしがクラテスの志を慕うて其の妻となりと言ひ傳ふ)と共に諸處を流浪しきといふ。此に至りては彼等は最早ヤソフィストが人の自然の性欲の一と見たりし公正及び尊敬 (Dignity) 及び *αἰσχύνη* (羞恥) の何物たるをも知らざりしなるべく唯だく食色の慾を充たすをもて自然人の面目となし而して此くの如きを道徳の生活と見たりしが如し。

此くの如くひたすら自然的生活を重んじたる結果として世界的觀念は此の派の

有力なる思想の一となるに至れり。以爲へらく人々もし自己の理性もしくは知見に順らて行動するに至らば復た世俗の習慣または法度などいふものに従ふの要はなかるべく此くして人皆賢者たるに至らば種々の國家種々の法律は全く滅びて万人皆一定の法律に服する理想的國家現するに至るべしと。此の世界的國家の觀念は後に至りてストア派の思想に取り入れられて更に重要な意義を有し來たる。

之れを約するに此くの如き學派の此の時代に現れたるは必しも解しかたき事にあらず。當時希臘の社會は既に文華の餘弊を現じて頽波日に旺さかんならんとせし時なりき。此の派は即ち此の頽波に抗せんが爲めに出でたるものなり。アンテイステテースは親しくソクラテースの教學と性行とに接して其の偉なる自制克己の力を景仰し我れに一片不動の意志にあらば必ずしも外物に頼らずして一心の幸福を得べしと確信して、さて此に安立の脚を托したりし也。一言以て掩へば如何にせば眞幸福を得べきかといふ個人的幸福説より發足してソクラテースの克己と智見とを備ひ來たれるもの即ちキニク學派の學相なり。

備考 (さはいへキニク學派の所謂智見さは何ぞやと問ひ來たらば唯だ不合理なる一時なる情欲、僻見より離脱すると答ふるの外には何等の積極的意義をも有せざるが如し。言ひ換ふれば徳さは吾人が智見を開きて情欲の奴らざるのみ意味するに止まりて更に是れ以上の内容を有せざるなり。これに積極的意義を附したるものは即ちキレテテ學派なり。

キレテテ學派

ソクラテースの所謂善といふ觀念の未だ明ならざる節ありしやアンテイステテースはまづ之れを解釋して徳となしたれど更に一步を進めて件の徳の何たるかを云ふに至りては唯だ之れを消極の側よりのみ見たるの觀ありき。而して之れに積極の意義を與へて其の内容を填したるものは即ちキレテテ學派也。

キレテテ學派の祖アリスティッポス (Aristippus) はソクラテースの學說中幸福といふ觀念に重きを置きて之れを其の發足點となしたりキニク學派キレテテ學派共に幸福を云ふに於いては其の旨を同じうしたれど其の幸福の何たるかを言ふに至りては二派ものく、其の見る所を異にしき。即ち一は快樂を離れたる徳、其者知見、其者を幸福と見他は徳もしくは知見とは別なる快樂、其者を幸福と見た

り。要するに善(又福)の一觀念を剖析して徳と快樂との二端に岐れたるをキニク、
キレテー二學派の學相となす。

アリストテッポス以爲へらく快樂(ハレチヤ)は唯一の善なり。徳行の善とせらるゝ所
以は唯だ其が快樂を齎らすの具たるが故にして徳行其者の善なるには非らず。
快樂は其の如何なる性質の快樂たるを問はず皆一様に善なり。一の快樂を他の
快樂に優れたりと見るは其種類の差異によるにあらずして唯だ其量の多寡大小
に繋りて存す。即ち苦痛少なくて快樂多きものほど其の價値は多しとせら
るべしと。而してアリストテッポスは快樂の中にて最も大なるもの強きものを
肉體の快樂なりと見たり。

アリストテッポスは件の快樂論を更に其の知識の論據に基づかしめて之れを牢う
せんとしたりしを見る。前に擧げたるソフィストの一人なるプロータゴラスは吾
人の知覺の其の折々に變じて一定ならざる所以を言ひ同じくソフィストの一人な
るゴールギアスもまた吾人は物其れ自身の性質を知る能はずとやうに言へりし
がアリストテッポスは更に此の理を人心の法則其者より由來せるものとして説明

せんと試みたり。言ひ換ふればアリストテッポスはソフィストの學者よりも一段
明らかに知識論の根據を想ひうかべて以爲へらく吾人の知識と呼ぶものは所詮
個人の直接に感ずる信もしくは情に外ならず。砂糖を甘く白しと言ふ而も此
く言ふ所以の真意は砂糖は我が舌に甘く我が眼に白しと言ふに外ならず。我が
直接の感其のものを離れての砂糖其者の性質といふ如きものは到底吾人の知識
し得べきかざりにあらず。吾人は吾人個々の感又は情以外に出でたる客觀なる
物其れ自身の状態を知識すること能はず。知識は嚴に主觀(感)の圍内に局せらる
と。此くの如く吾人の知識は個々人の感情以外に出でざるものとせば吾人自身
以外なる客觀の自然界を研究するは要するに無益の所行なり。吾人が正當に攻
究の對境となし得べきものは唯だ吾人自己の感情あるのみ。此に於いてか
此の派の學徒主に少アリストテッポス等をいふ。傳によればアリストテッポス教を
其の女アレーテに傳へアレーテまた之れを其の子アリストテッポスに傳へたり
とは感情の起原に生理上の説明を加へて以爲へらく諸ての感情の源は要するに
體即ち物質分子の運動に外ならず。體の運動は別ちて穩なるもの激なるもの微

なるもの、三種となす。穩なる感情起れば快樂を覺え激なる感情起れば苦痛を覺え微なる感情起れば苦樂いづれも判別しがたき中位(即ち無記)の感を覺ゆと。此くして此の學派は其の個人的快樂論に學理的根據を與へたり。其の意に以爲へらく吾人は吾人の知識の性質として吾人自身の感情以外には他の何物をも知る能はざるものなりとせば而して吾人の感情は唯だ快樂と苦痛と無記感との三者を出でずとせば吾人が特に快樂を擇びて之れを唯一の目的とするは理論の自然にあらざや。人誰れか苦痛を欲せんや。また誰れか快樂も苦痛もなき淡然たる無感の狀を欲せんや。人は皆其の自然の性として自己の最も快とするものに就きつゝあるなりと。アリストテッポスは更に其の所謂快樂を嚴に眼前の快樂に劃りて(此く快樂を眼前一時の快樂とかきるところ是れまた吾人人間は吾人の意識に於いて唯だ其の折の瞬時の感情を覺し得るのみといふ此の派の知識論より來たれる自然の結論なりと見るべし)以爲へらく吾人は須らく眼前の快樂を出來得るだけ多く得んとを努むべし。吾人の目的は其の折々に生じ來たる快樂を巧みに攫取して之れを逸せしめざるにあり。復しがたき過去を追ひ期しが

たき當來を描くは徒らに累たらんのみと

さもあれ此くの如き快樂を誤りなく攫取するは唯だ智見あるもの、いみ之れを能くす。智者は管に純なる快樂を撰び得て認らざるのみならず情欲の奴となりて快樂に其の一念を覆たるゝが如き愚を爲さずして超然克く其が上に立つて之れを統御するとを得。快樂の奴となるの非はキニツク學派既に之れを道へり。されど快樂を目的となして之れに住しながら累せらるゝとなく又情欲偏見に羈せらるゝとなくして平然よく個々の快樂を攫取するは容易の事にあらず。此くの如きは唯だ眞智見あるものにして始めて之れを能くし得べし。傳によればアリストテッポスは此の理想を幾んど完全の度にまで實現せし人なりきといふ。

此くして此の派は個人の快樂を其の倫理見の基礎となせしが故にキニツク學派と同じく世の法律道德等に拘泥して其の累を受くるは智者の事にあらずとやうに見たり。以爲へらく社會の道德なるものは畢竟吾人が自然に享受し得べき快樂に一種の制限を附するが如きもの即ち人為法たるに外ならず。吾人は須からくかゝる制限に拘せらるることなく自由に自然の快樂を享受すべきなり。社交はた

だ快樂を得るの一方便に外ならず。必しも文明の賜たる快樂を排斥するを要せずといへども、キニク派の如くに又これが爲めに公務に服し國家に盡瘁するの義務もなしと。其思想の非社會的なる點に於いて如何にキニク學派と相似たるか而してまた如何に當時一般の社會の頹敗したりし結果として個人的思想の旺盛ならんとせしかは是等の敘述にても明かに知らるべし。少アリストテッポスの弟子なるテオドロスは云く愛國もしくは公共の爲めに盡くすは愚者の爲のみと。而してアリストテッポスは身を終るまで涙々の境に安じて何等の係累なきを喜びきといふ。

されど此の學派の思想も轉じて後ちには眼前の快樂を攫取せよといへるアリストテッポスの根本の思想と當面の矛盾を生ずるに至りぬ。否アリストテッポスみづからだに快樂を備さに比較せんとせば一快樂より結果する未來の快樂及び苦痛をも眼中に置かざるべからざといへり。この派のテオドロスは更に歩を進めて以爲へらく吾人の幸福は眼前の快樂を得るとに存せずして寧ろ心の安靜なる状態に存すと。同じくアンニクリスもまた肉體の快樂よりも朋友、家族、社會等の

社交より來たる快樂を重しとなしき。而して此の思想即ち肉體の快樂よりも智力上、精神上的の快樂を以て一段高麗にして且つ高雅なる快樂なりと見たるは取りも直さず後のエピキール學派の先驅をなせるもの也。此の派の思想の矛盾はこれに止まらざりき。即ち此の派の一人なるヘイゲルシアスは更に大膽なる言をなして云はく吾人もし現實の不幸より脱れ出で、全たく苦痛無き状態に至らば縱へ快樂をば得ずとも之れを幸福の生活といはざるを得ず。されど世の多數の人は到底かゝる不幸と苦痛との桎梏より脱し得ざるの輩なるが故に此かゝる人に取りては寧ろ死の安きに就くこそ唯一の幸福なれど。此くして快樂上の厭世説 (Eudaemonistic Pessimism) を唱へたるものは彼れを以て最初の一人なりとす。而して此の派の快樂説は論理上の自然の結果として厭世主義に終り竟に全く自家の根據を破却し了んぬ。

プラトーン (Plato, 427—347 B.C.)

前に陳べたる三學派は何れも師ソクラテースの學說中、未釋の問題を取りて其發足點となしたりしが見る所何れも一方に偏して未だソクラテースの眞意の

ある所を看取し得ざりき。是れ三學派が完からざるソークラテース學派と呼ぶる所以也。眞にソークラテースの眞想を看取して之を固かに開發したるものはプラトーン也。吾人はプラトーンに至りて始めてソークラテースの詩きたる種子の發きて絢爛の花となれりしを見る。たゞにソークラテース一家の學説のみならず希臘古代の種子の哲學思想は皆プラトーンに攝取せられ融合せられてこゝに理想の哲學の偉觀を織り成したり。而してプラトーンの倫理説の根本は其の理想學を離れては解すべからざるものなるが故に而してまたプラトーンの倫理上の理想觀は直ちにソークラテースより由來せるものなるが故にこゝに少しく其要を記すべし。

蓋しプラトーンの學説は明かにソフィストとソークラテースとの對峙より來りたり。ソフィストは吾人の知識をすべて主觀的のもの、相待的のものと見て個々人の一時の情欲を縱し、こゝにするを以て倫理の目的となしたりしが故に殊に其の末流にありて其の結果として懷疑の念、放縱の行は肆然として風を成すに至りき。ソークラテース此の風潮に對して倫理、道德を不動の基礎に築かんとして以爲

へらく徳は智見にあり。勇の何たる、義の何たるを知らずして勇者たり義人たるものは非ず。勇に關し義に關する普通の知識を得て道德の基礎はじめて完きを得べしと。即ちソークラテースは道德を成りたらしめんには其が唯一の條件、唯一の根據として概念的知識の存すると及び吾人がかゝる知識を得べきとを容さざるべがらずと見かくしてソフィストの感覺説、知覺説に對して不動の眞知識の存する所以を明かにせんと力めたり。一言すれば道德上の要求として知識の實在といふとを説き來たれるがソークラテースの位地也。然れどもソークラテースの眞知識の實在をいふや唯だ之れを道德上の要求に其の根據を求めたるに止まりて未だ明かに知識論上の自覺を以てソフィストの主觀説に對したるにはあらずりき。而してソークラテースの根本の立脚地を繼紹しながらソークラテースよりも一段明かなる意識を以てソフィスト等の主觀説に對したるものは即ちプラトーンなり。

プラトーン以爲へらく若しソフィストの徒のいふが如くに吾人の知識は唯だ各個人の一時の感覺もしくは知覺に外ならざるものとせば其れ見ゆることと在ること

と同一なりといふ結論に歸着せざるを得ず。かく解し來たれば吾人の知識はすべて刻々相變化し生滅する主觀的、相待的のものとなりて客觀的なる普通の知識は此に消え去るべし。而して若し世に客觀的なる知識無しとすれば眞偽の標準は個々人の瞬時の感以外に存せざるべく昨是今非、其の歸趨する所を失ふに至るべし。隨つて所謂誤謬といふものもまた存せざるに至るべし其は誤謬を判ずるの標準なければなり。物皆眞實にして虚偽といふものは一切存すまじければ也。既に眞偽の標準となるべき眞知識なしとせば然らばソフィスト自身の知識論なるものまた之れを眞なりとするの根據を失ふに至るべく所詮論理上の自殺に終はらざるを得ざるべしと。然らば眞知識の實在は如何なる境に求むべき。プラトンは以爲らく普遍にして不動なる眞知識は變化常なき個人の感覺知覚若しくはこれらに多少の組織を加へたる常識に求むべからず。言ひ換ふれば眞知識は此等と全く異なる境に存するものならざるべからず。而して此くの如きは唯だ此の流轉定まりなき現象界を超越せる形而上の界ならざるべからず。變化生滅を脱したる形而上の實界のみ唯だ吾人の倫理的知識の對境たるを得べしと。

プラトンは件の實界を唯一の實有となし而して此くの如き永恆の相を觀ずるものを吾人の理智(*νοησις*)となして之れをソフィスト等の所謂感覺知覺と別ちたり。而してプラトンはかゝる理智の對境となる實有をアイドス(*εἶδος*)イデア(*ἰδέα*)ウツア(*ουσιαν*)等と名づけたり。

以上陳べたる如くプラトンはソクラテースの根本的要求即ち道德に普通の根據を與へんとする要求に迫られて先づソフィスト感覺說知覺說を破したり。約していへば眞知識は生滅變化極まりなき知覺感覺の境にあらずして寧ろ知覺とは全く獨立なる形而上の境にあり。而して吾人は感官以外の理智によりて之れを直觀するを得と。然れども此くの如き普通の知識(即ち知識と實在との實界たるイデア)は如何にして倫理的性質を有するに至れるぞ。蓋しプラトンはソクラテースと共に至善(*The Good*)の何たるかを探究するを其の主眼となしたるが故に彼れが知識論の上より確めたる其の謂ふところの宇宙の實界即ちイデアを以て至善と同視するに至れるは自然の結果なりとも見らるべけれど此く見るの根據及び徑行は如何さまに解すべきぞ。

プラトンはアイデアを善と同視するに至れる動機の一は少くともアイデアの組織に於ける學說上の難點より來たれるを見る。

六〇

備考 プラトンは個々物以外に個々物をし個々物たらしむる其の類もいふべきものの客觀に實在するを説きて之れを實有即ちアイデアと名づけたり。而してプラトインによればかかる類即ちアイデアはおのゝ其の上層のアイデアに統治せられ、かくて上層列をなして森然たるアイデアの組織をなするもの即ち宇宙の全實在をなす也。(これにつきては尙ほ哲學史を参照すべし。)

蓋しプラトインははじめは専ら論理上の關係よりアイデア組織の上下の關係を見たりしが故に苟も普通名辭の存する所には個々之れに應ずるの類(アイデア)ありと見ざるべからざるの煩雜を來たしたり。即ち馬といふ普通名辭の存する所には馬の類即ちアイデアあり、牛には牛の類、犬には犬の類とやうに一切の物にして普通名辭を有す所にはやがて其れに應じて一々アイデアの存せざるを許さざるべからざるに至りたり。プラトインは乃ち此の難點を避けんが爲めに其の觀法を一變したり。以爲へらくアイデアは唯だ善美(kalonokayathia)といふが如き價值あるもの、大小一二などいふ數の關係もしくは有機界にのみ存するものにして人工物其の

他の否定、缺陷を意味するものには存せずと。かくしてプラトインは其の學說上の難點を極めんが爲めに爰の論理觀をすて、目的觀を備ひ來たれる也。詳言すればこゝにては至上のアイデアは全實在の究竟目的と見られ隨つて他のアイデアのこれに屬する關係は論理的ならずして倫理的たるに至れり。即ち一のアイデアは他のアイデアの目的に資するの方便としての價值を有するところに其の存在の意義ありと見られ此かる價值を有せざる所には(假令論理上アイデアを有すべき所にも)アイデアは實在せずと見らるゝに至りたり。アイデア組織の頂上に位するものは即ち衆善の冠にしてプラトインは之れを究竟の目的極致もしくは理想と稱したり。かるが故に此の理想に資するとの多きものは其の善たるの度は増し來たる。かくしてアイデアに論理上の關係は一轉して價值上の關係即ち道德上の關係とされる也。

プラトインがアイデアを善と同視するに至れる理由は又之れをソークラテースの人事に關する思想と對照せば更に一段の明を加ふるを見るべし。ソークラテースの思想の向ふ所はつねに事物をまかあらしむる所以の目的、または職分といふ

事にありき。其の意に云く人は皆自己の特殊の職分を有して而して之れを盡すことによりてのみ其の生を營むとを得。逮すべき目的、盡すべき職分なくしてよく存するものはあらず。畫工には畫工として盡くすべきの職あり、治者には治者とて盡くすべきの職あり。畫工にして畫くと能はず、治者にして治むると能はずば畫工もしくは治者たるの職をつくさざる者即ち畫工または治者とは言ふべからざるものなりと。プラトンは乃ち此のソクラテースの目的觀を汎く一切の有機界に應用せんとを試みたり。以爲へらく物みな其の職とする所を盡くして始めて其の物たるを得。眼にして視、耳にして聽くの用を爲さなければこれ眼にあらず耳にあらずと。かくてプラトンの目的觀は更に進みて全宇宙を掩ふに至りぬ。

其の意にいふ宇宙萬有を一個の有機體と觀すれば其の各部分はみな個々特殊の職とする所を有して而して此の個々特殊の職即ち目的を實現するによりてのみ件の各部分は其の實在の意義を有すと見ざるべからず。而して件の個々特殊の目的はみな其が上層の目的に與り之れに資するの方便としてのみ善しとせら

れ、有意義とせらるゝなり。而して此く萬有の各部分の實在の根據を以て其が善即ち目的を實現することによりてせば全實在の究竟の根據もまた其が宇宙全體の究竟善即ち究竟目的を實現するにありと見ざるべからずと。かくの如くプラトンはソクラテースが人事の方面に用ひたる觀法を藉り來たりて之れを宇宙全體に應用し以て一種光彩ある目的觀を描きたり。プラトンは件の最上層のイデアをば神明と名づけ又は萬象に光被する太陽にも譬へたり。こは宇宙の究竟の實在たると共にまた究竟の善なり。否、究竟の善即ち目的を有すればこそ其はよく全宇宙の實在たるを得るなれ。實在をして實在たらしむる所以の究竟の根據は其が善即ち目的を具へて活動する事に存すればなり。此くプラトンは道德的に宇宙を觀するの點はまさしくソクラテースと同一の立脚地にありを示すものといふべし。既に宇宙に至高の善ありとせば人生の究竟の指導者たるべき者は件の至善に關するの知識ならざるべからず。如何にとならば人は要するに一個の小宇宙にして其の實在に於いて宇宙の實在と聯なれるのみならずまた其の目的に於いても宇宙の目的と相聯なれるものなれば也。隨うて人の

善目的に最後の意義最後の根據を附するものは要するに宇宙の善目的に外ならざれば也。

六四

以上説けるが如く。プラトンは哲學攻究の範圍を嚴に人間の善人間の目的のみ劃りたるソクラテースの見地を擴めゆきて更に之れに深奥なる根據を與へたるが詳かに罄ふればは必しもソクラテースの本來の眞意に背けるものとは言ふべからず。ソクラテースは前にも説きたるが如く希臘初期の學者が専ら客觀なる自然界をのみ攻究の對境となし、より踵をかへして人事道德の方面に眼を注ぐに至りたれど彼れが自然界に對する一片の敬意は流石に之れを頑然たる物質の塊とのみ觀るとをなさずして一面にはまた目的觀の上より自然界を觀て之れを以て神の目的を實現せんが爲めに特に神智によりて美しく造られたるものとやうに解したりき。而してプラトンは此の神の目的といふ思想を取り來たりて彼れが所謂究竟善と同視したるに外ならず。按ふにソクラテースの神學と倫理學とを相合して説けるものにはプラトンは以前にも既にメガラ學派のオイクラテースの如きあり。以爲へらく吾人が神と呼び善と呼び理性と

呼び智慧と呼ぶ畢竟するに皆宇宙の一實在を指せるに外ならずと。(前のメガラ學派の部參照)プラトンは一步を進めてソクラテースが美と利とを一と見たりし思想に一段の深意義を加へ件の實在者と呼ぶに更に絶對美の名を以てしたり。プラトインもへらく人の美を追慕するの切なるや初めは形骸より精神に差別より平等に躋らんとするの念となり終には全實在の究竟目的を慕ひあこがるゝ無限の思慕愉快となり來たると。善美に對する追慕の念これ即ちプラトインのエロース(愛)と稱するものなり。而して此のエロース論は前のプラトインの知識論と照らし考ふれば意義一層明かなるべし。其の意に云ふ吾人はもとイデア(實在)の知識を有せざるにあらず。曾てこの世に生れいづるの前實世界にありて親しく觀たりしイデアの面影今に大概は忘れられたれど尙ほ心性の深處に依稀として其の殘光の明を認め得ざるに非ず。此の微かなる殘光を辿りてむかしの面影を憶ひ起こさんと力むるこれ即ちイデアに對する愛也、エロース也。吾人が善美を慕ひ求むるの念あるは要するにこれが爲めに外ならず。而して此の追慕の一念は或は形美を愛するの心、即ち所謂兩性間の變愛として現じ或は眞

善美を觀んと欲する哲學研究の念となりて現すと。

以上述べ來たれるが如くプラトーンは一躍して倫理學を實験學と同一視するの見地に立ちたりしが、かゝる見地に立てる彼れは日常の實際的道德に關しては如何なる見解を抱きしぞといふ事次に明むべき問題なり。詳しくいへば智徳快樂及び此等のものと人生の福祉との關係につきてのプラトーンの見解は如何。言ふまでもなくプラトーンの上の徳となせるものは善即ちイデアに關するの哲學的知識を有するにあり。以爲へらく明かなる理智によりて至善を觀ずるものは徳の秀れたるものなり。吾人の未だ此の現實の生活を取らざりし已前にありては純粹なる理眼を以て面のあたりにイデアの真相を觀じたりしが一たび肉身に繋がるゝに及びては觀るところ離るるを免れず。肉に屬する種々の感情意欲は吾人の理眼を妨げて迷妄の境に墮せしむ。此の故に人もし眞に生きんと欲せば先づ死するの術を學ばざるべからずと。プラトーンの倫理説はこゝに至りて厭世的の一面を有し來たる。プラトーンはこの一面に於いて吾人は須らく形骸の羈絆を脱して善美の理想境に進むべきを奨説せる也。されどこは要す

るにプラトーンの倫理説の一面たるに過ぎず。如何にとならば彼れはまた他の一面に於いて希臘人の一大特色ともいふべき美術的精神を十分に具へたれば也。即ち彼れは吾人の智力技能其の他のすべての性能を圓滿に發達せしめて之れに調和の精神を現するをもて美徳となしたり。説いて云く理想に達せんが爲めには必ずしも肉身の生活を脱離するを要せず寧ろ現實の生活に出來得るだけ美しく圓かにイデアを現せしむるをこそ吾人の目的ともすべけれど。而して此く現實の生活にイデアを現せんとせば言ふまでもなく吾人はイデア其者に對する明かなる知識を有せざるべからず。プラトーンは乃ちこゝにソークラテースの知徳一致の思想を繼ぎ來たりて以爲へらく吾人の現實の生活を完うせんにはイデアに對する明智見なかるべからず。至善に關する眞知識を有するものにして始めて克く之れを實生活に現ずるとを得べし。知りて而して行はざるものはあらず。至善の知識を有して而も我れに善からぬものを探るものなし。この故に眞の政治家は同時にまた眞の哲學者ならざるべからずと。プラトーンが如何ばかりソークラテースの思想を探り來たれるかは此にも克く見えたりといふべし。

然れどもこゝに考ふべきは斯くの如く善に關するの眞識知を有するものにして始めてよく日常の生活を完うし得べしとするも、此かる哲學的知識を有するものは果たして幾人かあるべきといふ事也。至高の徳は善の知識其者と離れて存するものにあらずとするも此くの如きは唯だ教育あり天才ある少數の人にのみありて世の多數者は概ねかゝる明知識を有せざるが常にはあらざるか。而してかかる徒に對つて哲學者の明知識と高德とを求むるは寧ろ細苛に失したるの見にはあらざるか。こゝに於いてかプラトーンは更に第二級の徳を設けて哲學者的徳の下に哲學者以外の徳を屬せしめたり。然らば哲學的徳以外の徳即ち世俗に所謂勇敢節欲正義などいふ市民的徳(Civic Virtue)に對するプラトーンの見解は如何。

プラトーン以爲へらく世人が恐怖又は私欲の誘惑に抵抗して克く義務を行ひ得るは是れ彼等が善惡に關してたとへ哲學上の知識を有せざるまでも少くとも正當の意見を有するが故と見ざるべからずと。然らば彼等世俗の徒は件の善惡に關する正當の意見なるものを何處より得來たれるぞ。プラトーンは半ばは之を

天賦の力に歸し半ばはこれを「習慣と實踐」とに歸し而して特に後者を重しと見たり。プラトーンはこの理由によりて教育と訓練とを重んじて躰育と美育との併行を主張し凡ての市民的美德は唯だ此の法によりてのみ修め得らるべしとなせり。

備考 プラトーンは所謂非哲學的即ち哲學者以外の世俗的徳を種々に區別して其の道徳的價値の高下を明かにせり。彼れは件の世俗的徳の最下なるものを以て肉欲に耽るとより來たる種々の不徳を自制する知恵の徳(Pudence)となし而して之れを解して云くこの徳は道徳上より情欲を自制するにあらずして自制せざるよりも寧ろ自制するかに一層多くの快樂を得べしといふ打算商量の念より來たるの徳なりと。プラトーンは件の世俗的徳の最高なるものを心の情的方面即ち "Spirited element" (此の語の意義は後に至りて明かなるべし)が哲學即ち理性に統御せられて正當の位地を占めたる状態なりとせり。

此くの如き道徳上の陶冶はたゞに機根の小なる徒に對して要あるのみならず更に進んで哲學門に入らんとするの徒に對しても其の要あるは論を順たず。プラトーン云く「智慧以外のすべての徳は皆習慣と實踐とより來たる」と。此の一語はソークラテース知即徳といふ教理と反するに似たれど然らず。如何にとされば

プラトーンは一面に於ては尙ほ依然として知識は必然に徳を伴ひ來たると信じ
たればなり。唯だプラトーンが此所に主張せんとするの點は單なる知育といふ
と以上に或一種の準備を経たるものにあらずば此かる知識其者を有するを得
ざるべしといふにあり。

然らば知育上の一種の準備とは何ぞや。プラトーンは之れを以て吾人の理性が
背理(不合理)の心要素を統一して心生活の各部に調和を現ずるとにありとせり。
云く人多くは不合理欲に驅られて理性の命と背馳す。これ畢竟するに心生活の
統一の完たからざるが故なり。この故に吾人の心にして豫めかゝる調和的狀態
を有せずば一旦理性の明知見の明をも爛らざるゝに至るとも吾人は此の明知見の
明に従うて行ふと能はざるべし。否知見其者がかゝる不調和なる心状態には入
り來たる能はざるべし。かゝる故に吾人は先づ知見其者を得ん爲めに其が準備
として心生活の調和統一といふ事をはからざるべからずと。然らば如何なるを
心の調和せる状態とはいふぞ。プラトーンはこゝに於いてカソクテリスに
一步を進めて心理の分析を試みたり。彼れはまづ所謂理慾(不合理)を別ちて牒欲

(Appetite)と情欲(Spirited)との二となしたり。プラトーンに従へば前者は牒に屬す
る凡ての欲を標し後者は勇憤の念名譽の欲等すべて激越せる感情の群を標す。
後者即ち情欲は之れに適宜の訓練をだに加ふれば理性を資けて特殊なる一美德
を成すべく前者即ち牒欲は前者よりも一段卑く理性に従屬すると以外には何等
の徳をも成さざるもの也。

プラトーンは更に上の心性の三區別(理性、牒慾、情慾)に應じて所謂四徳説を組織せ
り。四徳とは知慧(Wisdom, σοφία)又は勇敢(Courage, ἀνδρεία)節欲(Temperance,
σωφροσύνη)公正(Justice, δικαιοσύνη)是れなり。此の四徳は當時の希臘人の道德的
意識に存したりしものにして後世四大徳と稱したるもの、儒家の五倫または四徳
などいふものと類を同じうす。プラトーンは此の中特に重きを知慧と公正との
二徳に置きたり。知慧の中にて最高なるものは哲學者の求むる真知識をいふ。
また心性の諸部分の美しく統御せられたる状態はプラトーンの最も貴びて有ら
ゆる社會的關係に於ける公正の根源となせるもの、彼れが之れをデカイオシチー
(δικαιοσύνη)と名づけたる所以此に存す。デカイオシチーははゞ英語の Justice (公正)に

當たりておもに社會的行動の關係をあらはす義なれどプラトーンが之れを一種の心状態を表する義に用ひしは思ふに彼れが心理分析の結果として個人の心状と政治的社會との間に一種の類似の存するを見乃ち後者に慣用せられたる語も直ちに前者に適用せし故にやあらん。蓋し秩序ある國家にありては其の首位に知慧を代表すとも見らるべき治者の一團あり次に勇敢を代表すとも見らるべき戰士の一團ありて更に其の下位に此の二者とは異なりて専ら物質上の需要に應じて其の供給を職とする農工商恰も個人に於ける軀欲に比すべきものにして其の國家に對する關係は唯だ秩序の下に服従するにあるのみの一團あり。而して此等一政體の各部分が相調和してものゝ其の職とする所を成ずる點に個人及び社會の安寧繋りて存すとせばプラトーンが此かる状態を表するディオカイオシヤ一の語を個人の心状態に適用せしは奇しむに足らざるなり。

備考 彼れは上の知慧と公正とを根本的なる二大徳となし且つ究竟に於いて二者は相合するものと見たり。以爲らく知慧ある人の心は凡ての部分で調和的活動を現したるの心なるべく而してかゝる調和的活動は理性の明瞭なるものにして始めて完全なるを得べしと。されど要するにプラトーンは知慧と公正とを心の二大徳御的取

理を見ても其の二者の精密なる關係につきては詳説せざりし也。公正を意志の對境と見、知慧を知力の對境と見てや、二者を別たんさせし跡なきにもあらず。

プラトーンは上に説けるが如き個人の諸徳はひとり國家の秩序ある統御の下にありてのみ完全に發達するを得べしと見たり。此に於いてか彼れは其の有名なる理想的國家を描き個人は國家の爲めに教育を施すべき所以を獎説せり。而して其所謂教育は上の二階級に止まりて農工商の最下級には及ばざりしを見る。國家は個人の教育結婚其の他の日常の小事細故に至る迄悉く之れに干渉して指導を與ふべきものと見たるはプラトーンが描ける理想國の特色なり。されど他方には又立法者は須らく種々の教訓をも加味して之れを指導すべしと説ける所一言すればプラトーンの理想國は近世の國家と中世の教會とを合せたるが如き觀あり。さもあれ其の個人に對する國家の法律的干渉の嚴且繁なるは今日の吾人をして少しく奇異の感を抱かしむ。其の一二例を擧げんか。云く市民たるものは凡て手工小買となり又は利の爲めに法廷の辯議を爲すべからず。云く三年の間音樂を學ぶべし。云く十八歳に至るまで飲酒すべからず。云く四十歳に至

るまでは宴に蒞みて豪飲する勿れ。云く四十以後にして旅行すべく三十五以後にして婚せざるものは罰あり。云く詩歌を檢閲し饗宴を儉素ならしむべし。云く産まれたる子は之れを父母の家に止めずして直ちに國家の學校に送るべしと。蓋しプラトンの理想國は其の範をスバルタの政體に取りたるは疑ふべからず。則ち彼れが國家有用の才を得んが爲めに特に婦女子の教育に重きを置きたりしが如き其の一例なり。要するに此くの如く個人が國家と合して其の全體の道徳的生活を實現せんとしたるものはプラトンの國家主義なりと見るべし。プラトンはかくして必しも國家を以て個人を壓したるにあらざ個人其者の徳性が唯だかくしてのみ完き發達を得べしと信じたれば也。

さて以上叙べたる所は如何ほどまでプラトンの究竟善に關する意義を明ならしめたるぞ。此の一間を釋するにあたりて先づ注意すべきはソクラテースもプラトロンも個人の目的即ち究竟善は自己の安寧若しくは福祉 (εὐνομία) にありといふ一事につきては曾て何等の疑義をも挿まざりきといふことなり。彼等が實際の問題となししところは個人の究竟善は果して自己の安寧なりや否や

の問題にはあらずして寧ろ世の人の通常善とし望ましとせざる智慧快樂富貴名譽などいふものは果して如何程まで吾人の安寧もしくは福祉の要素なるべきものなるかといふ問題にありしを見る。一言すれば智慧快樂名譽などいふのは果して吾人の福祉と見るべきものなるか否かの問題は常に彼等の心理に往來しき。而して此の問題に答へて其の當を得んとせば先づ善其者の眞意義を明かにせざる可らず。然るにプラトンの理想哲學は一躍して善其者を直ちに宇宙の根本實在と同視し了りぬ。善を宇宙の根本實在と見るは妨げずとするも唯だ此くの如き抽象の善は人の實際の善と何等の關係をも有せざるを如何にせん。之れに反してキニッオ學派キレテ學派の求めたる善は少なくとも實際の世界に於ける具象の善なりし也。然らば此くの如き善はキニック派の所謂知見もしくは徳の活動にありと見るべきか或は又之れをキレテ派の所謂快樂にありと見るべきかもし之れを後者なりと見れば其の意義は如何。

プラトンの此の點に關する見解は模糊として其の要を得がたし。彼れは一面には善即快樂と揚言しながら他面には直ちに之れを否定し快樂は知見あるもの

の求むべきものにあらざるとなしたり。以爲へらく多くの快樂は苦痛を混ざるを免かれず。蓋し快樂は先づ苦痛ありて之を除去することに存ずればなりと。彼れの會話篇を披けば兩端の見は到るところに錯綜して存じ其の真意の何れにあるかを解しがたからしむ。されど概していへば彼れは快樂よりも察る知見實際上の(に)重きを置きたりしは争ふべからず。快樂を以て幸福の一部と見るは彼れの否まざりし所なるべしといへども事物の過不及を制して美しき秩序と調和とを現するものは唯だ知見にありと見て随つて知見を以て幸福の要素となせるは争ふべからず。吾人の心性はひとり知見に燭らされてのみ能く圓滿に活動することを得べしと見て徳とは要するに此かる状態を指せるに外ならずと見たるが蓋しプラトーンの真意なりしなるべし。

アリストテレイヌ (Aristotele, 3084—3022)

プラトーンの倫理説を闡了りてアリストテレイヌの倫理説に至らば理想の天地を辭して現實の世界に入るの感なきにあらず。二家の學風に著るき差別あるはアリストテレイヌが其倫理論に於いて激しくプラトーン及びプラトーン學派

の所説を駁撃したりしを見ても分明なるべし。さもあれ詳かに二家の學説を檢し來たれば其の根本に於いて幾んど符を合するが如きものあるを發見すべし。アリストテレイヌがプラトーンの學説に攻撃の鋒を向けたるは主に倫理の方面にありて其の純理哲學上の根本思想に至りては寧ろ幾んど合致せるの觀あり。アリストテレイヌがプラトーンのイデア論(プラトーンの學説の條参照)に反對を試みたるは精密に見ればイデア論其者に對してよりも寧ろ其のイデア論を倫理説の根據となせる點にありといふべく隨うて二家の學説の差はむしろ其の枝葉の點にありとも見るべし。之れを後のストア學派とユピク로스學派との對峙に比すれば二家の差は幾んど言ふに足らざる程なり。倫理論其者の上よりのみ見るとアリストテレイヌはプラトーンの倫理説に對して全く異見解を立てたりといはんよりも寧ろ之れに一段の分析研究を加へて之れを十分發達せしめたるものといふを妥當とすべし。

先づ暫らく二家學説の相似を説かんにプラトーンは前にも説けるが如く人の唯一の學唯一の智を至善(天地の万有の)に關する知識となし他の凡ての善に關する

知識は擧げて此の中に含まれたりを見随うて知識を衆徳の源と見たり。此くプラトーンは純理哲學上の善と倫理上の善とを同視したるにかゝはらず而してこの點こそ即ち後にアリストテレスの痛擧したる點あるにかゝはらず仔細に其の學說の實際を觀ればプラトーンは毫も此の形而上的なる至善の知識より實際界に於ける善即ち日常の安寧もしくは福祉といふ思想を抜き出ださんとは力めざりき。ましてや此の一端より學術工藝などに於ける有らゆる特殊なる知識を導き出さんとするが如きとをや。即ちプラトーンは一面に於いて倫理學と實體學とを混同したるの觀はあれど尙ほ二學の間に明らかなる一線を劃して漫りに後者によりて前者を律するが如きの妄をなさいりき。されば彼れは後にアリストテレスが實有に關する形而上の知識と人間の善に關する實際上の知識との間に劃したる區別につきては何等の異解をも挿まざりしなるべし。殊に彼れが晩年の著を續けば此の思想の影の歴々たるを見るを得。其著 "Philibus" の中にて善の問題は全く人間の善にのみ劃せらるべきものと明説せるが如き又『法論』に於ける彼が説の著るく實際的となりて幾んど前の純理哲學的痕跡を留

めざるに至れるが如き以て證となすべし。其の一二の例は彼れは前きに説きたる智勇節正の四徳に對してこゝには更に健康、美貌、腕力、富の四徳を掲げたるが如き又前きに智慧を衆徳の根と説きたるに對してこゝには寧ろ中和の徳を獎説せるが如き其の他結婚の事奴隸待遇の事などに關していちじるく實際的見解を立てたるが如き彼れの倫理學説はかくして歩々思想の峰頭より下りて實際の人事に近づき來たれる點に於いて幾んどアリストテレスの學説と體を接したるを見る。翻りてアリストテレスの學説に觀んか彼れはいたくプラトーンが倫理を純理哲學の根據の上に立てたるを難じながら而も其の一面に於いてはプラトーン自身にもまして、人的善と神的善との關係を詳説せるは寧ろ一奇觀ともいふべし。蓋しアリストテレスは宇宙の至善をもて主觀にして同時に客觀を兼ねたる純理的思想 (Theoria) の活動と見、自觀、自照、永恒不變の靈智と觀じたり。プラトーンの所謂至善なるイデアは未だアリストテレスの説ける程に明かなる靈智若くは精神とは見るへからざれど而も其が感以上形而上のものたるは明なり。されば此の點に於ても二家の所説に類似のふしあるは否むべからず。更に人の

至高至善の生を其が純智理性の活動にありと見て之れを哲學者の理想境となせ

るが如きは二家全く其の符を合たるものともいふべし。

次にソクラテースの知即徳の説に關してはアリストテレスはプラトーンよりも一層強く反抗の態度を取りたるの觀あれど必しも然らず。二家共に以爲らく人は皆自から善と見たる事を目的として行爲す。此故に完き徳は完き知見より來たるこれ必然の理なりと。此の點に於いて二家の所見は幾んどソクラテースの所説と同揆なりといふべし。されど二家は此に一步を進めて以爲へらく此くの如き道德的知見は單なる知の活動とのみ見るべからず。むしろ知と他の心の部分即ち意慾不合理欲との正當に調和したる人心のみ能く此かる道德知見を有することを得。意慾即ち不合理性が知其者の活動を妨げて其の明を蔽ふが如きことあるは人皆の經驗する事實なり。この故に徳育は單に知識を授くることのみによりて能く其の功を奏し得べきにあらず。重んずべきは人の性に應じて意志の訓練を施するにあり。意志の訓練先づありて後ち知識其用を成すと。此の點はアリストテレスの倫理説の主要部をなせるものにして彼れが明かに

ソクラテースの唯知説に其の歩を進めたる所なりと見らるべけれど而もプラトーンとても此點に説き及ぼせるは前條所説の如くなれば直に之を以てアリストテレスのみの創見と断す可らず。又快樂に關するアリストテレスの見解も要するにプラトーンと大差あるに非ず。アリストテレス以爲らく快樂は人の福祉(又は安寧)の要部には非ずして寧ろ福祉と必至の關係を有するに止まる。詳言すれば福祉は其の抽象の眞理を逞ふ場合と善行を爲す場合とを問はず要するに一種の徳に外ならず。(human wellbeing is essentially well-being)即ち人の正當なる行爲の目的に知識若くは徳行にして知識若くは徳行の結果として生ずる快樂其者にはあらず。但し快樂はかゝる所行に伴至して之れに光彩を放つ且つ完からしむるものなるが故に強ちに之れを排するの要なく寧ろ所行の一部として之れを慾望するは不當の事にあらず。而してプラトーンもまた此れと相似の見解を有したる其の『對話篇』中に明かなり。中にも不正にして野鄙なる快樂は眞の快樂にあらずといふ見解の如きは二家全く其の揆を一にせるを見る。

以上アリストテレスとプラトーンとの學説の相似點を擧げたるが以下其の差

異を明かにすべし。まづアリストテレースのアラトーンと著るく異なる所は其の倫理研究法の劇然として歸納的常識的なりしの一也。思ふにアラトーンの對話法は言ふ迄もなくソークラテースの歸納的研究法を範として成りたる者なれど彼れが理想的研究法として重きを置きたりしは寧ろ演繹法なりき。彼れは常識を以て絶対の知識に躋擧する一步又は起點に過ぎずと見而して件の絶対善の知識によりてのみ始めて下方個々の實際の善は其の真意義を得べしとせり。即ち是明かに絶対善の一律を以て他の凡の善を抽き出ださんとする演繹法に外ならず。アリストテレースは此くの如き超絶觀を排して故のソークラテースの位地に復りたり。即ち常識を彙集し分析して此の中より倫理の目的を發見せんとを力めたり。(こゝに所謂歸納法の義は廣義に用ひたり即ち凡て個々特殊の事より發達して一般普通の結論に達する研究法の義と知べし)謂はゞアリストテレースの論述の躰裁はソークラテースの對話法を一層學者風専門風の獨白となせるものとも見るべし。

アリストテレース此くしてまづ攻究の一步を開きて以爲へらく人の事をなすや

皆一種の結果を目的とせざるはなし。或は其事自身を目的となし或は之を他の目的に資するの方便となす。要するに皆或一種の結果を追求するの所行たらざるは無しされど一切の物皆方便としてのみ存するにあらざるは明かなるが故に是等の諸目的方便を統紀する何等かの究竟の目的存すと見ざるべからず。通常條件の究竟の目的を安寧とす。

備考 茲に安寧を譯せるは原語の *eudaimonia* なり。通常之れを幸福即ち英語の *happiness* と譯すれどもヘレチキスに主として感情の状態即ち快感といふを意味するが故にアリストテレース(アラトーン、ストア派も然り)の *ダイモニア* に附したる意義とは明かに違ふところあり。即ちアリストテレース、アラトーンなどの用ひたる *ダイモニア* の語は幸福即ち快感の義をも含むと共に寧ろ注として理性の活動の義を含む。故にこゝには此の混同を避けんが爲に特に安寧即ち英語の *"wellbeing" or "welfare"* の譯語を用ひたり。

されど謂ふところの安寧とは何ぞと問ひ來たらば其の義、人によりて一ならず。或は之れを利なりといひ或は之を名なりといひ其の他紛然として歸を見ず。然らば如何なるを眞の安寧とすべき。アリストテレース以爲へらく人には皆特殊

の職あり。而して其が職とする所を盡くすと盡くさるとによりて或は善或は悪の別を生ず。然らば人の人たる其の職は何ぞ。營養又は生育にあるか。否らず。營養と生育との職は植物だに之れを有すれば也。感覺上の生活にあるか。否らず。此くの如き見解は取りも直さず人と動物とを同一視するものなれば也。然らば人の人たる特殊の職とは何ぞ。他なし。理性の活動是れのみ。人の他の動物と異なる所は其の本然の理智に従うて行動する點にあり。而して所謂安寧は此かる理性に従ふ心の活動に外ならず。徳 (well-being) に伴うて生ずる心の満足これ即ち安寧なり福祉なり。而して此にいふ徳は人の自然に具へたる諸性能を合理的に活動せしむるより來たる。尙如何さまに活動せしむれば合理的と言ひ得らるべきかは後の説明に見るべし。諸性能を圓滿に活動せしむればこゝに満足の感來たる。此の故に徳即ち諸性能の活動と快樂とは不離の關係を有す。アリストテレスは此の二つ即ち活動と快樂との二意義を括りて其の所謂オイデアイモニア (安寧) の一語中に含ませたり。此くの如くアリストテレスは人の人たる職分は其の神性の一部ともいふべき理性の活動に外ならずとやうに説きたり

しが實驗的精神に富める彼れは流石にこの一點のみに繫住せずして汎く普通の常識に顧み富貴門閥美觀健康兒子朋友等をも多少吾人の安寧に資するものと見て之れを排せざりき。其の徳理智に従へる心の活動と快樂との二面を合して一邊の見に賜せざりしが如きも彼れが普通の經驗を否まざりし結果なりと見るべし。されど彼れが是等外物に關する見はいまだ不明瞭の節あるを免れず。即ち如何ほどまで外物が徳性の成就に與るべきものなるかといふ委曲の説は彼れの倫理説に缺けたりしを見る。アリストテレスみづから倫理學に科學的精神を求むるを苛なりとして以爲へらく倫理學の目的は理論上完全に善の何たるかを定義するを要せず。唯だ實際のうへより吾人の善即ち安寧の主要なる成分を説明すれば足れりと。かくしてアリストテレスは力めて當時の希臘人の道徳的意識に存したりし普通の事實を探りて之れに分析を加へたりき。アリストテレスが常に常識以上に出でずして其の倫理説を立てんとしたる點はプラトーンと異なる著るき點なり。彼れ以爲へらく倫理上の真理も物理上の真理と同じく個々の道徳見を蒐集し比較し歸納し分析して始めて是れに達することを得べ

し。善悪に關する人の見る所はさまざまなれば此の中より明瞭正確なる真理を得んは頗る難きに似たれども而も尙ほ大躰の上より真理と思はるゝ一致點を抽きかたきにはあらずと。此くの如くアリストテレスが兎角常識に拘せし事は其の倫理論をしてやゝ淺薄且散漫に了らしめたる觀なきにあらねどこれプラトーンと異なる所而も當事の希臘人の一般に理想とせし「善美」*kalokagathia*の生活に分析的説明を加へたる點は彼れの説が永く一種の歴史的趣味を有して後代に讀まるゝ所以也。

備考 希臘語の *kalos* (美) と *agathos* はいづれも略は同様の意義に用ひられたり。徳は徳行者に取りて其れ自身に善きものなるが故に其はオのつから美の性質を帯び來たれり。後の希臘哲學にはカロス(美)の語はますます「道徳的善」の意義を著し來たりき。

さてアリストテレスは此くの如く實驗的研究を重んじたるが故に其の自然の結果として彼れはプラトーンが前に最下の徳としたりし節慾即ち中和の徳を衆徳の根となすの見を取るに至れり。彼れ云はく過不及なき事の中庸 (*mesotês*) に就くが如き行爲の習慣となれるものは是れ即ち徳なり。前きに謂ふ所の理性に従

ふ活動とは要するに此かる事の中道を得たる状態に外ならず。喜怒哀樂といふが如き自然の感情の發動其のまゝは善にも惡にもあらず唯だかゝる自然的感情が理性の指導訓練を歴て一定の習癖となれる者のみ能く道徳の性質を帯び來る。詳言すれば感情にわれ行動にわれ理性の指導の下に過不及の兩端に走るの弊を避けて其の中庸に於けるの状態之を稱して徳行といふ此點またプラトーンの倫理説より來たる而して此くの如きは意志の訓練を歴て心内の衝突を感ぜざる君子のみ唯だ之れを能くし得べし。されば此の點より見れば徳は一種の技術上の熟練ともいふべし。換言すれば習熟の結果として始めて能く事の過不及なき中正を得べければ也。徳は知にあらず理にあらず意志の實踐なり習熟なり反覆なり。習熟反覆の度を重ねて始めてよく意志は理性の統御に服するを得べく此くして能く事の中道を行うて誤りなきを得べき也。(ソークラテースの知即徳を翻して意即徳と見たるもの即ちアリストテレスの創見也。たゞしプラトーンも既に此の點には論着せざりしにはあらねど極めて分明に意志の實踐を説き出だしたるはアリストテレスと爲すべし。唯だ徳の他の技術等と異なる所は徳

其者の美の爲めに之れを行うて毫も是れ以外の目的を有せざるにありとす。さて徳は此くの如く事の中庸にあれども謂ふところ中庸は數學的又は絶對的中庸にあらざ。中道は其の時其人其の事に關して必しも劃一ならず。小兒の中道とする所大人の中道とする所婦女子の中道とする所皆異ならざるを得ず。即ち相待的なるを免れず又個々特殊の場合に應じて千差万別ならざるを得ず。隨うて所謂中庸は動もすれば二極端の一に偏する傾きあるを免れず。勇の怯よりも寧ろ暴に近きが如き其の一例なり。要するに所謂中庸は知見の明ある達識の士にして始めて克く之れを擇びて過りなきを得べき也。

アリストテレスは此くの如く先づ徳を概論して、さて後、個々特殊の徳に論及せり(以上徳の概論はソクラテース、プラトーンの所説より來れるは明かに認められ得らるべし)。こゝにもアリストテレスは唯だプラトーンの諸徳表を礎として更に當時の人の常識に存したりし若干の徳を探り來たりて之れに附加せしに外ならざるを見る。されど二家が主徳に關する觀やうは著るく其の趣を異にす。プラトーンは諸徳の一致點もしくは融會の點に重きを置きたるが爲めに其の個々

特殊の徳を論ずるにも其の觀念を推擴しゆきて宛かも徳の一般論となれるの觀ありしが(これプラトーンの演繹的精神の勝さりしが故也)。アリストテレスは之れに反して一意歸納分析に力めたる結果として所論寧ろ狹隘に失したるの觀あり。即ち彼れはむねと常識に執して個々の徳を別々に離して研究したりしが故に其の見の寧ろ狹に流れたる觀あるを免れざりき。さてアリストテレスはプラトーンと同じく勇と節とを心の背理的(不合理的)方面に屬するものと見て先づ此の二徳より論を立てたり。彼れ以爲らく勇は嚴密にいへば幾んど戰闘の一面にのみ割せらるべきものなり。恐れず、わるひれずして光榮ある死に面する之れを勇の徳といふ(こゝにいふ勇は武勇、即ち英語の *valour* に當る、アリストテレスの用いたる希臘語の *andreia* は正しく武勇の義なるべし)而して此くかゝる光榮ある死に面するの機會は多く戰時にあるが故に勇の徳は嚴には武勇の徳ならざるべからず。孤舟風濤の險に遭うて怖れざるは勇なるに似たれど嚴には之れを勇と稱すべからず。如何にとらば此かる場合の死は光榮ある死にあらざれば也。又眞勇即ち勇ましき行爲其者の善なるが爲め高貴なるが爲めに之れを行

ふ眞の勇は耻辱もしくは苦痛を避けんが爲めに振ふの勇、血氣の勇、もしくは無知、憤怒の勇などは嚴に之れを區別せざるべからずと。

此くの如くアリストテレースは勇を専ら戰に關する徳の意義に劃したりしが彼れは又節欲をも當時の慣用に從うて主に食色の欲を制する徳の意義に用ひたり。云く節欲の士は食色の快樂に耽るを避け其の多きを樂はず其の少きを厭はず淡然として其の中和を守ると。

勇と節とは主に肉欲を調整するに關したる徳なるがアリストテレースは次に此の二者よりも一段高上なる欲に關する二徳を擧げて論じたり。一は富にして他は名なり。前者の徳を寛裕(Liberality)となす。侈と吝との中庸なり。この徳は財を散じて人を賑すに吝ならざる中産の人之れを能くす。同じく富に關する徳にして寛裕より一段華やかなるは豪華(Magnificence)の徳なりとす。こは大産鉅資を有して社會上流の地位を占むるもの、能くする所神祇に賑かなる供物を捧げ盛宴を張り、大艦を送り、歌舞を盛んにする等をいふ。名譽の欲も其の度を適宜ならしむれば此に一種の美德を生ずべし。されど當時この徳を表するに適當なる

語なかりき。名聞(Ambitious)若しくは其の裏面なる無名聞(Unambitious)の語は時として誹謗の意を含み時としては賞讃の意を含むの語として用ひられたるが故に件の徳を表するの語としては共に當らず。アリストテレースは乃ち此に大志(High-mindedness)といふ一語を新たに提出して此の徳を表し口を極めて之れを讚したり。其の要に云く大志は劣と慢との中庸にして衆徳の冠ともいふべきものなり。大志の人は自家の眞價値を認めて自ら慢せず自ら侮らず毀譽の爲めに心を動かさずと。アリストテレースが更に詳かにこの徳を描くに及びて分明、基督敎の理想と相乗けるに至れるところ一段の趣味あり。以爲へらく大志の人は富貴の家に人となり他に施すを好みて他より施を受くるを辱とす。事なければ故園に歸臥して小事に干與せず人の下風に立つを辱しとせず。彼れは天下に畏るる所なければ敵に對し友に對して磊々掩ふ所なし。彼れは俗衆に對して時に冷語反語を放つとあるを外にして常に公明なり眞摯なり。惡意を抱かず冗語せず喜怒を色に形さず其の歩武や井整たり其の音吐や沈重たり其の談話や周到なりと。(宛然これ東洋的豪傑の理想也)。

次ぎに温厚(Gentleness)の徳は短慮(Trascibility)を無感(Insensibility)を友愛(Friendliness)は卑下(Obsequiousness)を剛直(Surinness)の中位にして機智(Wit)は愚鈍(Clowish)を謙謹(Buffoonery)の中位なり。此くの如くしてアリストテレースが諸ろくの徳不徳を常職に参して分析し説明したるは彼れが倫理説中最も趣味ある部分として注意すべくまた其の説明の頗る巧みなるものありしは否むべからずといへども未だよく盡くしたるの説とはいふべからず。中にも勇を専ら戦に關したる徳となせるが如き節を肉欲の節量といふと此のみ劃したるが如き又寛裕を定義して己れの爲めにする利慾の費財と他の爲めにする慈惠の費財との別を附せざりしが如き以て其の見の狭に失し淺に流れたるを知るべきなり。是れ未かしながら彼れがむねと當時の希臘人の間に普通に行はれたりし倫理的用語の意義を分析すること力に注ぎたる自然の果なりといふべし。彼れはプラトーンの如く或原理より論下して諸徳の意義を定めざりし寧ろ主として忠實に常職の分析に力めたりし也。又彼れが徳を以て兩極端の中庸を乘るにありといへるが如きは巧なりといへども未だ科學的説明となすに足らず。量の適宜事の中庸を得るの要

は之れを藝術の製作につきても言ひ得べき事なれども此の點につきてはプラトーン既に説明せり而も徳と不徳との關係を數量の上よりのみ定めんとせるアリストテレースの見はよし甚しき誤謬なき場合と雖ども未だ以て確實なりとは稱すべからず。殊に愚直(Simple Veracity)を誇大(Bosstfulness)を似而非謙遜(Mock-mobesity)との中位にありとなせるが如き牽強附會の太甚しき一例を見るべし。アリストテレースは以上の諸徳を離して別に公正の徳(εὐκτασύνη)を詳説したり。彼れの説によれば公正に廣狹の二義あり(プラトーンは之れを混じき)。廣義の公正は英語の(Uprightness)直に當す。即ち廣く破法(adikia 又 avaria)の行爲を避くるといふ程の義にして社會的方面に於ける衆徳を總ぶるもの也。次ぎに狹義の公正は英語の(Justice)公正に當す。即ちすべて不公平なる所爲に對する意を表す。是の意義にての公正に二種の別あり。一は分配上の公正にしては財産名譽等を其の人の價值(こゝに價值といふも道德的價値の義にはあらずして種々の場合に於ける價値の義を含む。例へば公金を分配する場合にありては各市民が國庫に納むる資の多寡即ち價値に應じてそれを分配する等の意なりと知るべし)に應

じて分配するを言ふ。二は賠償上の公正にして被害者の爲めに其の受けたる損害と同量の賠償を加害者に課するをいふ。アリストテレスはこの外に更に公正の第三義を加へて之れを交換上の公正と名づけた。以爲へらく人が貨物を交換するに方りて二物其の品を異にするも價值其の衡を得ば之れ即ち公正なり。例へば一方に於ける質の良は他方に於ける量の多によりて其價值の平衡を得るが如し。以上はアリストテレスが所謂公正の説明也。おもふに個々特殊の場合に於ける謂ふところの公平なる分配公正なる賠償公正なる賣買なるものは果たして如何ほどのものなるかはアリストテレスの以上の説明のみにては未だ分明ならずと雖ども、兎も角も以上の區別は當時にありては一種の創見と稱ふべし。アリストテレスはまたソフィスト以來の問題即ち正義は自然の徳なるか將た人爲の徳なるかといふ問題を取り來たりて論じたり。彼れは國家の明文に現れたる正義には明かに自然的と人爲的との二個の案を含みたりと見たり。以爲へらく國家の法律の定めたる市民權の中には明かに自然的正義のみにては掩ひ盡す能はざる幾多の要素あるは否むべからず。而して此くの如きは唯り人

爲的正義もて説明し得らるべきものなりと。則ち市民の權利を定めたる國家の法律中には自然の正義法以外に更に人爲の正義なる者あるを言へる也。されどアリストテレスは二者の範圍境域につきては未だ明かに説明する所なかりき。又如何にして自然的正義より人爲的なる市民權の由來せるかといふ點につきても彼れの説ける所頗る不明なるを免れず。されば彼れは國家の成文律にのみ現れたる正義よりも自然の正義公道即ち equity を優れたるものと見もし國家の法文をそのまゝに適用し得べからざる例外の場合あるも件の自然の正義即ちエキアデは克く之れを決定するを得べしとやうに解したり。

吾人がアリストテレスの倫理説に奇とするの一事は其の仁慈 (Benevolence) の徳の閑却せるにあり。彼れが多少此の徳に論着せりと思はるゝは唯上に擧げたる寛裕 (Liberality) の徳あるのみ。されど彼れが自他親愛の情に關して説ける所は幾分此の缺を補へるの觀なきに非ず。彼れ説いて以爲らく自他親愛の情は嚴には之れを徳と稱すべからざるも人の福祉に缺くべからざる要素たるは否むべからず。殊に國家結合の上より見れば其の要素る公正の徳にも優れるものありとも

いふべく立法者、爲政者の特に重きを置かざるべからざるものたるは論なし。社會の鞏固なる結合は一に個々人の間の親愛の情に賴れば也。この親愛の情を一層狭く強く言ひ表せば即ち友愛の徳となる。哲學者といへども若し友愛の情を缺かば其の幸福を完うする能はざるべし。友愛の礎は他の善を認むるにあり。功利もしくは快樂の基礎より成れる友愛は以て眞の友愛となすべからず。眞の友愛は友其人の爲めに其の利福を圖るにあり、自他共に奨誘して善美の理想に向ふ上するにあり。此くの如き友愛の徳は唯だ善人君子の間にのみ存すと。されどアリストテレリスはかゝる理想的友愛を説きたると共に又一面には自然の情といふ事を據として經驗上より友愛の徳を説明せんと企てたるを見る。例へば親子の關係に於ける愛情は、絆の一致といふ感より生ずと見らるゝが如し。即ち子に對する親の愛は自愛を擴したる一種の情ともいふべしと。

以上アリストテレリスは習慣上の徳 (ethical virtues or moral excellences) を説き了りて以下更に知力上の徳 (dialectic virtues or intellectual excellences) に説き及びたり。アリストテレリスは所謂知力上の徳を二種に區別したり。(是れ即ちプラトーンが智慧

といふ一概念の中に混じたりしものなり。而して此の點はアリストテレリスの倫理說中の主要部を占めたるものと見るべし。さて謂ふ所二種の智慧とは思索智 (Speculative wisdom, σοφία) と實踐智 (Practical wisdom, φρόνησις) と是れ也。以爲へらく思索智は以て實際上の道德問題を決定して吾人の行爲を指導するの資となすには足らざれども而も人の所行の中に於て最高等の活動と見らるべきものなるが故にこの意味にて之れを實際的といふ必しも不當ならず。且つまた其は吾人の實際の善の何たるを明示せずと雖ども而も其れ自身にて既に吾人の善をなせる也。次に實踐智は前に説きたる習慣上(倫理上)といふも可、アリストテレリスにありては習慣といふも倫理といふもほぼ同義の語なれば也の諸徳の中に含有せらるべきもの也。蓋し徳とは前にも詳説せるが如く個々の場合に於ける吾人の感情もしくは行爲の適宜の域をはかりて其の中道を揀ぶにありて而して此くの如き適度の中を揀ぶものは件の實踐智に須たざるべからず(この意味にての實踐智は前の所謂理性に當す)。此の故に實際智といへば既に徳の中に含まれたるものにして徳を離れて其れ自身獨立に存するものにあらず。徳を離れたるの實踐

智は以て眞の智とは稱すべからず。惡漢だになほ銳利なる知を有するとあれば也。ソークラテースの思想の色を着けたるを注意せよ。されど吾人が之れを稱して智者といはざるは其の智の徳と伴はざるが故也。智者とは單に或目的に對する方便を揀ぶの巧なるもの、謂にあらざる之れと共に目的其物をも揀び得て誤らざるもの、意を合むと。

備考 以上述べたる所にて明かなるが如くアリストテレスは徳を、智力的と倫理的とに別ち、後者を前者と離して別個に論じたるに似たれど而も其の所謂諸種の倫理的徳を脱く中に實踐智を含めて脱きたりしは言ふまでもなし。所謂諸種の感情及行爲の過不及を制し吾人をして事の中庸に就かしむるものは作の實踐智の作用に外ならざれば也。この點はプラトーンの見と大差なしと見るべし。唯だアリストテレスが智慧を思索的と實踐的に劃然分明したるを其のプラトーンと異なる點也。

最後に見るべきは智と自由意志との關係なり。アリストテレスは(プラトーンと共に)極力意志決定説(Determinism)に對して意志の自由撰擇を主張し以て個人の道德的責任の所在を明かにせんと力めたり。謂へらく人は自己の習慣如何によりて或は有徳の士となり或は不徳の士となる。此の故に人は個々の行爲及びか

ゝる個爲より築成せられたる全品性に對して自ら責任を負はざるべからず。習慣品性の既に成り上りたる後尚ほ人は自己の個々の行爲に對して悉く責任を負はざるべからずとは言はず。何んとなればこの場合に個々の行爲を動かすものは全習慣もしくは全品性の力にして個人の意志もて自由に之れを如何にとする能はざるものあればなり。唯だ此に主張するの一事は人は自己の品性を形成する前に方りては其の個々の行爲を自由に揀ぶの力を有するが故に隨つて又此くして形づくられたる品性其物に對しても責任を有せざるべからずといふにありと。此の如くに見てアリストテレスは故意より出でたる行爲は悉く自家みづから責任を負ふべき者なりとせり。されど此に注意すべきはアリストテレス(併びにプラトーン)の心理説は故意に惡其物を撰ぶとを容さざるの一事なり。惡其物を撰ぶ惡意の作用は基督教の道德的意識には存すれどもプラトーン、アリストテレスの學説には未だ存せざりし也。この故に彼等は惡者に其の責を課せんとして而も課する能はざるの板挟みの運命に陥りたるの觀あり。蓋し彼等の心理説に因れば人の惡を爲すは(一)背理、不合理欲、合理欲を制する、か然らざれば

ば、思量、を待たずして暴動するに因るか、又は(二)悪を善と誤視して之を撰ぶかの二者のいつれか、其の因にして熟慮し思量して尙ほわざと悪を爲すものは無しとせらる。悪を爲すに至る折の心の状態は、要するに伴の二因の一を出でず。而して二因の何れに見るも悪行は(プラトーン)みづからの明言せるが如く(悪意に先きだてる或原因に必然に驅られて、己むとを得ずして此に至れるものなるは明也。プラトーン)は此の必至説より脱せんと力めたれども而も其の説くところは依然として悪を前の二原因に歸せざるを得ざりしなり。彼れは其著『共和國』の終りの寓意談及び『法論』などの中に人は自ら爲せる悪行に對しては充分の責任を負はざるべからずとやうに極言したれども而も其の悪行の原因を一層科學的に論ずるに至れば、いつも(一)理性が善と誤認せるによるか、然らざれば情慾(不合理慾)が盲目的に理性に背きて突進し來たれるによるかの一を以て悪の原因となしたるを見る。而してプラトーンは後者の場合に於て理性が情の盲動を制し得ざるとを以て心の原状態其者の不統一無調和なる事と及びかゝる心状態を形成したる外界の影響とに歸して説明し飽くまでも必至的機械的に之れを説き去りたりし

也。要するにプラトーンの倫理説は悪行に對する個人の自由選擇隨つて其の責任の所在を説き得ざりし也。アリストテレスの倫理説はたプラトーンと同一軌に終はれるを見る。即ちアリストテレスが所謂悪行の故造なるものも詮じ來ればまた一種の必然的制限以外に出でざるを見る。彼れの倫理説にても自ら好み自ら撰ひて悪を爲すの自由の意志を容るすの餘地なき也。即ち彼れの見に従へば所謂悪人とても少くとも思量し熟慮して後ちに其の目的を定めたる行爲なる限りは其當座には自ら善しと見たる事を爲したるに外ならず、隨つて此場合にかく善しと見たる事が如何ばかり誤認なりきとするも即ち其實善き事におらざりきとするも彼れは又之に對して如何にともするの自由の力を有せざる也。此く善を悪と誤視すといふ事は全く自己の意志以外の必然事なれば行爲者之れに對しては何等の責任をも有せざるべき也。アリストテレス或は辨じて人が此くの如く悪を善と誤視するに至れるは畢竟するに其人の從來の行爲のよからぬ結果なれば、茲にこそ道德上の責任ありと言はんか、げにさるともありぬべし。されど一步を進めて其所謂從來の良からぬ行爲なるものは如何にして生ぜしと

問は、如何に。件の不其の行爲なるもの、詮じ來たれば、アリストテレスの見によれば一行爲として思量の結果より來たる行爲ならぬはなきが故に而して思量して故意に悪をなすものはなきが故に當の人の自ら善しと視たる事を爲せしに外ならず(たゞひ實際は善からぬ事なりしにもせよ)隨つて件の誤視をも從來の行爲の不其の果に歸せんか、其の所謂不其の行爲なるものもまた悪を善と誤視せしより來たれりと見るべく、其所謂誤視もまた、之れを前の悪行の果と見ざるを得ざるべく、此くして無限に溯りゆかば道德上の責任なるものは何處にか之れを歸するを得べき。アリストテレスの自由意志の論證據はかくして破れたりといふべし。

アリストテレス以後の希臘思想界一般の趨勢は一言すれば如何にせば個人の安立福祉を得べきかといふ實際的方面に傾注し來たれり。蓋し當代の希臘はマケドニアの克服を受けて政治上の獨立を失ひ希臘市民の花ともいふべき公共の生活全く失せ去りたるが故に人々漸く自己の主觀に還りて其處に安立の地を索めんとするに至れる是れはた自然の勢なり。殊に此くの如き社會上の變動に遭

うて轉た人事の無常を感愴せる當時の人心が此かる外界の有爲轉變以外に獨立して靜かに自己の安心を立せんとするに至れるは異しむに足らず。要するに個人の安心といふ一事は靡然として當時の希臘思想を掩ひたり。此傾向を最も明に代表せる學派をストア學派、エピク로스學派、懷疑學派の三派となす。三學派の多少の面目を異にせるは言ふまでもなけれど其主觀の安立といふ點に唯一の重を置けるは揆を同じうす。彼等は必しも世界の原因、知識の性質等に關する考究を怠りしにはあらずしが而もこは寧ろ二の町の研究にして要は縁りて以て倫理上實際上の目的に資せんが爲めに外ならずき。而してアリストテレスの倫理説が當時の思想界に大なる影響を及ぼさざりし所以の理も亦此に存せしなり。如何にとなれば彼れの倫理説は一面餘りに純思索の生活に重きを置きたれば也。此くの如きは以て當時代の道德的意識を満足せしむるに足らざりき當時代の要求する哲學は倫理哲學其者に外ならずして倫理上の目的を離れたる純粹の哲學上の思索は彼等の要せざりし所なりしが故也。彼等は自己の安立の爲め即ち倫理上の目的の爲めに哲學系を組織したるなり。通常史家が此の時

代を稱して倫理時代となすは當たれりと言ふべし。

ストア學派 (Stoicism)

通常ツェノン(自紀元前三四二至二七〇)を以てストア學派の創唱者となせども之れを開發して一系の組織となせしは寧ろクリシッポス(自紀元前二八〇至二〇六)なり。此の學派をストアと呼べるは開祖ツェノンが常に回廊(Stoa)やうの處にて教授せしがゆゑなりといふ。此派は學派よりいへばキニック學派及びソークラテースに系を引けることは明なれどもアカデミー學派即ちプラトーン派よりも其の重要な思想を得來れるは掩ふべからず。さてストア學派キニック派は何れも知見を以て徳と同じものと見る點に於て合したりこはソークラテースの思想を紹介するものに外ならず。さればキニック學派は其の所謂徳を消極の側より解して知見の要はあらゆる快樂を無價値と觀じて一切外物の累を脱するにありとなし以爲へらく富貴名譽門閥美貌快樂健康等あらゆる外物の所依以外に獨立したる一心不動の状態是れをこそ智者の眞の福祉とすべしと。此くの如く徳又は福の内容をむねと消極的に解したるはキニック派の學相なるが之れを寧ろ積極の側よ

り解したるものをストア派の學相となす。即ちストア派は以爲へらく智慧あるものは一心の平靜確信喜悅快活の諸情を併せ有してまた他に求むる所なしと。二學派は此の點において多少の差異を有すれども其の大體の精神は概ね同一にして甚しき懸絶なかりき。例へばストア學派の徒はキニック學徒が衣食住などの日常の物質的需要を幾んど度外視せるを以て最も強く賢者の精神を言ひ表し得たるものとなし此くの如きは以て常經とはなすべからざれども而も尙ほ賢者が時として取るべき道なりと思惟したりしが如き以て此二學派の間に存する學相の相似の著るきを認むるに足るべし。

ストア派キニック派共に以爲へらく智慧若くは智慧の職とする所は人をして唯一の善は此かる智識もしくは知慧其者に存すといふ事を認知せしむるの點にあり賢愚の岐るゝ所は唯だ此の一事を認むると認めざるにあり即ち智者は知其者が唯一の善なるを知り愚者は之れを知らずと。而して二學派は共に此くの如き知は善行其者を離れて存せず知あれば必然の結果として善行を現すと説きたり。此の點即ちソークラテースの根本の觀を襲へるものにして此二派がソークラテ

イスに對して離るべからざる關係を有する所以はこゝにあり。蓋しソークラテ
 イスの知徳一致説がプラトーン、アリストテレスを経てやうやく別途の方向を
 取り來たらんとせし經行は既に前條に説きたるが如くなるが此に至りて再び故
 のソークラテイスの位地に復れるは注意すべき事實なり。意ふにストア學派が
 此かる知徳一致の見を採るに至れるは主として其の心理説に由來す。ストア學
 派はプラトーン派の如くに人の心を上下の二面即ち統御すべき部と統御せらる
 べき部との二元に析かたずして寧ろ之れを一元の自性即理我と觀じてこゝに重
 を置きたりしが故に其のソークラテイスの舊位地に復れるは自然の數なりとい
 ふべし。

備考

倫理上にいふ人格といふ念は此の學派に至りて始めて現れたり。後ちオ

「カスチーヌス、ルーテル、カント等を経て人格の意識は益々明解を得るに至れり。

前に述べたるが如くプラトーンは人の心を以て種々の部分より成れるものと見
 体慾、心慾等は理性の統御を須つて始めて道徳的行動の素となるを得と説きたり
 しがストア學派は是れに反して寧ろ人の心を一元的即ち一理、體と觀たるが故に
 一理の透徹する所やがて徳行と現すと説くに至れる也。随つて此派の學者は通

常謂ふ所の情欲をもプラトーン派などの如くに理我(理性我)と別なる源より發す
 とは見ずして寧ろ唯だ理我の一種の病的狀態言ひ換ふれば理我が取捨の判別を
 誤れる状態となしたり。人もし酒食に耽りて身を過らんか是れ人が情慾を有す
 るが爲に生じたる不徳にはあらずして寧ろ理性其者が本來此くの如き求むまじ
 き者を求むべきものと見誤りたる誤謬の判断より來たれるに外ならず如何に其
 のソークラテイスぶりなるかを見よ。所謂賢者は此くの如き過誤に陥るとなし。
 固より賢者とても同じく有情の人なる限りは體欲の發動を意識せざる能はざる
 は論なしと雖も唯だ彼等は世の常の人の如くに此かる體慾を満足せしむべき物
 をば眞の善と想ふやうなるいみじき過誤に陥らざる也。随つて彼等はまた此く
 の如き物の得喪を以て悲喜をなさず。苦痛は常人の怖るゝ所されど以て賢者を
 怖れしむるに足らず故如何にとなれば病苦といふが如きとは眞の理我に對して
 は可もなく不可もなき無記のものなれば也。通常人の悲喜哀歡する所のものは毫
 も賢者を累するに足らず此くの如きは善にも惡にもあらざる無記のものなれば
 也。賢者は此等情欲以外の纏を脱し超然としてよく獨自を守る。此くの如き賢

者の心狀を稱して不動心即ち情欲を脱したる心 (*apatheia*) といふ。物欲の爲めに心を奪はれずして運命の流行以外従容として外界に勝を制する之れを賢者の面目となす。然らば此派の所謂賢者は毫しも感情を有せざる冷刻一邊の人かといふに當らず。彼等はた情を無みするの人にあらず真に善なるものを得て言ひ知らぬ怡愉の情を感じ理性の觀て是とする者を欣求し非とするものを忌避する是れ彼等が有情者たるの證也。異なる所は唯だ賢者は常人の心を領するが如き情欲の奴とならざる事なり之れを稱して賢者の不動心といふ。

以爲へらく此くの如き賢者は現實の世にては一人をも認むる能はず唯だ僅に古人中にかゝる理想的の賢者一二人を發見し得るのみ此の一二人以外の他の凡ての哲人は皆此かる理想の状態に向上しつゝある中途の人と見ざるを得ずと。蓋し此の派の學者は初めは賢者と愚者とを嚴に峻別して其の中間を容れざりき以爲へらく知識を有するは有徳の士にして知識を有せざるは不徳の士なり正と邪と徳と不徳との區別は絶對的にして毫も程度の差を容れず賢なれば全然賢にして愚なれば全然愚なり。凡ての罪業は同じ程の罪業なり。此の故に一小戒律を

犯すものは全律法を犯すものなり。一知見の徹する所玲瓏として圓滿の徳を現じ一迷誤の最する所衆惡の源となる。善と惡と全く境を異にして中位の狀態なしと。

備考 ソークラテースの知徳一致説を總括して人心の一致といふ事に重きを置けるストア派が徳の論理的一致を説けるはさもあるべき裡行の自然なり。蓋し知見一たび輝けば衆徳忽ちにして具はり知見僅かに衆徳を著すれば事毎に昏迷錯誤を現せざるなしと見るなり。

さはれこはこれ此派の最初の見にして此くの如き峻別の見の常識と合せざるは見易き理るが故に後ち漸く引き和げられてやゝ中正の見を採るに至れりしは當然なり。即ち此派は後に賢愚の間に中間の程度を設け愚者より進で賢者に到らんとする即ち理想に向上して断えず自ら改善しゆく中間の狀態の存するを許したり。

次ぎに此派の徳を區別するや主としてプラトーンの四徳表を襲ひたり少くとも之れを基礎としたりしは掩ふべからず。されど此派の四徳を定義するや其見人によりて一ならず。ブルタークの記する所に従へば此派の學者ゾエノンは公正

して此の定義はまさしく此派一般の見を代表したりしものゝ如し。但し此等の諸徳は個々特殊のものか又は同根の智識の唯だ關係を異にして現れたるものに過ぎざるべきかにつきては此派の學者の見る所同じからず。

次に明むべきは不徳の責任問題に關する此派の見解也。即ち不徳は故意の所造かた無意の所造かといふ古來の問題に關するストア學派の見解は如何。意ふに不徳を無意不用意の所行と説き去らば人の道德上の責任はこゝに其據を失ふの危険あり。されどソクラテースの如くに知徳を不離と解すれば論理上の必然として此の危険に面するを免れじ不徳は知識の不明即ち過誤といふ事に歸し而して過誤は罪を構成せざれば也。アリストテレス乃ち知徳一致説を排し一面概ねソクラテースの立脚地を襲ひながら更に進んで所謂知見其者が單なる知の活動にあらざして知と欲との一種の調和態即ち意志の訓練を條件とすと説きてプラトーンと共にソクラテースの知徳説の不備を補ひたり。されど是れと同時にアリストテレスは又人は自ら善事と判じながらわざ／＼之れに乖

きて不徳を行ふものにあらずと見たるが故に依然として不徳を無責任に歸するの難點より脱する能はざりき。この一條の經行は既に前に説ける所即ち此問題に對して一步をソクラテースに抜かんとして尙ほ此點に抜く能はざりしもの正しくアリストテレスの位地なり。然るに再びソクラテースの舊立脚地に復りて知徳の一致を説けるストア學派は如何にして此問題を釋かんとするぞ。按ずるに徳を以て所詮は知識に外ならずとする見解を持せる學者は要するに不徳を無意の所行とするが然らざれば無知を有意の所行とするかの二命題の一を撰ばざるを得ざるべし。詳言すれば知徳の一致を唱ふる此派の立脚地よりいへば不徳を知識の缺乏より生ずる無意の過誤と見て之れに一切道德上の責任を歸せざれば兎も角然らずして苟も道德上の責任の所在を明めんと欲せば此くの如き過誤に陥らしめたる無知其者を有意故造の所行と見てこゝに道德上の責任を問ふの外なかるべし。而して不徳を無意と見て之れを無責任に歸するよりも無知を有意の所行と見てこゝに不徳の責任を歸せしむる方道德上の危険少なきは論を須たざるが故にストア學派は件のディレンマに會して後の見解を撰びたり。

されどストア學派は尙ほ全く自由意志の問題を渙釋し得たりとは言ふべからず。以上述べたるが如く此派は一面には人の意力の範圍を極めて擴うして無知其者をも意志故造の不徳と説きながらソークラテースが不徳を無知の過誤と解し去りて更に無知其者の道徳上の責任を叩かざりしは前に述べたる如し他面には天地を物質の大塊と觀て純乎たる必至觀(Determinism)を採用せり。此の二面は如何さまに調和すべき者なりや若し人の不徳は嚴には物質界必然の法則によりてあらかじめ決定せられたるものなりとせば所謂道徳上の責任なるものを何れの邊にか求むべき。ストア學派の之れに答ふる要に以爲らく不徳の根は勿論無知にありとするも無知其者は人自らが生具の理性を活動せしむるとに因りてよく之れを避くるとを得べく而してかく理性の活動を旺ならしめて無知の人たらざるを得る一事は人の自由の意力なりとせば少くとも是れほどの意味にて意志の自由隨つて不徳の故造を認むるとを得べし。無知の人たると然らざるとは人々が自己の理性を旺に活動せしむると否とに存するが故に道徳上の責任はこゝに歸し得らるべし。もとより一步を進めて考ふれば此くの如く理性を有効に活動せ

しむる其事も所詮は固有なる精神の力即ち其が堅實といふ事に繋りて存するなれども要するに不徳にして若し人の心内より出でたる所行にして或外來の機械的原因より來らざる限りは此に道徳上の責任の解を求むる必しも不當ならざるべしと。

備考 此派の或學者は徳を知とするの見解を斥けざりしと共更に之れを勢力さも解したり。而して彼等は件の勢力の漲を物質的に解して之れを精微なる一種の火氣もしくは瀰氣ミキ是れ此派の所謂神靈の本體なるものの緊張の態となしたり。

此くしてストア學派の智慧の意義は多少明瞭となりたれども尙ほ智慧は唯一の善なり而して智慧とは善を知識するとなりといふ一種の循環論法以外を出でざるの趣きあり。かばかりの解にては如何にして日常に於ける個々特殊の善行を定むるとを得べきか。智慧の何たるかを今一層明かにせずば餘りに茫漠の見たるを免れざるなり。さてキニツク學派の之れに對する見解は前に述べたる如く全く消極的なりき。以爲へらく世俗の儀禮風習以外に獨立高踏するは有徳の生にして此に出でしむるものは即ち知慧の能なりと。而るにストア學派は之れと異なりて常に一方に於て積極的に日常諸般の場合に應ずべき義務を設けたるの

みならず又他方に於て廣く是等諸るくの義務を統一すべき根本の原理を説き出でたり。根本の原理とは何ぞ自然(Nature)是れなり。

二四

備考　こゝに義務といへるはストア派の所謂適合またはふさはしき事の義にして原語のカタイコンタを譯せるものなるがカタイコンタは廣義にいふ義務即ち心内の動機の正不正に關らず唯だ外面上理性の命に適合せる程のことを總て含める義なれば之れを近世の義務の語と同義と視るべからず。近世語にいふ義務は正しき動機心根より出でたる行爲のみを指す語なればなり。されば嚴密にいへば今日の義務の語は寧ろ原語のカタルトーマ(正行)と應すべきものなれどもこゝには且く狹義の義務の語を以て廣義の義務即ちカタイコンタの譯となせり。

自然の指示に従へといふ事は此派が倫理上の最高原理となせるものなりき。キニツク學派は自然をむねと消極的即ち人爲の習俗に反對したるものとしての側より見て人は其の知慧を用ふるによりて此る習俗の羈を脱して自由の生を得べしとなせり。然れどもストア學派は自然の積極の意義を重んじ自然に遵ひ自然に合するを以て善となせり。詳かにいへばストア派はキニツク派が主に消極的に解したりし自然といふ觀念に含まれたる積極の意義を開發してこゝに一切

の義務の源を認めたり。自然は如何なれば此くの如き權威を有するぞ。是に至りてストア學派の世界觀の大概を説きいづるの要あり。蓋し此世界をもて神明の組織調整に成りたる者とするの思想はソークラテース以來の諸哲學派に通じたる思想にして終ひには件の神明をば宇宙の唯一實在者なりといふに至りき。ストア學派は即ち此凡神的思想を攝取して其倫理觀を組織せり。(而して此派が件の實在を主心的に見ずして物質的に見、神を一種精微なる火氣と見たるは前にいへるが如し火氣即ち理性、理性即ち自然、自然即ち神也。ヘーラクライトスの學說の影響の著るきに注意せよ。)以爲へらく宇宙はツォオイスの神靈より成る。神靈宇宙を化成して其神法の下に従はしむ。是故に世界は之れを一個の全として觀ずれば神聖かつ圓滿の相を現す。其の細處局處を擧げていへばもどより種々の缺陷なきにあらずといへども至上理(神)の眼より觀來たれば此等小缺陷は消えて跡なからんとす。此派のクレアンテースは讚美して云く神は險を夷となし不秩序を秩序となす神の眼には愛しからぬものも愛しと。人間もまた自然の一片として此の神理を寓するものなれば身を擧げて自然の大法に従はざるべからず

と。此くの如く此派が宇宙を神學的に觀じたる一事は其の倫理説に二個の結果を與へたり。其一は智慧は人間唯一の福なりといふ根本の所信に世界的事實といふ根據を與へて其が倫理説に宗教的社會的感情の色を附したり。其の意に云り智慧に従ふ生活は取りも直さず純乎たる神的生活にして我れと天地と一氣相呼應し相感格する所以こゝにあり。我が裡に寓する理性はやがてソオイス其他の諸神及聖賢の理性と同一の理性に外ならざるが故に一人理性の光明を發揮するは取りも直さず全聖賢の共通の善に資するものといふべく正に是れ賢者一指を伸ばせば他の全賢者を福ひし得るもの而して我れ神に資し神亦我れに資するの境こゝにあり。其二は件の神學觀は人心の高下の二面を調和せしむるの用をなしたり。生まれながらにして物欲の勝てる人といふとも一片神意の影の宿れるあるが故に理性の作用によりて能く有道の生を送り得ざるにあらず。蓋し人の尙ほ幼にして理性の未だ發達せざるや無垢なる自然の衝動はよく理性と同様の作用を現じて過失なからしむ是れ自然のちのづからなる指導の人心に存するあれば也。無意識なる自然の衝動は取りも直さず理性の暗示に外ならぬが故に

此場合にありては自然に従ふの生はつまり理性に従ふの生なりといふべし。此くして人は他動物と同じく生まれながらにして自衛といふ自然の衝動を有するが故に理性既に發達して自ら理性其者をのみ唯一の善と認むるに至りても尙ほ件の自衛といふ自然の第一目的に資するの事柄は如何なる事にて之れを擇ぶべき善事となす也。而して此くの如く理性が自然の指示を看取して擇ぶべきものとし棄つべきものとする所に物の價值不價值の別生ず。知慧の作用は要するに此の撰擇作用の適宜を得て誤りなき點に存す。而して通常善きものと稱せらるゝ健康強力富貴名譽等の如きものも此る理由によりて此派の所謂賢者が撰擇の範圍に入り來る。

自殺を奨説して之れを貴ぶべき賢者の所行となせるはストア學派の一特質なり。思ふに此の一事は剛毅の徳を推奨し天地の妙相を歎美して已まざる此學派の所説と旨を合せざるに似たり。運命の敷奇に驅られて身を殺さんとするは常人には之れあり而も痛苦不幸を以て累となさざる此派の賢者にして是れが爲に天賦の生命を絶つといふに至りては少しく矛盾に類せざるか。されど假りに此學派

の見地に立つて件の難問に答ふるは必しも難き事にあらず。云く痛苦必しも悪にあらず随つて賢者の心を累するに足らざるは言ふまでもなし。されど苦痛無き状態と苦痛ある状態とを比べて何れか望ましきといへば固より前者をこそ望ましき状態といふが當然なるべきが故に此の點より見て生の苦を脱して死の安きに就くは必しも不理の事にはあらず。ましてや知見又は知慧の標準に照らし來たらんか生や必しも善とするに足らず死や必しも惡とするに足らざる場合なきにあらず。是故に通常生を保つは望ましきとはあれど時に際して生をすてゝ死に就くかた寧ろなかゝに自然の誤りなき指示に従うて行ひ得る場合なきにあらず。賢者が自殺を排せざる蓋し此意に外ならずと。而してストア學派はかゝる自然の指示に従うて自殺すべき場合をば天刑病不治病其他甚しき苦難に陥れる場合となせり。

以上は主として社會的關係より離れたる單なる個人として此派の所謂自然と云ふ意義の解説なるが所謂德行なるもの、範圍が通常主としてかゝる社會的關係に存するは明かなり。而してストア學派が徳の社會的關係に存するを認めたる

るは其の所謂カテイコンタ即ち義務の種々目を説きたりしに徴しても明なり。殊に其の公正ポキネスの自然的基礎に關する説明及び人の心身の自然の構成を見ても其の單に自己一人の爲めに生れ出でたるにあらずして人類全體の爲に生まれたるものなりといふ證據に關する説明の如きは特に此派の實踐道德中の重要な部分をなせるを見るなり。されど此に謂ふ所の自然の意義はた二様に解せられたる觀あり。(一)は既に現實の形を取つて到處に存在せるものに對して下せる自然にして(二)は未だ實現の形をなさざるも人生本來の構成の意匠を十分に開發せしむれば自ら到達すべき未現のものに對して下せる自然是れなり。而してストア學徒は此の二觀念を十分に調和し得ずしてやゝ支吾の見に陥りし趣きなきにあらず。蓋し人は生まれながらにして即ち自然のまゝに政治的國家的生物なりとは既にアリストテレスの唱破せる所而して自然の義を理想的に解するストア學派の脱く所によれば人は自然に社會的生物たり。そは同一理性を有するとによりて相聯なれる凡ての人があつから同一なる共通法の下に同一なる社會的團體を作るに至るは此の派の宇宙一統觀より來たる自然の結論なれば也。而し

て此派は此かる「理性の郷」又は「ツォイスの神の市府」に住せる各人が契約を履行し
 自他相扶掖し又は自他相團結して危害を防ぐ等の事は自然法の重要な點にして
 更に社會を保存せしめん爲に男女兩性の相結合して兒子を生み之れを教養す
 る等の注意をも怠るべからずと説きこれほどの事は自然の指示によりて明かな
 るが之れ以上の男女の關係に至りては自然の指示し規定する所明ならずと見た
 りしがごとし。さればゾエノンの描きたる理想的共和國にありてはプラトーンの
 共和國に於けると同じく妻の共有をさへ許したりしを見る。獨りゾエノンのみ
 らず他の此の派の學徒等の中にも兩性間の道德に關する現行法の要するに因襲
 的、相待的のものにして確たる根據あるにあらざと極言せるものあり。更に進で
 此派の學說を嚴守するものは其の所謂「賢者」を唯一の眞の治者、唯一の眞の帝王と
 見て賢者以外のもの、設けたる政府法律は何等の權威をも有せざるものと見た
 り。此かる急激なる意味にての自然を説ける所は宛として後のルソーの自然説
 にも似たる革命的性質を帯びたりともいふべし。以上は自然といふ觀念に對す
 る此派の理想的、見解にて此方面のみを見れば頗る破壊的の傾あれども實際には

此方面は寧ろ多くは後景の思想たるに止まりしが如し。即ち右述べたる如き理
 想社會の自然法と現行の法例習慣とはさしも甚しき峻別の危險に陥るとなく寧
 ろ現に各人をして家族姻戚、祖國及び多數の賢者ならぬ同胞等と相抱合するに至
 らしめたる現實の自然の紐索を據として日常道德の綱領をも設けたりしが如し。
 其の社會の禮法及び現存の宗教等に對する彼等の態度もまた人爲的、習俗的のも
 のをば排すべしとする見と現實既存のものをば遵守すべしとする見との兩様の
 間に搖々して一定せざりしを見る。而してかゝる兩様の見解も要するに各々此
 派の根本思想たる「自然に従へ」といふ原理を恪守したるに外ならざりし也。

備考

井ンデルバンド曰くキニツク學派とストア學派とが自然といふ點に對する

觀念の差異は注意すべき一事なり。ストア學派はキニツク學派の原理を據して道德
 を自然的の者と見たり而もキニツク學派は自然の義を消極的に解して社會の一切の
 法規、禮文を擺脫し、食色の、自然欲をのみ自然即ち天則と見做したり。言ひ換ればキ
 ニツク學派は感覺に屬する欲をば人の根本欲と見て是れのみは社會的習俗の汚染を
 受けざる純自然の面目なりとせり。しかるにストア學派は自然を以て天地と人生
 とを一貫せる理性となし此理性即自然に率ふ倫理の大法となしき。是に至りては
 食色の欲に傾注せる自然人に對して無限の權威ある法則を掲げ出だしたるものとい

ふべく即ち自然(理性)を以て人の遊奉すべき法則(ノモス)となせるもの也。一は感覺上の欲を自然とし他は理性を自然とす。隨うてソフィスト以來自然もしくは天則(フェイス)と對峙せられたる人則(ノモス)はストア學派に至り轉じて同一の者させられたり。ストア學派にありてはノモス即ちフェイスなりき。

躰の苦痛を脱する事は此派が自然の第一目的(フライム、ユング)の一として知慧の命ずる所のものとなせりしがさりとて快樂を目的とする事は此派の断として拒める所也。以爲へらく快樂は無垢なる自然の衝動の對象なるべきものにあらざして寧ろ其の後生の果と見るべき者即ち快樂は自然の衝動の向ひゆく目的物にあらざして寧ろ自然の衝動が其の目的物を得たる後に生ずる者目的實現の果として伴ひ來たる者也。ストア學派は固く此の見地に立つてエピクロス派の快樂説に抵抗せり。以爲へらく徳行に伴ふ喜悅の感も所詮は謂ふところの福祉(オイダイモニア)と離れざる一偶然事に過ぎずして其の主要素を形づくれるものとは見るべからず。此等の見に徴するも人の究竟の目的は心の愉悅平安にありて徳其者は畢竟其の方便に過ぎずとする此派の所説はむしろ此派末流の採れる見解に過ぎざりし事を知るべし。開祖ゾエノーンの所説は飽くまでも徳行を形くる中心の要素は善

意其者にありて之れに伴至する感情にあらざといふにありしなり。さもあれ既に安寧若しくは福祉といへばそこに或愉快なる感情ありて其の主要素を成すやうに思ふは常人の見に免れざるべきが故に此派の所説が後に多數の人心を惹くに至れる點もまた要するに徳は平穩なる喜悅の情を伴ふといふ點及び賢者は大苦楚の中にありてだに尙ほ寂然不動の情を持するを得といふ點などにありしは疑ふべからず。而して此點より見ればストア學派と後に説かんとするエピクロス學派とは幾んど同種類の幸福を説き出したるの觀あり。思ふに人事の有爲轉變以外に獨立して一心の平靜を保たんとする根本の動機は二學派之れを同じうす。申にもストア學派の此の一義を説くや特に其の思想の一等高きを見るなり。以爲へらく賢者の福とする所は惟り外物及び躰の條件以外に獨立するのみならず又よく時間を超越す智見の一たび現ずる所幸福こゝに存して復た時を重ぬるを要せず。説く所や、奇なりと雖もよくストア學派の根本の精神を言表せるものといふべし。而して吾人の奇とする所は後のエピクロス派の所説の頗るこれと趣を同じうする一事なり。其の所謂賢者は刑臺にありてだに樂を愉へ

ずと説けるふしなどは是れ幾んどストア學派の所説と符を合するものにあらずや。エピク羅斯が又其の所謂賢者の幸福を以て智見もしくは明瞭なる思量に繋れるものとなして運命の毫も之れに關せざる所以を説き且つ賢者は物の自然の制限を知つて其分に安んずるが故に敢て驢樂の長きを希はずと説けるなど皆これストア派の學説と酷似せる點なり。而して此等の點はやがてエピク羅斯學派がキニツク派のアリステイッポスが幼稚なる快樂説に一步を擡きたる點なりと見るべし。前に述べたるが如くアリステイッポスは眼前個々の肉欲の快感を獲るをもて唯一の目的と説きたれども此くの如き單純なる快樂説が到底人の道德的意識を満足せしむるに足らざるは言ふまでもなく少しく反思せば此る果敢なき當身の空華を追ふとの到底安固恒久の快樂を得べき所以の道にあらざる所以を知るに足らん。さればこそキレエテ學徒の一人は賢者とても生涯を通じて不斷の快樂を持続する能はずといひ此の學徒中最も天眞を掩はずと稱せられたるテオドロスは公然教ふるに賢者は或事情の下にありては竊盜姦通及び冒瀆罪を行ふも妨げなしとまで放つに至りしなれ。要するに個々眼前の快樂を追ふとが却

つて其の心を昏迷せしめ歡樂の極する所一轉して言ひがたき中心の寂寞と悲哀とを醸し來たるは明なる事情なるがゆゑに後のキレエテ學徒が漸く其の根本の所説を變じて終ひには當初の面目とは全く相背馳せる厭世觀をさへ唱へ出づるに至れるは前節に詳説したるが如し。因りて見れば快樂派の哲學をして今一段鞏固なる基礎を得しめんとせば一面快樂を追求する常人の自然の欲を排せざると共に他面哲學的根據を備ひ來りて之れを調和せざるべからず。この要求に應じて出でたるものは即ちエピク羅斯學派なり。

エピク羅斯 (Epicurus, 341—270 B.C.)

エピク羅斯はストア學派の開祖ゾエノーンと時を同じうしてサモス島に生まれき。初めデモクリトスの哲學を學び晩年雅典に帷を下して教授せり。原子論をデモクリトスより排宗教觀をソフィストより快樂説をキレエテ學派より取りて一家の倫理説を構へたり。

エピク羅斯はアリステイッポスと同じく快樂の唯一善、苦痛の唯一惡なる所以を主張して以爲へらく如何なる快樂も苦痛といふ結果を伴はざる限りは善にして和

何なる苦痛も困りて以て快樂を生ずるの媒たらざる限りは悪なり。法律習慣の權威ある所以は唯だ其が刑罰を以て人を嚇するに因る其處罰を畏怖すればこそ法をも守り俗にも従ふなれ。凡ての德行凡ての知識にして若し快樂を生ずるの資たらざらんか其は何等の意義も無き者なりと。彼れは又常識に従うて快樂の義を肉欲の満足といふ事に外ならずと見たり。さて此くばかり陳べたる所によりて見ればエピクロスの快樂説はアリストテイルツボスの説ける所とほとんど符を合したるやうなれど更に仔細に之れを點檢するに及びて其の然らざるを見る。約して言へばエピクロスの所謂快樂は寧ろ(一)消極的、受動的方面を以て勝てるを見る即ち欲求を充たして覺ゆる能動的快樂よりも寧ろ苦痛なき平靜の快樂をもて貴しと見たり。(二)エピクロスの快樂はまたアリスチッボスなどの眼前一時の快樂を指せるにあらざりて前後を思量し生涯の上より遠觀せる恒久の快樂に重きを置きたり。(三)またエピクロスの所謂快樂は詮ずる所肉欲の快樂に外ならざれども比較的智力上の快樂に近きものを以て賢者の追求すべき快樂と見たりしは明也。其の意に言ふ肉欲上の快樂は直接に外物の接觸より來たる興奮作用の

然らしむる所なれば一時の感は強けれども消え易く持續し難き愛あり。之れに反して智力上の快樂は必しも外物の刺激に須たざる想念上の快樂なるが故に意識もぼろなれど長く清淨の感を持続せしむるを得。一見すれば躰は凡ゆる快樂の源泉とも思はるれど心に屬する苦樂の感情は想像、記憶、豫期等の作用を藉りて更に之れを増大し瀾漫せしめ得るが故に前者よりも一段貴ぶべきものなる勿論なりと。要之、此派の所謂賢者の理想とする所は眼前の快樂に迷はずして生涯を通じてる平靜なる心状態の快樂を得るにあり。而して之れを得んには外界の有爲轉變以外に超越し物欲に累せられずして平然よく一念の靜を守るにあり。是れ即ち此派の所謂寂靜心(ataraxia)として前のストア學派の不動心(apatheia)と應ずべきものなり。

備考 エピクロスの派は此くの如く肉欲上の快樂と智力上の快樂と、躰の快樂と心の快樂とを區別し前者を遣て、後者を取れるに似たれども嚴にいへば彼れの學相は件の區別を容さず隨つて此派の所謂智力上の快樂は所詮は肉欲上の快樂に没入せらるべきものなり。之れを彼れの心理學に見るも躰と心との區別は明かに劃せられたれども其の本質を叩けば要するに物質的元子の集合に外ならざるを見る。唯だ異なる

所は靈は牀よりし一層玄微なる元子即ち元子中最も精微なりと稱せらるゝ四元素より成れりを見られたるのみ。されば此派の所謂智力上の快樂は隘々つむれば肉欲上の快樂と類の異なりたるものにはあらずと雖も而し此派が右いふ程の意味にて心身の二者を區別し而して前者即ち心の上の快樂を重しと見たるは疑ふべからず。

言ふまでもなく賢者とても全く牀の苦痛の感以外に立つと能はず。されど彼れは能く意識の力を以て之れを壓倒し精神の快樂を以て之れを補ふとを得。彼れは運命及び未來世に對して畏怖の心を抱くとなく何物もよく其の靜平の一念を擾するものなし。

此くの如き平靜不動の心は如何にして得らるべき。エピクロスは之れを哲學の職分に求めたり。以爲へらく人の最も畏怖するものは死と諸神の喜怒となり人の未來世に對して疑懼已まざる所以も畢竟は此の二源より來たるなり。此等の畏怖心に排除せられざる限りは如何にしてかよく平靜不動の一念を養ふとを得べき。而して此かる畏怖心を脱却する唯一の道は世界萬有に關する眞見解を立し併せて世界に於ける人類の眞地位を明かにするにあり。此の自然界は何ぞ我れの此の自然界に占むる地位は如何に。此二點をだに明にせば以て件の無用な

る畏怖心を驅除すると難きにあらざと。是に於いてエピクロスは倫理上の要求は物理哲學によりて供給せられ解釋せられ得べしと見たり。エピクロスの倫理説が實際上の要求を第一義となして學理の考究をもて寧ろ其の一方便と見たる事此等の説に徴して明なりといふべし。蓋し希臘人は哲學を一個の生活術と解して主として實際の見を貴ぶの傾向ありしが此の傾向はエピクロスの倫理學にありて最も明なる表現を得たり。ストア學派にありても實際的傾向の其の根調をなせりしに似たれども尙ほ純乎たる學術研究の精神の認め得られざりしにあらざりしがエピクロス學派に至りては學理研究の精神は全く實際的目的の下に覆せられたり。詳言すれば如何にせばよく運命の簸弄以外に獨立して一念の平安を保ち得べきかといふと此派の根本目的にして學理の研究は唯だ此の目的に達せんが爲めの一具たるに過ぎざりき。其のデモクリトスの物質的元子の器械觀を備ひ來れるも要するに此の根本的倫理的な要求の根據を求めんが爲に外ならざりき。蓋しデモクリトスの哲學は宇宙をば全然物質的原子より成れる機械的のものとして毫も神明の干與を要せずと説くが故に人をして神意の係羈干渉

に對する畏怖心を脱せしむるには頗る都合よき學說なりしが故也。

130

備考 此に附記すべきはエピクロスは右いふ如く實際の便宜の上よりデーモクリトスの哲學の根本原理を覆ひたれ共多少之れに修正を加へたる點もなきにあらざる。例へばエピクロスはデーモクリトスと同じく各原子を以て劫初より無邊の空間を直下しつゝある者と見たるに同時に各原子は件の直下運動以外多少斜めに逸しゆく傾きを有すと見隨つて此に各原子間の衝突を生じて終に今日見る如き幾多の世界を形造せるなりと説きたる如き是也。而して此の如く各原子が自由に斜めに逸するの力を有すと見たる點こそ即ちエピクロスが以て其の自由意志論の物理的根據となせる所也。

此くの如くエピクロスは神を以て天地の運行に何等の要なきもの何等の關係なきものと見たり。されど彼れは無神論者にはあらざりき。彼れは寧ろ常人の見に従うて神の存在を認め神は斷えず人の夢幻の中に往來して其の姿を現すとやうに説きたりき。されども彼れは神を以て世界と世界との間に居を占め此に永劫の淨樂を事としてまた一切の世運人事に與るとなきものと見たり。神既に天地人生と與る所なしとすれば神の喜怒に心を累するの謂はれなきは勿論なり。云く「不朽者神」は自ら煩ふとなく又他を煩すとなし毫も喜怒の奴とならずと。神もし毫も人事に關するものにあらずとせば死後また人を煩すとなかるべく隨つ

て死後に對する畏怖心なる者の無根據なるを知るべし。かくして死後の生に對する畏怖心は除却せられたりとせば死其者に對する畏怖心は如何にして除却し得らるべきかといふにエピクロスは答へて以爲へらく死を怖るゝの念は畢竟吾人の謬想より來る人の死を怖ろしと感ずるは是れ吾人自から死其ものと會するが如くに謬り思へば也。されど實際此の如き會合のあるべからざるは言ふまでもなし如何にとなれば吾人の存する間は死來たらず死來たれば吾人既に存せざれば也死は毫も吾人の心を累するに足らず賢者はよく此の迷謬を脱して平靜なる不死の生を送るとを得べしと。

此派はまた勇節等をもて哲人の生活を飾る徳と見たり。但し勇の徳は從來家國の爲めに一身を棄てて直往するの義と解せられたりしが公共生活に重を置かざる此派は自然の結果として其の意義を變じて主に高等なる想念上の快樂を得んが爲めに眼前の苦を忍ぶとといふほどの義に解したり。次に節を解して以爲へらく運命に甘んじて簡素の生を送り而して其の樂を渝へざる之れを節の徳といふと。さて此派は公正の徳を其れ自身に善なるものとは見ざりき。エピクロス

云く正義の自然的基礎は人々相互の侵害を防がんが爲めに便宜上假設したる一種の約束なりと。然らば若し不正義を行ふとが一身上の便宜となる場合あらば窮に之れを行ふも可なるかど問はんはエピクロスの之に答ふる意に以爲へらく人若不正を行はば斷えず其の露見を恐れざるを得ざるべきが故に此不安と苦痛との爲めに何人も之れを行はざる也。即ち不正義を行はば爲めに社會より處罰せらるべしとの不安の念に迫離せられて一心の平靜之れが爲めに破るゝに至るべし不正義の惡たる所以は畢竟此故に外ならず不正義其の者は惡にあらざり。次に此派の友誼の徳に關する説はた利己的着色を脱せざるを見る。以爲へらく友誼の價値は惟々之れによりて自己の幸福を完からしむるにありと。エピクロスは他の處にては友誼の徳を重視して賢者は友の爲に一身を抛つべしとさへ言へるにも拘はらず要するに快樂的見解の其の根柢をなせるは疑ふべからず。此派賢人の理想とする所は飽くまでも超然世縁を絶つて獨自一己の生を樂しむにありし也。戀せず父とならず又特別なる事情なき限りは政治的舞臺にも上らざるこれ此派の賢者の面目なり。而も奇とすべきは其の學説のさしも枯淡冷酷な

るにかゝはらずエピクロス其の人の性行は優に此短を補ひしの觀ありし事也。彼れ人と爲り情あり熱あり仁慈の心篤くして温藉敦厚の風采そゝるに時人の愛慕する所となりきといふ。傳へいふ彼れが雅典府の郊外に一種遊樂の園をつくり好尚信仰を同じうせる一團の朋友を相會して古へぶりの平和質朴の生を樂しみ辨論政治の境以外野心なく競争なく澹如たる名教の樂しみを共にせしさまは宛がら原子と原子と相尅し相搏つ此の流轉界を外にして永劫の淨樂に醉へる神々の御苑のそれにも似たりきと。此の派の理想を十分に實現せる一幅の畫圖なりといふべし。

備考 社會及び國家に關するエピクロスの學説の相異につきて
 シテラルバンド氏の説ける要に曰くストア派は人の社會的關係を結ぶは理性の命なりと見て其が自然的根柢を有する所以を説けるに反してエピクロスの派は社會を人の自然の性より成れる者とする見を否み之れを功利的に説きたり。思ふにエピクロスの社會起原説はソフィストの説を一層組織的に貫ひ表したるものといふを以て當れりとすべし。ソフィストの説の要に云く國家は自然に形造せられたる者にあらずして因りて以て自他の利益を齎得せん欲にかられて個々人が便宜上假構したるもの

に外ならず。即ち國家は契約によりて成り契約によりて發達す。而して人が件の契約に加盟する所以は因りて以て危害を免れんとを望む打算利己の心を有するが故也。この故に所謂法律は自他共同の利益を得んが爲めの一種の約定にして此一事を離れて法律其者が正邪の別を有するにはあらず。強者もしくは賢者が獨自一己の利便を根據として法を制定する所以の理此に存す。エピク羅斯はソフィスト等が此くの如く描き來れる功利的社會觀をば更に其の原子論的立脚地より組織的に發展せしめたり一言すれば曰く個々人まづおのゝ自己の爲めに生存しさて後ち故意に社會の關係に加はれり蓋し個々人のみにては到底獲得すべからざる利便をば此る社會を造るとによりて以て得べしといふ打算商量の心の然らしむる所なり。ストア派の社會觀は之れを正反す。ストア派にありては人はも皆天地を流行する大理性と一氣同根の理性的生物なるが故に其社會といふ自然の一致をつくりて國家を經營するは性具也と説く。隨つてまた人の社會的生活を送るは理性の命を奉ずる者の義務なりと説く。二學派の差異明なりといふべし云々。

アリストテレス以後の倫理學說中前述せるストア、エピク羅斯の二大學派は紀元後二世紀の終りころまで最も人心を引着せし學派なりしが此二學派と併行して當時尙ほ多少の精彩を放ちしはプラトーン及びアリストテレスの二學派なりき。而も件の四派の變遷せし跡はよのゝ其の趣きを異にしき。アリストテ

レス學派はアリストテレスの逝きし此かた倫理思想上何等の發達をもなさずして謂はれ其の門徒等は幾んど師の大組織に眩惑し其の多方面の能力に忙殺せられて奔り且つ僣れんとしたるの觀ありき。後のエピク羅斯學徒はた一意獨斷なる師說を奉ずるに急にして之れを一學派といはんよりも寧ろ一宗派といふの適せるが如き觀をなしたり。さてプラトーン學派も次第に分派を加へ來りて所謂幾個のアカデミー派なるものを生ずるに至りぬ。下に少しく其變遷の狀を叙せんにプラトーンの死後直ちに之れを繼げる學派を古アカデミー派と名づく。此派の倫理思想の要點は約して二とをす。第一は快樂を以て安寧(福祉)の一要素となすとを否む見にしてこはスピシッポス(プラトーンの甥にしてプラトーンの死後直ちに其の後を襲うてアカデミーの首座を占めたる者などの主唱せる所也。されど又アリストテレスの記する所によれば同じく此派の一人なるオイドクソスは至善を純ら快樂的見地より解釋しきともいふ。要するに全く快樂を排するスピシッポスなどの見は此派の一異調とも見るべき者にして寧ろ快樂を以て善の一と見るかたこそ此派一貫の思想なりしが如し。第二は自然

に適應して生活すといふをもて實踐上の根本の規箴となせる事是れ也。因りて思ふに件の二點が古アカデミー派の學相をしてストア學派と著るく相接近せしめたるは争ふべからず。唯其異なる所はストア派の見て寧ろ採るべしとなせる事必しも善といふ程の者にあらねど遺て、顧みざるよりも寧ろ撰ぶべきもの採るべきものといふ程の事例へば健康富貴等の如き者を指すを此派は直ちに善と見たる一事にあり。此派は善を三別して(一)魂の善即ち徳(二)體の善即ち健康及び諸體の機關の各々平衡の狀を保ちてそれ(三)の職に適合せる事(三)外物に屬する善例へば富貴名譽の如きものとなしたり隨つて此派は徳を安寧の主たる要素とは見たれども之れを唯一の要素とする見をば取らざりき。之れを古アカデミー學派の倫理說の大概となす。さて古アカデミー派を一步懷疑哲學の方面に轉せしめてこゝに新アカデミーの一派を開始せるものを

アルケシラオス(紀元前三百十一年或は十五年に生まれ二百四十一年或は四十年に死す)となす。蓋しアリステテレス以後の懷疑學派はアルケシラオスに助まれるにあらざして其以前既にゾエノーン、エピクロスと時代を同じうせるエリス

人ピルロイン(ピルロインに繼ぎて其懷疑說を成せるものをピルロインの弟子テイモーンとなす)の之れを唱へたりしを見る。ピルロイン以爲へらく凡ての斷定は要するに獨斷的主觀的のものにして普遍の眞理とはいふべからず。是故に物につきて是非の斷を下すは無益なり吾人は須からく一切是非の斷を禁むべし。かくせば何事に對するも紛々たる是非の辨に累せらるゝとなくして超然よく物外の平靜を樂しむを得べし。心の平靜是れ即ち吾人の眞幸福なりと。(ストア、エピクロスの二學派と倫理の目的を同じうしたりしを見よ)アルケシラオスの唱へいだしたる懷疑說がピルロインの懷疑說と如何程の關係を有せしかは今より確知すると能はず如何にとなればピルロインとの關係を別とするも吾人は尙ほアルケシラオスの懷疑說の由來を説くとを得ればなり。即ち其の明なる淵源とも見らるべきはプラトインの『諸會話篇』に現れたるソークラテースの研究法の消極的方面にあり。人の自ら知れりと思へる事も仔細に之れを檢すれば多くはいと漠然たる知識にして一たび其の根據を推窮しゆかば何人も茫として是非の判に迷はざるを得ざるべしといふが取りも直さずソークラテースの思想の消極

面に於て此かる思想に浸潤するアルケヲラオスがおのづから其思想を懐疑的方面に轉ずるに至れるは異しむに足らざるなり。况んやプラトンは其著『共和國』の中にて明かに此現實の世界をば眞知識の對境とするを否みて眞知識ならぬ臆説若くは俗見の對境となせるをや。然らばプラトンを繼紹せるアルケヲラオスがストア派の感覺説即ち感官の印象其者を知識の源となすストア派の説を排して蓋然的知識を幸福を得る唯一の指導者と見てこゝに安んぜんとしたりしは自然の結果ともいふべきか。さてアルケヲラオスの後勁として更に此説に光彩を添へたるものはカルチアデイスなり。彼れ曾て羅馬にありしをり昨日是と斷ぜし事を今日非と斷じて平然たりきといふ。されば世に定着の眞理なくして紛々たる昨是今非皆一樣の眞理なりといふ此派の斷案を倫理の境に適用するの危険は此に至りて既に分明したりといふべく而して此かる懐疑説の道德に及ぼす累の大なるを見て人心の漸く他に向はんとするはた自然の順序なりといふべし。此くしてアカデミー派の三轉したるものを折衷學派となす。折衷學派はストア學説の奇矯の面を除却して時人に教へたるが故に懐疑學派よりも覺かに確

實なる指導を與ふるものと思惟せられたり。かくしてアカデミー派の折衷的傾向はアンチオコスに至りて其の頂に達しき。(アカデミー派をして一步を折衷派に轉ぜしめたる者にはアンチオコスの前に其師フィロソフありフィロソフはカルチアデイスとアンチオコスとの中間に其の地位を占めたれば或は彼れを第四アカデミーと稱しアンチオコスを第五アカデミーと稱す)此かる折衷的調和的傾向は曾てアカデミー派に顯著なる事實なりしのみならずストアベリパテック(アリストテレス)の學派の二學派またやうやく此傾向に向ひ此くて一般希臘哲學の羅馬の思想界に輸入せらるゝに及びて更に其の勢を強め來たれり。蓋し實際的な羅馬人が學説上危険なる懷疑派又は逆理に富めるストア派をさながらに奉ずるが如きこと理としてあるまじければ也。折衷學派が當時の道德的意識に投じたる蓋し偶然にあらずといふべし。

希臘哲學及び一般希臘文化の羅馬に入りし一事は文明史上の重要事變なり。されども實際的な羅馬人は哲學上何等の新見をも創する所なくして毎に希臘思想を模倣するの位置に立ちたり。随つて倫理學説の特に見るべき者なかりしは

た自然の數なり。蓋し羅馬人は希臘哲學の輸入に對して初めは専ら排斥の態度を取りにき。紀元前百六十一年羅馬政府が哲學者及び修辭學者の羅馬に移住するを禁ずるの法令を布けるが如きはまさしく其一例と見るべし。されど文化の大勢はつひに支ふべからず希臘思想は滔々として羅馬に瀉ぎ入れり。初めにエピクロス學派來たり次にストア學派來たりフロン¹の哲學來たりアカデミー來りペリパテテック來たり希臘の文化は忽ちにして全羅馬に氾濫しぬ。かの羅馬文學の華ともいふべきルクレシウスの詩を一讀するものは一部の羅馬人士が如何なる熱情を以てエピクロスの哲學を迎へたるかに驚くべし。但しエピクロス哲學が此くばかりルクレシウスの心を惹きたるは其の快樂的見解にはあらずして寧ろ其原子的世界觀が迷信の累を除きて一念の平和を得しむるの點にありしを疑ふべからざるに似たり。さて羅馬に於けるアカデミー派の學者として著名なるものを求むれば

シセロ(紀元前百六年より四十三年に至る)の如きは其の筆頭なり。其の著『義務論』(De Officiis)は倫理に關する古文書中に一異彩を放てるもの古代道德の知識を中世

及び近世に傳へたるものとして蓋し此書の右に出でしものはなかるべし。されどここは一種の倫理古文書と見ての價值なり之れを一個の倫理學說として見んかシセロの思想史上に占むるの價值重しとは云ふべからず。彼れが自ら謙して我は唯だ希臘の哲學思想を羅馬の衣につゝみて其同胞に傳へたるのみといへるはむしろ事實にして獨創の見は幾んど彼れの哲學に見ると能はざる也。(シセロは自ら宣言して懷疑派はアカデミーに屬すといひたれど彼れの懷疑的位地は頗る漠然たるものあり。倫理の方面よりいへば彼れは寧ろ折衷派に屬したりと見るを當れりとす。彼れが『義務論』に現れたる思想はストア派の一人たるパナシウスより取り來たれるものにして折衷的ストア派の實際の教學を最もよく代表せる者而も其の主なる思想は要するに古來の四德説を礎としてこれに多少の潤飾を加へたるものにすぎず。第一其の知²の德を釋するや概してアリストテレースの見に従うて知識は知識其者の爲めに純³ばら追求せらるべきもの而も思索は常に行動の次位にありて之れに従屬すべきと勿論なりと見たり第二他の所有を尊敬し契約を確守しもしくは故なくして他を傷ふが如き動作を避くる等の德をば

嚴密に解したる場合の公正となし而してこの意味の公正の徳に並置するに慈惠 (Benevolence) 或は寛裕 (Liberality) の徳を以てせり。これは前の公正が消極的に他の權利所有等を犯さざる事に反してむしろ積極的に自己を犠牲となさざる範圍内に於いて凡ての人に盡くし取り分け吾人と親しき關係ある同市民、親戚、朋友、恩人、祖國等に對して助力する事を意味す。第三、剛毅 (Fortitude) 或は心の偉大といふ徳の目下には二個の特質を數へられたり一は哲學者が外物を冷視するとして二は實行の人が困難、危険の企業を敢てする精神是れなり剛毅の徳はつまりこの二性質に約せらる。さて第四の徳即ち適宜 (Temperance) は個々の場合に物の恰當又はふさはしさを保たしむる事の意にして廣義にては衆徳の一面もしくは其の伴侶たるべき徳なり。シセロの『義務論』に見えたる四徳の概念はほゞ此くの如きものにして其の古來の四徳説に幾分の別彩を加へたるふし以て見るべし。さはいへど羅馬が人文史上に一種獨立の光彩を賦したるは哲學にあらざして寧ろ法理の學にありき。随つてシセロがストア派より受けたる思想の影響を見るべき有興味の關係は主として道徳を法理の方面より論じたる點にあり。前にも

説けるが如くストア派の光彩ある一特色は法といふ觀念にあり。以爲へらく理性を有するものとして及び理性を有するもの、組織せる此宇宙といふ一大共和國の一員としての人は絶對的に守るべき法を有す。此法や永恆なる天地の大法にして其の權威や其客觀的價值や豊かに他の特殊の政治法を超越す。此法といふ觀念に重きを置く點はやがてストア派が善及び徳の觀念を根本的と見たりし古希臘の倫理思想をして一轉、倫理研究の對境は道徳法 (モラル、コード) にありといふ近世の倫理思想に向はしめたる點なりといふべく而してシセロは此過渡期の一鎖を成せる者として思想上の要地位を占め來たる。蓋し件の神理性若しくは自然に淵源するものとしての不變法といふ觀念は他の諸の哲學的觀念よりも更に強くシセロの心を引着しき。不變法の觀念はシセロに至りて一層重要な意義を有し來たりたれば也。彼れが書中の主なる倫理思想は概ね件の法といふ觀念に關したる語なりき。彼れは時として之れを客觀的に解して有ゆる時所を通じて外はず有ゆる成文律に比して更に權威ある法典なりといひ時としては又之れを主觀的に解して萬人の生まれながらに本具せる至上理人をして取

捨去就の斷を誤ると勿らしむる指導者とやうにもいへり。所謂自然法の觀念が羅馬の法學者間に流布するに至れるは主として之れをシセロ及びビシセロ以後の學者の力に歸するとを得べし。當時羅馬の法學者等は既に外國人との商業上の取引より萬國人に洽く適用せらるべき共同法を設けたりしが件の自然法の觀念は此共同法と相合して所謂羅馬衡平法(Equity)なるものゝ源を成すに至れり。數世紀の後中世の終りに至りて羅馬法研究の再興せらるゝや件の自然法の觀念は一層重要なる新意義を着し來たり近世の初期に於ける倫理思想の主觀念を成すに至る。

此くの如く希臘の諸種の哲學中最も羅馬の人心に投じたるはストア學派なりき。是れ實踐に敏なる羅馬國民にありては當に然るべき所なるべし。随つて羅馬思想が希臘思想の上に如何なる反應を呈し、かを見んとせば羅馬に於けるストア學派なるものを一瞥するを以て最も便なりとす。

羅馬に於けるストア學派

蓋し初代即ち希臘時代のストア哲學は智慧若しくは徳の理想態を描くに専らに

してかゝる理想を實現せる理想的賢者と現實の學者との間に横はれる隔離の度の如何程なるかといふが如き事につきては漠然意を注がざりしが如し全く等閑視せられたるにはあざりしかどされば人の至善は何ぞといふ疑問一たび提出せられて之れを完全なる智慧と解するや更に第二の疑問即ち人は如何にして此世の汚濁を脱して眞智完全なる智慧即ち件の至善の一路に向上するを得べきかといふ疑問の提出せらるゝに至るは異しむに足らざる也。ましてや科學上の興味より實踐上の興味をもて勝れる羅馬人心が此一問に漸く重を置かんとするに至れるは自然の數ともいふべく吾人は羅馬帝政時代の著書中に此思想の歴々たるを見る也。一例を擧ぐれば

セネカ(紀元後六十五年に死す)の如きは末期ストア派の學相を明かに代表せるものとも見るべし。彼れは自ら標して賢者と言はずして唯だ眞智の境に精進しつゝいあるものといへり。以爲へらく徳に到るの道必しも見がたきにあらず。されど此一道を踏みて其理想境に進まんとするものは幾多の淫欲邪念に對して不斷の軋轉、不斷の煩悶、不斷の安息なき苦戦に堪へざる可らず。斯かる苦戦に堪へん

には其が準備門として先づ粗衣粗食自ら足れりとする禁慾、枯禪の生を送らざるべからずと。次にエピクテイトスもまた在來のストア學者等の謂ふが如き賢者の現實に存せざるべき所以を極言せり。否彼れが如き耐忍及び禁慾の徳を具へて一意眞智の境に進まんとするものすら實際にはいと稀なりといふべし。此くしてセチカ及びエピクテイトスは哲學を以て人心の脆弱と疾病とを治する學と見做したり。以爲へらく哲學の職とする所は基督の所謂病者を治するにありて健康者と關する所なし而して此くの如く人心の病を治する智慧は繁密なる論議の關する所にあらずして寧ろ不斷の自脩、實踐、訓練、切磋より來たると。さて此くの如く學理と事實との必しも一致せずして實踐のむしろ脩徳に必要な所以の切に人心に意識せられたる結果は羅馬時代のストア學派をして管に上にいふ如き特質を生せしめたるのみならず更に其の宗教的、方面的にも一段新たなる意義と生氣とを加ふるに至れり。蓋し人々みづから顧みて其の小弱を意識するとの漸く切なるや我れと天地の神と同根なりといふ一念に依頼するの度も一層強くなりまさり且つ其の外物に對する態度も初めは無頓着なりしものこゝに至り

ては漸く一種敬虔倚信の念の代はり來らんとせるを見る。かつて自ら理性の力にのみ自願して自然現實の生を理性實現の境と見做せし樂天的信仰もこゝに至りては漸く其の影を没し來たり寧ろ肉身の自然的生活を以て精神の活動を妨礙し幽閑する一種の牢獄と見做すの見之れに代はらんとせり。詳言すれば曩には必しも肉身を罪障視せずして寧ろ理性顯現の境となせしものが此に至りては一轉して肉身を咒咀するのを見を採るに至りぬ。以爲へらく躰は畢竟靈の支ふる臬(エピクテイトスの語)に過ぎずして人生はたとへば他境一夜の假りの寓(マルクス、アウレリウスの語)の如く又は浪風荒き航の目指す港は一死の外なきが如き也(セカチの語)と。前後ストア學派の變轉きた著るしといふべきかな。さて羅馬時代のストア學派は此くの如く漸く宗教的色彩を帯び來たりしが更に異彩ある一種の宗教的熱情を加味したるものを羅馬帝

マルクス、アウレリウス、アントニヌス(自紀元前百二十年至全百八十年)となす。

彼れの一語はストア派の特質を最も美しき熱情の語もて言表はせりと稱せらる。曰はく、嗚呼大宇宙よ爾に調和せるものは凡て我れにも調和す。爾に適はしき時

は我れにもまた早からず晚からず。嗚呼大自然よ爾が四季をりく^ちの生産ものはまた凡て我れの有なり。万有は爾に出で爾に保たれ又爾に歸る。嗚呼いどしきかな神の都と。人は自ら神と同根の縁者なることを想へ「我が胸裡の神明に従へ」神の讃めたまふ事の外は何をも爲さざれ「神の與へたまふものは何にても喜びて之れを享けよ」すべての事皆之れを神にはかれ「一事を成し了るや他を思はずして直ちに神を思へ」などいふ類の規箴は彼れが自戒の語として斷えず其書中に現じ來たる。一語以て彼れが所謂善生活の要を蔽へば「神を敬して人を助けよ」といふにあり。而して此の敬神と愛人と二面は不離の關係を有す。蓋し自然は人の性をば我れと同じ理性を享けたる他の人を助くるやうにつくりなしたれば他を助けざる事はやがて神に對する不敬となるといふが上の一語の真義なり。見るべし彼れが件の慈惠の一念は嚴酷にして抽象的なる初代ストア派に見るとを得ざる一種の温味と同情とを加へたるを。詳言すれば彼れの目的とせし所は單に宇宙的大社會の一員としての義務を遂行するに止まらずして更に中心より人を愛するにあり、悪者をだに愛するにあり。其の無知にして過誤に陥る者と

ても亦我等が同胞の一人として之れを憐れむべしとなせる所など宛として基督の愛を想起せしむるものならずや。されど之れと同時に又彼れが見に解しがたき節も一二なきにあらず。例へば彼れが世界を一箇の全として至上理の圓滿なる所造として及び人を神の所造の華冠として哲學上敬畏の念を以て之れに對する方面と世俗の欲望、目的、興味等の一切を冷眼視し去りて超然高擧する方面との二端は如何さまに調和せらるべきものなるかといふ難問の如き是れなり。マルクス、アウレリウスは一方には説きていふ、美なるかな方法整然として一系の秩序を保ち劣れるもの下なるものは優れるもの上なるもの、爲めに存し上なるもの優れるものは又そのく、其の處を得て曾て紊れずと。而るに是れと同時に彼れはまた世の凡ての物の如何ばかり破壊し易く變化し易きかを輕侮の口吻もて極言せり。以爲へらく天が下のすべての出來事は泡影の倏ち閃きて忽ち消え行くが如く又は小兒等が戯れはかなき蟻のいとなみ、糸もて操らるゝ、偶人の動くさまにも似たるかな。或は又之れを急流にもたどふべく賢者、岬の如く屹として中流に立てば激浪斷えず之れを拊つ、或はまた浴水の表てに膩垢、汗、塵などの漂ひ淨か

びたらんやうに人生と万物との凡ての方面亦皆此くの如しと。此くの如く一面此の世を厭ふべく卑しむべき有漏汚濁の界と見たる彼れが死を貴びて之れを人が自然の性を盡くす一種の準備とも見たるは寧ろ當然なりといふべし。されど彼れの死を獎説したるは死が人をして一層光明なる未來世に遷らしむるが故にはあらずして寧ろ唯だ劣悪なる現境遇を脱せしむるが故也。思ふにストア學派は當時尙ほ古來の傳説に従うて死後の生活を唱へたるが如しといへども倫理教育の上より此の信仰に重きを置きたるにはあらず。殊にストア學派の未造に至りては此の信仰全く消失せざりしまでも人おのゝ其の見を異にせるは争ふべからず。マルクス、アウレリウスも亦死は單に變化なるか或は滅亡なるか他生活に轉ずるの謂か或は無感覺の狀となるの謂かは一疑問なりと謂へりき。時として彼れは斷乎として消極的見解を取りたるが如くにも見ゆ。自から謂つて曰く「間もなくして爾はハドリアヌス及アウグストスの如くに何人としても亦何處にも存在せざるべし」と。されど彼れは又左の如き語をも發せし事あり。曰く「物に對して正に人に對して慈なる諸神にして尙ほ且つ世の正人君子をして一死と共に

に滅びて痕なからしむる如きはあるまじき事なり吾人は唯だ生若し正しき事ならば生可也死もし正ならばまたかくてあらんと思想に自ら慰むるの外なきなりと。此の終りの一語はストア學派の特相を明示す。即ち此の世界を其があるまゝの現状にて完全自足の境と看做し敢て現在の缺陷を補ふに足るべき完全なる未來世を假定せざるは此の派の特相也。知るべしストア學派の根本倫理觀は正しく近世の神學的倫理觀と相反けるものなるを。アウレリウス曰く此の宇宙が力もしくは技の足らざるが爲めに無分別にも善者に禍し惡者に福するが如き錯悞あるべしとは其の本質の上よりあるまじき事也。此の點に於いてはストア派と基督教とは其の見を同じうす。されど基督教はこゝに未來世の觀念を加へて現世に於ける禍福分配の不公平を補ふには未來世を要すとなしストア派は現世に於いて不公平に分配せらるゝ生死榮辱苦樂などいふものは畢竟善にも惡にもあらずと斷ず。是れ二者の異なる所なり。

靈魂不滅の説はアリストテレス以後の四大倫理説の一なるプラトーン派に存したり。げにや個人の靈魂不滅説は此の派の祖プラトーンの學說中主要なる位

地を占めたるが如し(されどプラトーンが少くとも其の晩年に至りても尙ほ實に此の説を持したりしか否かは頗る疑はし唯だ古の學者はプラトーンの會話篇特に其の『フィドゥス』に於けるプラトーンの靈魂不滅説を讀みて彼れ實に之れを信じたりとなすに過ぎず)而して吾人がストア派に見るが如き一種禁欲的厭世的傾向即ち有爲轉變定めなき此の世を脱離せんとするの傾向は此の派の晩年に至りて特にいちじるく表現せられたるを見る。こは實に師プラトーンの教學に於ける一方面を自然に發展せしめたる結果なりといふべし。此くて此の派の一學者たる

アルタルク(紀元後自四八至一二〇)の思想に看到れば古アカデミー派の主要思想たりし人生に於ける高下二面の調和といふが如き思想はまた其痕をどゞめずして現實界を不完全なる穢土と觀するプラトーンの一面の説のみ再び茲に其の要部を占め來たる。一例を擧ぐればアルタルクがプラトーンの『法論』にほの見えたる現實世の缺陷は惡なる世界靈が善に抗するに因るとの思想を採りて更に之れを誇張したりしが如き是れ也(此思想は從來殆んど人の措いて問はざりし思想な

りしなり。アルタルクはまた夢神託其他ソークラテースの所謂心内の聲等によりて神と超自然的交通をなすとを獎説せり。以爲へらく此かる直觀を得んためには人は先づ其の一念の寂靜を保ち自ら節して肉情を斷離せざるべからずと。かゝる物心離隔の思想肉情を離れて神に接せんとする一種禁欲の傾向は紀元後一二世紀頃に復古せるピタゴラス派に至りて明かに言ひ表されたり。アルタルクの見は此等新ピタゴラス派の影響とプラトーンの教説とを合したるものと見るべし。されど此くの如き思想の傾向は古代の最大思想家たるエヂプト人プロテウスに至りて最も明瞭且大胆なる哲學的系統的表現を得たり。新プラト

新プラトーン派の倫理説

プロテウス(Plinius. 自紀元後二〇五至全二七〇)の哲學はプラトーンの一面の思想を其の頂にまで發展せしめたるものといふとを得。蓋しプラトーンは善を萬有の實相と同視し且つ之れをもて明確なる思想及び知識の對境と同視したり。彼れが事物の缺陷及び惡をもて實相を闕きたるもの随つて之れを明瞭に思

想し且つ知識し得べからざるものとなす見は此に由來す。此く惡とは善と反對に明瞭に思想に上し得べからざるものなるが故に隨つてプラトンは件の惡言ひ換ふれば現實の世界をして抽象的なる理想界を圓滿に標現せしむるとし妨礙者たる惡に對していまだ明かなる名稱を附せざりしがアリストテレーノは後に之れを純乎たる無定形物(αἴδη)と名づけたり。さてプラトロンによれば人の最高生活は唯だ此の具象界の人事と周圍とを脱離することによりてのみ實現せられ得べきものなれども彼れは未だ人世を以て道徳上全く嫌忌すべき者とやうには思惟せざりき否むしる此の世をして出來得べきかぎり調和的ならしめ且つ善美ならしむるを哲學者の務と惟へりき。然るに新プラトロン學派に至りては更に一步を轉じ其の現世の有漏缺陷を感ずるの度は更に甚しく且つ切なりき。この故に彼等は所謂無定形物を第一の惡("first evil")といひ是れより派生したるものを第二の惡("second evil")即ち肉體となし而して人心の百惡皆この二源より來るとなせり。隨つてプロテイノスの倫理説は宛も是れ自然といふ思想を斷り離したるストア派の道徳上の理想説に髣髴たる者となりぬ。肉身の自然的生活を離れ

てひたぶるに理想の一面にのみ向上せんとするもの其の特相也。以爲へらく人の唯一の善は心靈の純乎たる知的生活にあり。心靈は肉體の染汚を脱したる其れみづからの姿の儘にて始めて圓滿に過誤缺陷を脱離し得べし。心もし軀及び外物の一切の羈をうけざる純活動の原狀に復せんか此に始めて完き福祉を得べしと。プラトロン『共和國』中に描かれたる市民的德即ち動物欲を制限統御するに必要なる德は此の派の見て以て最下の德となすもの(かゝる動物欲の人心中に存するは其が軀の感染より來る)。此れより一層を上れる德即ち智慧適宜剛毅及び公正の諸德はかゝる軀の感染を脱したるもの而して其の全く軀の係羈を脱し純理の境に住し神の姿に復れるもの之れを最高善に達したる状態となす。されどプロテイノスはしかしすがに尙一面プラトロンの説を守りたれば靈を淨化せんが爲めに軀の一切の自然欲を全然抑壓すべしとまでには説き到らざりき。此の禁欲的出世間的傾向を最も大膽に發展したるものを其の弟子ボルフリーとなす。

物質の境より歩々至上神に向上する點に於いてプロテイノスの見はプラト

ンの理想説と其の色を分ち來たる。蓋し是れプラトーン思想を其の極處に推しつめて却つて其の反對の思想に瀛ち得たるものなり。プラトーンの本思想は萬物の實相は其のいよ／＼實なる度の多きだけ一層明かに考へ得られ知られ得べきもの随つて具象感覺の現實界より歩々抽象の境に進むにつれて思想はますます／＼明確となるといふにあり。而るにプロテイノスは以爲らく凡ての思想は皆一種の差異、若くは二元的關係を含む。かゝる差別を含まざれば思想は活動する能はざるべく随つて吾人が通常呼ぶところの神なるものは未だ以て宇宙最源の實相と稱するに足らず。そを如何にといふに宇宙の最根本的實相は唯一至純何等の差別相をも含まざるものなるべくして而も普通謂ふところの神なるものは尙ほ此の差別相(二元の關係より成れる)を含める思想たるを免れざれば也。眞の神は此かる差別相、此かる二元的關係に先だてる純一無雜の實相ならざるべからず。何等の差別何等の性質をも着せざる随つて何等の相をもて名狀し得べからざる一實體ならざるべからず。この故に人此の至高の絶對を觀んとせば凡ての明確なる思想を超越し自我の全意識を滅して一念恍惚の境に還没せざるべからずと。プラトーン思想に發達し更に之れを超越して反對の見地に看到れるプロテイノスの面目以て見るべきにあらずや。ホルフリーは師プロテイノスが六年の間四たび此至高の境に到れるを賭たりといふ。

新プラトーン派はもと埃及のアレクサンドリアに起こり後一世紀を経て希臘雅典府の故地に榮えたり。一言すれば希臘文明と東洋文明との相合して産出せるもの即ち新プラトーン派也。其が消極的、神秘的、禁欲的、超世間的見解は明かに東洋的なれど(禪の思想と殆んど符を合するものあり)而も此等の見解を哲學的に推開せる思想運用の形式は明かに希臘的なるを見る。希臘人の熾盛なりし知識欲が此の派に至り極して嗒然神に接する恍惚となり又希臘人の自然生活に對する理想の見解が此の派に至り極して肉欲を厭離する二元觀となれる思想轉移のあと歴々として指すべきものあり。要之、此の派が超自然の境に倫理の目的を求めたるは明かに希臘の自然觀と乖くものなりといへども而も其の種々なる點に於いて此の派が希臘的特色を帯べるは疑ふべからず。アンモニウス、サツカス、プロクロス、プロテイノス、ヤンブリコス、ボルフリー等は此の派學徒中の錚々たるも

の而してプロテイノスを最大となす。

プロテイノスが此かゝる一種の神秘哲學を唱へつゝある傍らに一新宗教の猶太の地に發こりて漸次希臘羅馬の社會に瀰漫せんとするあり。プロテイノスは明かに此の新勢力に對して其の翼を張らんとしたれども其の滔々たる新元氣に壓せられて再び起つ能はざる境に淪みぬ。古多神教も一度は羅馬のユリヤン帝を保護者として其の勢力の恢復を圖りたれど一挫折してまた曠昔の面影なく新宗教ひとり其の勢力を昂めてつひに此に一新時代を開きたり。新宗教とは何ぞ。基督教是れ也。

第三章 基督教及び中世倫理學

基督教道德の大綱

こゝには基督教の起原、歴史及び其が歐洲文明との關係等につきて論述するの要なければ直ちに進んで其が倫理道德の方面のみを観察すべし。蓋し基督教道德に組織やうの説明を加へたるは紀元後第四世紀のころを初めとなす。而して希臘の最大哲學者たるプラトーン、アリストテレス等を十分に研究してさて後純乎たる哲學上の精神をもて基督教會の道德説に完全なる科學的形骸を賦したるは紀元後第九世紀以後の事なりとす。トマスアクイナス(十三世紀のスコラ派大學者)に至りて基督教の倫理思想は其が發達の頂に達したる者即ち基督教會の道德的意識は彼れに至りて十二分の組織的表現を得たるものといふべし。今こゝに第九世紀の初めよりかけてトマスアクイナスに至るまでの倫理思想發展の跡を簡明に追蹤するに先きだち此かゝる哲學的總合を得たる以前の希臘羅馬の文明社會に擴布せる一般基督教の新道德的意識の主なる特色二三を記すべし。而して此の特色を記するに當りて先づ基督教道德の一般の特色を觀さて後古來の個

々の義務及び徳が此の新宗教に因りて如何なる重要な新意義を著け來たれりかを觀るべし。

まづ基督教が與へたる新觀念として注意すべきは道德を一個の成文律として觀たる法律的觀念なりとす。詳言すれば基督教倫理の一特色は道德を以て神の啓示(又は默示)より成れる明文律となし且つ明瞭なる神の賞罰によりて制裁せらるべきものと觀たる點にあり。もとより不變永恒なる神法といふ觀念はソークラテース、プラトーン以後の社會にも存せざりしにはあらざりしが其が制裁等の觀念に至りては尙ほ頗る漠たるものなりき。所謂神法なるものも寧ろ一種の不文律として存じ随つて之れを一方能者の意志より發源せる客觀法として無條件の服従を要すべきものとやうには觀ざりし也。詳言すれば神法の源を各人の理性(人は神々と同じく理性を享有す)に歸し此の理性を働かしむるとによりてのみ件の不變法の十分なる意義は知得せらるると解したるもの實に基督教以前に於ける不變法の觀念なりき。之れを神意に發源せる客觀法と觀たるに比して甚だしき差ありといふべし。かるが故に基督教以前の社會にありては「法」といふ觀念の倫

理上主要なる部分をなせしにもかゝらず殊にストア派などに著るきが如く其が解釋は亦もに哲學的にして未だ法律的ならざりしを見る。然るに轉じて基督教に觀れば道德者が行爲を定むる方法は宛然法律家が法典を解釋する方法に類似し來たれり。彼れ基督教道德家等々もへらく神の命は默々のうちに日常生活のすべての場合に與へらる。而して其が個々實際の場合に於ける神命の如何を知り且つ之れを確めんには唯だ聖書の本文にあらはれたる通則を援きて之れを適用し若しくは聖書に現れたる事例によりて類推するにありと。即ち書を道德上唯一の成文律と見こゝに神の客觀的意志の發現を觀こゝに道德の淵源を認むるもの實に基督教道德の根本思想なり。かゝる法律的倫理觀はいふ迄もなく猶太の神教政治(シオクラシー)は神命によりて組織せられ統御せらるゝ政府をいふより傳へられて一般基督教國に播けるものなり。基督教の將に形を成さんとする以前の猶太の學者は皆以爲へらく道德上の知見とは人間の理性以外獨立の一權威(神)より流れ出でたる神法の知識其者名に外ならず。理性の職とする所は唯だ件の神法に現れたる諸通則を解釋して之れを困難なる個々特殊の

場合に適用するの一事に存す。人が此等の法則に従ふ正當なる動機に立法者たる神の制裁に望を抱くか若しくは之れを怖るゝかに因る。神は猶太人が自己神に適當なる服従をなすべきを條件として特に猶太人を保護するの條約を締結せりと。而して此等猶太人はモーゼ其の最初の法文を書き現して所謂シナイ山にて神の默示によりて得たりと稱するもの擴め他の幾多の規箴法文は後の預言者等の情熱の言となつて現れ其の他は凡て太古より口碑によりて傳はれるものやうに信じたり。而して此等幾多の法文誠律が基督教の形を成せる前にすでに種々なる神學者等の註脚若しくは補正によりて多大の發達を遂げ居たりしは事實也。基督教は畢竟するにかゝる眞のイマテル人と稱せられたる猶太人が自ら認めて神與の明文律となせるもの、觀念を繼紹したるに外ならず。かくして種々の儀式的部分と口碑とによりて傳はれる古法典と學者の註釋に成れる教儀の多くとは棄斥せられたれど尙ほ神法に集まりて猶太人の聖經(一半は基督の教學と其の門徒等の書き添へたるものとより補正せられたる)一卷にありといふ信仰は甚しく變ぜざりしを見る。かゝる神法を有するの理由に因りて教會は國家

と其の根柢を異にせる一種特別なる社會と認められき。而して初代基督教徒が概ね社會的生活を退きて隱棲せるの一事は二者の分離をして益々甚しからしめたり。ひとつにはまた基督教の波及を國家の組織に害ありと見て取りたる古代の帝王等が極力之れを妨礙し窘迫したる一事が二者の分離に與りて力ありしは疑ふべからず。羅馬のコンスタンチン帝が基督教を國教と定めたる時に至りても尙ほ國家と教會との別は依然として減ひざりき。

開祖基督は一面よりいへば猶太教の繁縷なる法律の點に反抗して起てるものなるが故に其が自然の敵として基督教に於ける非法律的精神の旺なるは言ふまでもなく中には其の極端に明けて往々放縱不徳の行爲に流れたる傾きをすらも含みたりき。もとよりかゝる極端なる非法律的精神は一般基督教徒の排せし所なりしは言ふまでもなけれど而もかゝる法禮の末節に拘らずして壹ら内心の正を貴ぶといふ一事が基督教倫理の美なる特色の一たりしは争ふべからず。當時の神學者サドカイ又はパリサイの教徒等が外形の善に汲々して邊幅を修めたるに比して儀禮形式を排してむしろ心事の正即ちインナー、デュー、を理想とした

る基督教は明かに一異彩を放ちたりといふべし。而して基督教に謂ふ所のインワードテックスが單に邪心悪行を抑壓するとをのみ意味する消極的のものにはあらずして之れと共に精神の確乎たる状態を表する積極的のものたりしは論を須たず。

こゝに至りて基督教をストア派及び一般異教の倫理思想と比較するの要あるを見る(快樂派を除くとするも)思ふに内心の正といふと、徳を徳其者自身のために採ぶべきと、放志邪念を禁遏すべきこと、是等の事は比較的に外物に重きを置きたりしアリストテレス派より凡ての外物に冷眼なりしストア派に至るまで皆ひとしく取つて以て其の説の要點となせる所随つて基督教倫理學と異教倫理學との根本の差異は内心の正に對する價值の上の差にはあらずして、寧ろ其が根本となり要件となるものに對する見地の上の差なるを見る。詳言すれば基督教の倫理説も異教の倫理説もひとしく内心の正を貴ぶ點に於いては歸一なれどもかゝる徳を生ぜしむる條件は何ぞや如何にせば内心の正は得らるべきやそもかゝる内心の正といふ事は如何なる事に繋りて存するや其の究竟の意義は何ぞとや

うに問ひ來たらば二者の倫理思想はこゝに截然として其の色を別ち來るなり。例へば希臘哲學者等は概ね伴の内心の正といふ徳を知識もしくは知慧といふ形ちにて掩はんとせるを見る。蓋し人真に自己にとりて善き事と知りながら尙ほ意識して他の善からぬ事を採るといふが如きはソクラテス及び其の諸派の幾んど得解せざりし所なり。もとより此の知識はアリストテレスの云へるが如く悪習癖の爲めに蔽はれ若しくは一時の情欲の爲めに曇せらるゝことはわれどもも其の一たび心上に現ずると共に其が直ちに正志美德の源となるは否むべからず。或はまたストア派の主張せるが如くに真知の境は現存せる君子人とても尙ほ得て違する能はざる境なりとするも其が人生の完全なる理想境たる一事は依然として變ぜずたとへ凡ての人は哀れむべき迷誤の境に彷徨しつゝあるとも明知識は尙ほ依然として君子哲人の當に向上すべき理想の彼岸たるを失はざる也。此くの如く異教理想家は皆知識を以て心を清うし志を正うする根本條件と見做し知即ち徳の一義を重視せり。

之れに反して基督教の學者は万善行の源を信仰(Faith)と愛(Love)とに歸したり。

同じくインワードチスの徳を重んじながら異教の學者は之れが源を知識に求め基督教の學者は之れを信仰と愛とに求めたり。而して件の二徳のうち前者なる信仰は倫理上や、複雑なる意義を含めるを見る。即ち信仰の義は種々の人によりて種々の異なる解釋を有すれどもまづ普通の單純なる意味は信ずることと見ることとの二者を對せしめたるをりの意味に於て前者(信仰)の義即ち如何なる妨礙あり故障あるにもかゝはらず半く教會律法等に現れたる不可見の神意に信賴して疑はざるの義之れを信仰の普通の意義となす。さて件の信と見との對峙より延いて中世哲學の大問題たる信仰と知識もしくは理性との對峙問題は生じぬ。一は倫理學を神學的根據に築かんとするもの他は之れを哲學的根據に築かんとするものにして二者おの／＼其の主張を異にす。神學者はちもへらく神法は其の本質上專恣不可測のものなり。即ち神法は神の意志其者の發表にして神の理性の發表にはあらず。かるが故に神の與ふる法則の是非は人智の探究以上に超す。人の理性は唯だ／＼神命につきて其の果して神命なるか否かの證左を點檢する力を有するに止まりて神令其者を如何とする力毫も無しと。さもあれ此く

の如き信仰對理性の二元の對峙問題はもとより初代基督教徒の間には未だ十分に發達せざりき。隨つて彼等が所謂信仰は其道理上の根據如何に拘らず單に道德上宗教上の確信を牢く把持する力といふほどの意義なりし也。殊に件の信仰は彼等教徒が善惡の戰場に於ける勇將として及び理想國の統領としての基督其の人に對する個人的尊信の感情と相合して一層其の根柢を牢うしき。即ち知る基督教の信仰は猶太教及びマホメト教の信仰とは其の意義を同じうせることを唯だ神人の二性を兼備せる基督の人物に對する歸依倚信の情と基督の圓滿なる生活を模範とする義務の一念とが基督教特有の點をなせるを見るのみ。

次ぎに信仰を勞作(Work)に對せしめたる場合の觀念は一層明かに基督教の特色及び其の道德的意義を示すものあり。勞作と對せしめたるをりの信仰の義は單に神法を尊敬して之れが立法者なる神に倚信するといふと以上尙ほ別の意義を含むなり。即ちこゝにての信仰の義は人の單に法に従ふといふとのみにては尙ほ到底不完全なるを免れず隨つて是事のみにては尙ほ神罰を被ふるの避くべからずといふ意識を有すると共に又よくこの難關を解脱し得といふ意識を含みたる

り。前にも説けるが如くストア學派が人の日常の徳を言ふにも足らぬ無價値のものを見做し又すべての罪人にして皆罪を犯せる限りは其が輕重の差等あるべき理なしといへる點に於いて明かに基督教の思想と符を合したるものなり。されど基督教はかく峻嚴なる道德上の標準を立てたるにもかゝらず其のストア派と異なる所は人は信仰によりてよく此の障壁を踰越するを得と説く點にあり。而してこゝに所謂信仰も之れを二様に解するを得。一は人をして自力にては得る能はざる至福をば神の超自然力の祐助即ち恩寵によりて之れを得能ふといふ確信を有せしむるを言ひ他は人をして我れ自らは當さに責罰を被ぶるに値すべき罪人なれども正義の神は我が基督に對する誠忠の情と其の十字架上の苦とによりて我れを恵みたまふべしといふ信仰を起さしむるをいふ。前者の信仰は後者のよりも一段正統的且つ一段普通的にして基督教徒の全歴史を通じての意識たりしを見る。而して後者の信仰はセント・ヂョンの福音書及びセント・パウロの書翰中に見えたるが如く基督が全人類の罪を荷うて之れを贖ふといふ贖罪説の秘義を含む。

さもあれ此くの如き信仰は之れを基督教道德の中心動機といふよりも寧ろ基督教道德を修むるに缺くべからざる一種の準備たりといふを當れりとす。而して件の中心動機は寧ろ之れを愛の觀念に求むるを至當とす。愛は基督教道德の中心觀念也。所謂法を完うする事も基督に對する義務に道德的價値を附する事も皆ひとしく繋りて此の愛に存す。愛なきの德行愛なきの信仰は未だインワードネスの至盡せるものにあらず。インワードネスを最も強く發表せるものは愛なり。愛の第一は神に對する愛にしてこは基督に對する信仰より湧き來たる。愛の第二は万人に對する愛也。蓋し神は衆生を愛し而して衆生は基督と同一人性を有すといふ事即ち人に對する愛の原動力也。而してかゝる原動力より生じたる一種博愛の感情は自然の人情と合し若しくは之れを熾盛ならしめて若しくは全然之れを吞吐し同化して基督教に於ける社會的義務の根本精神を成すに至れり。

さて此等信愛の二徳につぎて同じく基督教のインワードネスの一表現たる徳は心の純潔に關する徳なりとす。猶太教にありては臍に關する物質上の不淨を甚

しく嫌忌する種々複雑なる儀式を設けたりしが基督教にありては此等猶太教の外形的禱禮を排斥してむねと心の上の純潔を重んじたり。即ち不法の行爲を避け卑しむべき肉欲の誘惑に勝つをもて純潔の本義となせり。こゝにいへる心の純潔は一般の不徳に對する廣義の純潔にして單に男女間の貞潔をのみ意味したるものにあらざると勿論なり。

基督教の殊徳

さて進んで基督教の殊徳を言及するに其の多くは以上説ける一般特質と相聯關せるを見る中には直接に基督の訓より由來せるもあり。其の第一例とも見るべきは從順の徳のごとき是れなり。前にもいへるが如く道徳を一種の法と見て之れに絶對的服従を要するは基督教道徳の主要點なるが故に其が必然の順序として從順の徳を重要視するに至れる是れ猶ほ人の目的を理性の實現にありと見たる希臘時代の哲學者等が克己獨立等の諸徳に重きを置きたりしが如しこの特質は倫理學を政治學より區別したるアリストテレス以後の諸學派に明かに見るを得べし。

又初代及び中代基督教會にありては自然界と精神界とを峻別して單にストア派の如く富貴名譽權力其の他世俗の一切を賤しみたるのみならず家族及び社會の關係にも重きを置かざりしを見る。此の傾向は最も汎く初代教會史上に現れたり。初代基督教徒の見る所によれば此の人間社會は惡魔の治下に服せるものにして滅亡の域に瀕せるものなるが故に基督教徒はかゝる社會に干與するを要せずといふにあり。随つて彼等基督教徒が此の世に對する唯一の態度は超然として其の羈を受けざるにあり。此くの如く全く世縁以外に超出するは基督教徒の最高意識の要求なりしが而も實際全く世を脱離するとの極めて難事なるは彼等の感ぜざるを得ざりし所なりき。是に於いてか彼等は肉身を一種の障礙と觀じて之れを敬視し服離するの態度を取るに至りぬ。肉身を罪障の府と見るの思想は幾分之れをプラトーンに見るべく更に新プラトーン派新ピタゴラス派及び希臘思想と東方思想との混じて成れる他の思想系に至りて一段明かに發達しき。古代の人心が一般に心身の二元觀に繫住せると之によりて知らるべし。而して此の肉身服離の感情は基督教會が初代より重きを置ける斷食(斷食制は種々の形

を取りて汎く播ける宗教的儀式の一也殊に猶太教の法律的繁文の羈轡を脱したりと稱する基督教にして尙ほ斷食制を維持し益々之れを精密ならしめたるが如きは注意すべき一現象なるべし及び其の後に於ける峻嚴なる寺院的生活の難苦行によりて明示せられたりといふべし。此かる排世間觀と排肉身觀とは相合して結婚よりも獨身の生活を善とするの思想を生じたり。此の思想は多くの初代基督學者(例へばユスチーノス、オリゲーン、テルトリアン、テルトリアーノス等)のひとしく抱持せる思想なりき。而してまた此のごとく教會と世間とを對峙せしめたる結果として希臘羅馬の文明社會に於ける愛國の念、社會的義務の念、其の他最も高尚典雅なる凡ての社會的感情は基督教の影響を受け一轉して博愛の情となり又宗教的社會の一面にのみ集冲せられたる感情となれり。テルトリアン、テルトリアーノスは曰く「吾人は世界といふ一共和國あるを知るのみ」と。オリゲーンは曰く「吾人は神の言葉にて建てられたる一祖國を有するを知る」と。以て其の思想の傾向を知るべし。さて初代基督教はかく一般に世間を脱離するの態度を取れるがゆゑに其が必然の結果として世間の事に關しては縱令ひ正義の爲めなりとも争闘し喧嘩するが

如き所業を非なりとし随つて希臘時代に於ける勇敢の徳、我より進取する能働の元素を含みたる勇敢の徳は一變して一意所働の耐、忍ぶの徳を美とするに至れり。されど此の忍耐の説は明かに基督其人の直接の感化に由來すとも言ひ得らるべし。基督が暴を以て暴に酬ふるの非を述べて人もし汝の右の頬を拊たば其の左の頬をも拊たしめよと教訓せるが如き及び其の自己の怨恨憤怒の一念を抑えて敵をも愛したりし彼れが偉なる實例が如何ばかりの感化を其の門徒に及ぼし、かは言ふを須たず而して此の感化の極端なる一例はテルトリアン、テルトリアーノスの見に明かなり。以爲へらく正當にいへば基督教徒たるものは死刑、囚獄等を宣告する世俗の司法官たるべからずと。ラクタンテナスは云く基督教徒は人に擬するに死刑などいふ大罪を以てすべからず何となれば言語をもて人を殺すは實際手を下して之れを殺すと同じければ也と。アンブローシウスの如き穩當なる學者だに尙ほ説をなして云く人我れを殺さんとするをり縱令正當防禦の爲めなりとて彼れ襲撃者を傷けて血を流さしむるが如き所行は基督教徒の堅忍の本義と乖くものなりと。されども基督教界の常識はいつまでも此かる極端なる見を容るす

べきにあらねば、漸次其の所見の和げらるゝに至りしは事實なり。但し尙ほ流血を厭ふとのつよきや、甚しく異端を敵として怖れたりしにも拘らず之れを許して死に抵らしむるに方りて尙ほ血のみは流さざるの法永く後代に遺りたり(後ち宗教上の虐殺時代に至り血を流さずして異教徒を處刑するの遺風は全くこゝに由來す)。

されど基督教が文明社會の道德に最も大なる影響を及ぼしたるは愛を、諸徳の根本と見て慈惠の種々の徳に大動機を與へたる一點にあり。但し件の影響をこゝに精確に定むるは難事なり。何となればこの仁慈の精神は既に希臘羅馬の道德中に存して基督教道德は之れが發展に一步を轉じたるものとも見らるべければなり。此の發達の痕はアリストテレス以後の種々の倫理學說を一瞥せば歷々指すとを得べし。プラトーンの諸徳中には未だ慈惠の目あるを見ざれど彼れが友情を重んじて哲學的生活の一要素とし中にも師弟間の本然の愛情を重視せるは其の著書中に明かなり。アリストテレスに至りてはプラトーンよりも一段明かに友愛(φιλία)の道德上重んずべきを認めたるを見る。彼れは友情の最高意

義はひとり善人賢者の交誼によりてのみ實現せらるべきものと見たれど同時に又友情の觀念を擴めて家庭間の愛情をも含め且つ一般社會を結合する紐索ともいふべき各人相互の親愛の情を重視したり。されどアリストテレスの掲げたる個々の徳の目中慈惠の徳に相當すべしと見らるゝは唯だ其の所謂寛裕(Liberality)の徳あるのみ而もこは主として私財を散ずるに吝ならざるを表したるに過ぎずして未だ以て慈惠の徳と相愜ふものとは言ふべからざる也。シセロに至りては一步を進めて積極的に他人に盡くすともて社會的義務の重要な一部と見たり。更に晩年のストア派が其の世界同胞觀を持して博く友愛の温情を鼓吹したるは幾んど基督教の博愛をも髣髴せしむるに足るものあり。否人道に對するかゝる思想は單に一學派の説として存せしにあらざりて當時の社會一般が既に旺盛として此かる傾向を有したりしと認め得べし。一つはストア及び希臘哲學の影響又ひとつには一般同情心の擴布及び初三世紀間の羅馬帝國の對世界的立法の影響等により正義人道の感情は着々として發達し來たれるを見る。而も尙ほ件の發達の頂點を取りて之れを基督教の慈惠賑恤の觀念に比すれば幾ん

と言ふに足らざらんとす。慈惠を神に仕ふる唯一の務となし敬(Piety)と哀(Pity)とを同一にせし基督教が一般の社會的義務の實行上に如何ばかり重大なる動力を與へたりしかはこゝに詳述するの違なしとして單にそれが普通の道徳に變化を及ぼしたる主點二三を擧ぐるも(第一)棄兒の慣例を非として之れを禁遏したる事(二)任合決闘の蠻風を排したる事(三)奴隸開放の精神を鼓舞したる事(四)貧者老者の慈惠制度、養育制度を擴張せる事等を數ふるを得るなり。

此くの如く基督教徒が貧者を賑ふとは單に之れによりて以て同胞に對するの愛情を表するのみの故にあらざして一つにはまた富を精神上危険なりと極言せる開祖基督の意を奉ずるに由來す。此二原因よりして使徒時代の企圖たりし共產主義は初代及び中代教會を通じて理想的社會の一形式とせられたりき。もとより常識は此の共產主義の實現を避けんとを力めたれども尙ほ基督教社會が一般に單に富を所有するといふとは之れを使用するの道徳上の権理を有せしむるものにあらずして此の權利を有するものは其の必要あるものに限るとやうに觀じ且つ總じて爾の有する所のものを販りて貧者に與へよといふ訓言を重んじたる

は事實也。さもあれ基督教が施與に重きを置きたるは唯だ猶太教徒が自ら明かに撰民と稱せし彼等猶太人間にのみ實行せる義務を擴して之れを一層普遍ならしめたるに外ならずして以て基督教の創始とは言ふべからず。また基督教の高利貸を固く禁ぜしも同じく既に猶太教に存じたりし思想を繼紹せるに過ぎざりしは是れまた争ふべからず。

次に基督教が男女間の不倫を嚴禁したるも同じく猶太教の思想より淵源し來たれるものなり。されど其婚姻の式を重んじていたく離婚の弊を誡めたる又外形の潔白よりも寧ろ内心の潔白に重きを置きたるの點は基督教の猶太教に一步を進めたる點なるべし。又希臘人の所謂大志の徳(High-mindedness)と正しく反對の位地に立つて基督教の主徳とも見るべき謙虛(Humility)も其幾分は猶太教學者の教學中に存せるを見る。さて謙虛の一解は世俗の位階官爵其他の榮華を遺つるの義にしてこは前に説ける基督教の排世間觀の一面也。されど謙虛の深意は自己の價値を認めず断えず自ら足れりとせず自己の力に信賴せずして嚴に自ら抑損するをいふ。此の意味にて神の前に自ら謙退するは眞の基督教道徳の主要

件たり。

上に擧げたる従順、忍耐、慈惠、純潔、謙虛及び「世間」肉心を離脱する等の諸徳は基督教が古來の道德に加へたる新特色なりといふを得。されど基督教道德につきて今一つ注意すべきは其の倫理の範圍を擴めて之れを宗教の界に及ぼしたる事なり。而してこは其の天啓神學と離るべからざる關係より由來す。蓋し天啓にもとづける神學は一面日常の道德に宗教上の動力及び制裁を與ふると共に他面亦宗教上の信仰及崇拜に道德的色彩を賦するを常とす。即ち人に對する義務に對して特に「神に對する義務」に重きを置けるは基督教道德の特色なり。もとよりピタゴラスを始めプラトーン新ピタゴラス派新プラトーン派及びストア派等は皆多少其の趣を異にしながらも神に對する義務を重しと見ざりしにはあらず。されど哲學的一神教の當時の公認せられたる多神教に對する關係は尙ほ漠として不明なりしが爲めに其が敬神に重きを置くとも未だ基督教に於ける程には至らざりき。かつや基督教はインワードネス即ち内心の清淨に重きを置きたりしが故に宗教上の信仰の正しき事即ちオールドキシー(正統なる信仰)といふ一事をも

て萬善の中心となし異端邪宗の信仰をもて基督教的生活を腐敗せしむる諸惡の最と見たりしなり。

上に述べたるが如く基督教は道德を法律的に釋し人もし神法に従はずば神罰を被むるべきものと見たるが故に其が自然の條件として人は法に従ひ得る自由の意志を有するものと見ざるべからず。而るに基督教の自由意志問題に關する解釋は極めて不明瞭なりき。故如何にとならば基督教はかく一面には自由意志を容るざるを得ざるべき位地に立ちながら他面には人間の凡ての徳を神徳、神恵に歸し人の徳は皆神祐より來るとやうにも觀じたれば也。是れ正しく一面に意志必至説を執れるものならずや。是れ宛も希臘哲學が道德的責任の根據として意志自由を主張するの必要を感じながら尙ほ他の一面にて人は自ら慮りてわざ／＼自己の不利となるが如き事擇ぶものにあらずと信じて前の自由觀を破却せると同様の姿なり。基督教の發達するにつれて世の學者は益、明かに此の矛盾を看取し且つ之れを調和せんと力めたりしを見る。

初代基督教會の思想の變遷

以上説ける基督教の諸徳は凡ての教會を通じて必しも其の教を一にしたるにあらずして時代の變遷社會の發達教會内部の進歩等につれて其のをり／＼に種々の特相を呈し時としてはまた異論の紛出に互ひに鎬を削れることもありき。例へば一方にテルトリアーノス(紀元後一六〇至二二〇)の固く排世俗觀を持して下らざるあれば他方にはアレクサンドリアのクレイメンスの如く時代の潮流に抗し希臘哲學を輸入して信仰に真知識の根據を與へんとシクノステイック派且つ婚姻を以て人として基督教徒としての生活を正當且つ圓滿に發達せしむる者と見るあり。かくて羅馬のコンスタンチン帝の時代に至り基督教會の世俗の社會と一種不離の有機的關係を有し來たるや從來の禁欲的枯禪的傾向はあつたから別途を取りて進みたり。即ちこれまでは世間を厭離して苦行を積むとが救の唯一途とやうに信ぜられたりしものが此の頃よりして此の如きは必しも凡ての基督教徒に課せらるべき救の唯一法にはあらずして寧ろ唯だ僧侶が工夫三昧の方法として奨めらるべきもの僧侶以外の基督教徒は必しも之れを守るの要なしと見らるゝに至れり。かくして基督教界に於ける二重の道徳は生じたり。一は

通常教徒の道徳他僧侶の寺院的道徳是れ也。斯くの如く徳を二重に別ちたるは宛かも希臘人が哲學者の徳と市民の徳とを區別せると其の狀相似たり。殊に東方の僧侶が此かる寺院的生活を稱して「神聖なる哲學」とやうに呼べるは一段明かに二者の類似を表したりといふべし。東方の僧侶は孤棲獨居し粗衣粗食し祈禱し斷食し絶えず自ら責め自ら苦しめかゝる難行を積めるものゝ中にて著るきはシメオン、スタイライトの如き其の一人也。因りて以て世縁塵情の汚濁を脱し超然自ら淨うして直ちに至高の神と歩を駢べて生活せんとを力めたり。而して初めのうちは此く全然たる孤獨の生を送るを以て理想となせしが後には此かる完全なる生を送らんと欲するものは同志のものゝ團結して相助け共に進むを要すといふ脱漸く力を得るに至りかくして紀元後四世紀の頃に至りて寺院的基督教は西方に入り來たりたり。されど西方に於ける寺院的基督教は東方のよりも一層實際的にして瞑想的ならざりき。セント、ベネディクト(自紀元後四八〇至五四三)に至りては必要な勞働をも加へて寺院的生活に缺くべからざる一要素となせるを見る。而してそれは初めは唯だ手工の一科のみなりしが後には更に眼界を擴

して世俗の文學等の研究をも加ふるに至れり。此の一事が如何に後の西洋文明の發達に大の關係を有せしかば人の知る所也。さて彼等寺院的生活を送れる僧侶等が人心の脆弱を感じて之れと戦ひ之れに勝たんとするの熱心なるや彼等は主罪表を作りて之れを眼上に掲げたり。此の表が實に中世道徳を説明するにあたりて最も必要のものなると言ふを須るす。彼等が呼びて「死罪」といへる此かる重なる罪惡は初めは通常八個と算せられたりしが七を神祕の數として貫べる中世神學者等はつひに之れを七個の表に作り直したり。件の七個の罪表は學者によりて多少其の目を異にすれどもまづ自尊貪婪憤怒不貞の四罪はいづれの表中にも存せるを見る。あとの三罪は嫉妬誘街陰鬱疎懶 (Languid indifference) の四の中より補はるゝを常とせり。件の最後の疎懶は道徳上の懶惰無氣力意氣銷沈などを表する義にして此の罪は殊に當時の寺院的生活に伴うて起り易き性質のものたりし也。

此くの如く寺院的基督教漸次に西方に其の翼を張らんとしつゝあると同時に他方にはまた人は自由意志の力によりて自ら救拯を全うし得と主張せるベラシア

ス一派の神學上の論争及びアウグスティヌスの光彩ある倫理説等の影響を受けて一種異彩ある基督教的道徳の其の形を成し來れるあり。蓋しユスティヌス其の他の護法家は神の賠償及び信仰恩寵等に漸く重を置くに至りたれども此等諸觀念の上に築ける彼等の神學論はいまだ自由意志の論と公然相反する程には至らざりき。然るにアウグスティヌス(自紀元後三五四至四三〇)に至りて遂にベラシア一派の自由意志論と衝突して其の結果自由意志論は異端として當時の基督教界より排斥せらるゝに至りき。詳言すればアウグスティヌスは人は神祐なくしては神法を完うする能はざる者なりといふ一義を重視せしかば之れを當時の意志自由論と調和せしむるとの頗る難き位地に立ちたりしなり。さもあれアウグスティヌスは人の責任神の公義を唱ふる上より論理の必然として自由意志の必要なるを明かに知れり。而も一面神祐に重きを置きたりし彼れは如何にして此の二面を調和し得べきぞ。彼れこゝに於いてか所謂原罪説を按出して以爲へらく善惡を撰擇する實際の自由(アウグスティヌスの所謂自由は善惡いづれをも意志するの力にわらずして唯だ善をのみ意志する力を指せり彼れの見る所に

よれば最高の自由は悪を意志するとの不可能を含める也。ば人類の祖はアダムの
 とりの場合にのみ存したり。而してアダムは善を擇ばずして悪を撰びたるが故
 に吾人人間は未生以前既に罪業の汚染を受けたるもの此の罪業は神の無限の恩
 寵及び基督の賠償に藉らば永へに消滅の期なきもの也と。見るべしアウグス
 チヌスは意志の自由を人間の祖に歸してこゝに罪業の起因を認めたるを。原
 人既に罪業の種子を蒔きたるが故に人類一如の性を遺傳せる其の子孫たる吾等
 凡ての人間が生まれながらにして罪障の因縁を有するは自然の數なり。而して
 人は自力にては件の罪障の因縁を脱離する能はず。之れを脱離し得るは唯だ神
 恵に縁るの一事あるのみ。神恵無くば人は神を愛せよといふ最大誠を守る能は
 ざるべく此の一誠を守る能はずば彼れは全律法を破れるものとなるべく隨つて
 永へに罪業の纏綿を脱却し得ざるべし。かくの如くば人如何ばかり外形上の道
 徳を守るとも其は何等の道德的價値をも有せざるべし如何にとなれば一念の正
 既に闕如したれば也。凡そ信仰より出でざるものは皆罪なり。而して信仰と愛
 とは相交錯し分離しがたきものなり。信仰は愛に培はれ愛はまた信仰に培はる。

信愛相結びて望となる。望とは愛の對境たる神の圓滿を追慕する喜悅の情をい
 ふ。アウグスチヌスはパウロと共に此の三者をもつて基督教道德の三要素と
 なしたり。彼れはまた之れに加へて古代の四徳即ち智慧、適宜、勇氣、公正の四徳を
 も傳説のまゝに攝取しき。されど彼れは此の四徳を以て愛神といふ根本道念の
 其の相を異にして現れたるものに外ならずと見たり。云く、適宜とは愛が其の對
 境即ち被愛者の汚染を受けずして清く自ら守るの愛をいひ、勇敢とは愛するもの
 の爲めに凡ての事を忍ぶの愛をいひ、公正とは唯だ愛するものに奉仕して其の度
 を守るの愛をいひ、智慧とは愛を幫くるものを撰びて之れを妨ぐるものを棄つる
 の愛をいふと。愛神は救はれたる靈人(人)にありては悦樂の源泉にして眞の自愛こ
 ゝより發達し隣人に對する愛またこゝより發す。神を靜觀するとは靈魂發達の
 最高階段にして唯一の智慧、唯一の幸福也。この神祕觀はストア派の哲學觀と好
 照徹をなす。思ふにアウグスチヌスの學說にて愛神といふとが行爲に、道德的
 價値を附する唯一の要素として、特殊の地位を占めたるは猶ストア派の學說にて
 至善に對する知識が特殊の位地を占めたると同様の趣きなり。而して實際の教

訓の其の學說の如くに嚴ならざる點も二者相若けり。蓋し道德家としてのアウグスティヌスの主なる事業は基督教の出世間の精神と世間的文明を抄進するの必要とを調和したる一點にありともいふべし。其の一例をあぐれば彼れが聖經の文字通りの解釋に反して兵役刑罰などを是認したるが如き又前にいへる「訓」と「誠」との區別を重んじ獨身禁欲等を過重する一般の見に抗してむしろ婚姻其他の自然欲を適度に満足せしむる事の非ならざる所以を辯護したるが如き是れなり。但し彼れが罪業の汚染を避くるの、方法として獨身禁欲等を最良法と見たりしは勿論也。

蓋しプラトーン^の四徳表を基督教の思想に當て嵌めんとする上のアウグスティヌスの企圖は彼れの師アムブロース (Ambrose, 自紀元後三四〇至三九七) の影響に原けるものなるべし。アムブロースの “De Officiis Ministrorum.” と題する論述の中には明かに基督以前の道德學者の案に藉りて基督教の義務を組織的に説かんとしたる最初の企圖ありしを見る。今彼れが所謂四大徳説を取つて明かに其の摸範たりしシセロの義務論と比較するは趣味あることなり。さて彼れの四徳説を

述べんに第一に智慧を思索的のものと限れば基督教徒の智慧は無論主として神學的のものを意味す即ち至上の眞理は神にして隨つて神に對する信仰は智慧の基礎なり。第二に剛毅は詮ずる所禍福の誘惑に抵抗する意志の堅固、罪惡との戦ひに於ける不斷の不動心にしてアムブロースは又之れを軍事上の武勇の義にも適用したる事あり第三に適宜^{即ち} “Temperantia” の徳は凡ての行爲に於いて適當の度合を守るの義にしてこはシセロの説く所と差異なし唯だこゝには謙讓^又は抑損といふ新しき徳の加はるありて多少その觀念の變ぜられたるのみ。最後に公正の徳はストア派の万人の利害は自然に相關せるものとの思想より進んで更に博愛主義の高潮に達したるものなり。其の意にいふ神の造りたまへる世界は万人の共有すべきもの、人は須く共通の利益の爲めに盡くすべきもの、富は濫賞すべからずして而も施與賑恤の爲めに貧を招くは耻づべき事にあらざと。以上は即ちアムブロースがシセロを範として作れる基督教的四徳表なり。彼れは此等諸ろくの基督教の道德の不離の點に重きを置きて脱きたりしが、さりとてアウグスティヌスの如くは是等諸々の徳を愛神の^一源に歸するの^見を取らざ

暗黒時代に於ける教會道德

アムプロース、アウグスティヌス以後の教會學者は概ね皆この二家の影響を受けて四德表を採り用ひたり。或はアウグスティヌスの先例に倣つて信望愛の三德表を件の四德表と並び用ひたるものあり加ふるに預言者イザヤが教へたる靈の七德表までも輸入したるものもありき。而して此の激しき道德的戰場に於ける悪魔軍の主罪の數はた七個或は八個と算せられていかめしげに陣揃ひせられたりしを見る。かゝる主罪表は前にいへる如く専ら僧侶といふ一種特別の經驗によりて作られたるものにして延いて一般の基督教徒に移されたるものなり。さて當時の所謂罪には二種の別ありき一は死罪(“Deathly sin”)にして他は釋し得らるべき罪(“Venial sin”)をいふ。而して此の別は教會員と平民とを通じて齊しく適用せられき。當時の基督教會が是等の罪を取扱ふやあのづから司法的となり而して西羅馬帝國の瓦解後社會の紊亂に際してこの制益、堅固に組織せられて教會の一大勢力となり後には神教組織とまでに發達して中世紀の歐洲を支配する

一部の統治者となるに至れり。所謂死罪とは或一定の本文に従うて自ら懺悔懲戒の苦を経るにあらざれば永遠の墮獄より脱しがたき罪をいひ釋し得らるべき罪とはかゝる苦楚を受けずとも祈禱、施與、斷食制等を嚴守するとによりて保釋し得らるゝ罪を指す。而して此等懺悔の必要上より所謂懺悔本なるものは紀元後七八世紀の間に於いて一つには古來の習慣により一には教會會議のうへの公然の布令によりて愛蘭土、ブリテンより佛蘭西、日耳曼に波及して歐洲一般に用ひらるゝに至りき。是等懺悔本なるものは初めの程は單に諸るゝの罪を記したる表及びそれゝの罪に對する教會の處罰法を記したるものに過ぎざりしが漸次之れに據りて良心の疑はしき種々の場合をも論議し決定するの風を生ずるに至りぬ。後ち十四世紀より十五世紀へかけて發達の頂に達せし決疑學なるもの組織さるゝに至れる基礎は實にこゝに成りしなり。(決疑學とは或一定の正邪の標準によりて作りたる法規に照らして一行爲の正もしくは不正を決する學問の義なり)。

備考 一、これら處罰法の二三を掲げて參考させんに云く發達及び醜陋の罪を犯

せるものは之れが懺悔のしるしとして三日間より四十日間以内の断食をなさざるべからず、云く男女間の不倫罪を犯せるものは数年甚しきは一生運に亘りての懺悔を要し、殺人罪は其の動機と事情とに従うて一ヶ月以上十年以内の處罰を受くべし、云く僧侶教會員の刑は一層峻嚴にして教會員を殺せるものは二重の刑を課せらるべし、云く迷信の行あるもの(人の死したる場處に草を燃きたる如き是れ當時行はれたる迷信の一例)は一年間の刑によりて僅かに其の罪を償ふを得べしと思ふに當時は教會自身の一部が既に墮落の境にありしが故に此の繁雜にして嚴酷なる一種の訓練は一層切に必需せられたりしならん。

思ふに基督教會が中世紀初代の無政府的暗黒社會に道德的秩序を維持すといふが如き大事業を爲さんには此の峻嚴なる一種の教會的法律を編まざるを得ざりしなるべし。されどこの一種の制度が道德をして人心内より來らざる外形的のもの、法律的のものとならしむるの危険を有したりしは言ふまでもなし唯だ一側にアウグスチヌスの如き道德のインワードネスを熱心に主張する學者ありて多大の勢力を及ぼし延いてはアウグスチヌスぶりの見地をおぼろげながらに襲へる種々の學者の、西羅馬帝國滅亡よりスコラ派興隆に至るまでの間に出て、件の惡傾向に對峙したりしはせめてもの幸なりきといふべし。

スコラ學派の倫理説

スコラ學派の倫理思想は一般の哲學思想と同じく此派の最大の學者たるトマス・アキナスに至りて其の發達の頂に達したり。されどトマスの倫理説を述ぶるに前きだちまづ彼れに至るまでの思想の徑行を一瞥する要あり。この故にこゝにはまづ中世紀最初の哲學者と稱せらるゝスコートス、エリゲナ(紀元後八一〇ごろより八七七ごろに至る)の倫理説の叙述に其の端を啓くべし。もとよりエリゲナをスコラ哲學者の一人と見るは其の大體の上よりなると論なし。彼れ他のスコラ哲學者に先きだてると凡そ二百年其の思想の調子のちのづから獨立不群なりしと知るべきなり。概していへばエリゲナの思想はプラトーン及びプロチノスの哲學に發源す。随つて彼れが倫理の思想はた夥しく消極的禁欲的なる新プラトーン派の色彩を帯びたり。彼れ云く眞に在りといはるべきものは唯だ神のみ。万有の存在するは畢竟神の顯現と見るの外なく神の自家顯現を離れては一物の存在あるなし。云く惡は本來實在せるものにあらず即ち非實在也。其の實在すと見ゆるは唯人の自らの作れる迷誤の境然らしむるのみ。曰く人生